平成 29 年度

日本文理大学
「地（知）の拠点整備事業」年次報告書

おおいた、つくりびと

日本文理大学COC事業

NBUが大分で育む、豊かな心と地域愛。

体感。感動。感謝。

おおいた、つくりびと

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、
素晴らしき大分県が、私たちのキャンパスです。

NBU日本文理大学が取り組むCOC事業

「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。

お金やモノだけでは図ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。

日本の未来を担う若者ができることは？

きっと、その答えはひとつではありません。

だからこそ今、私たちは動き始めます。

そのステージは、私たちの大学がある大分県。

大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。

私たちは自分の力を信じて未来を拓く

そんな、『おおいた、つくりびと』になりたい。

文部科学省 地(知)の拠点

NBU NIPPON BUNRI UNIVERSITY 日本文理大学

おおいた、つくりびと

目次

1.　事業概要・目的・計画

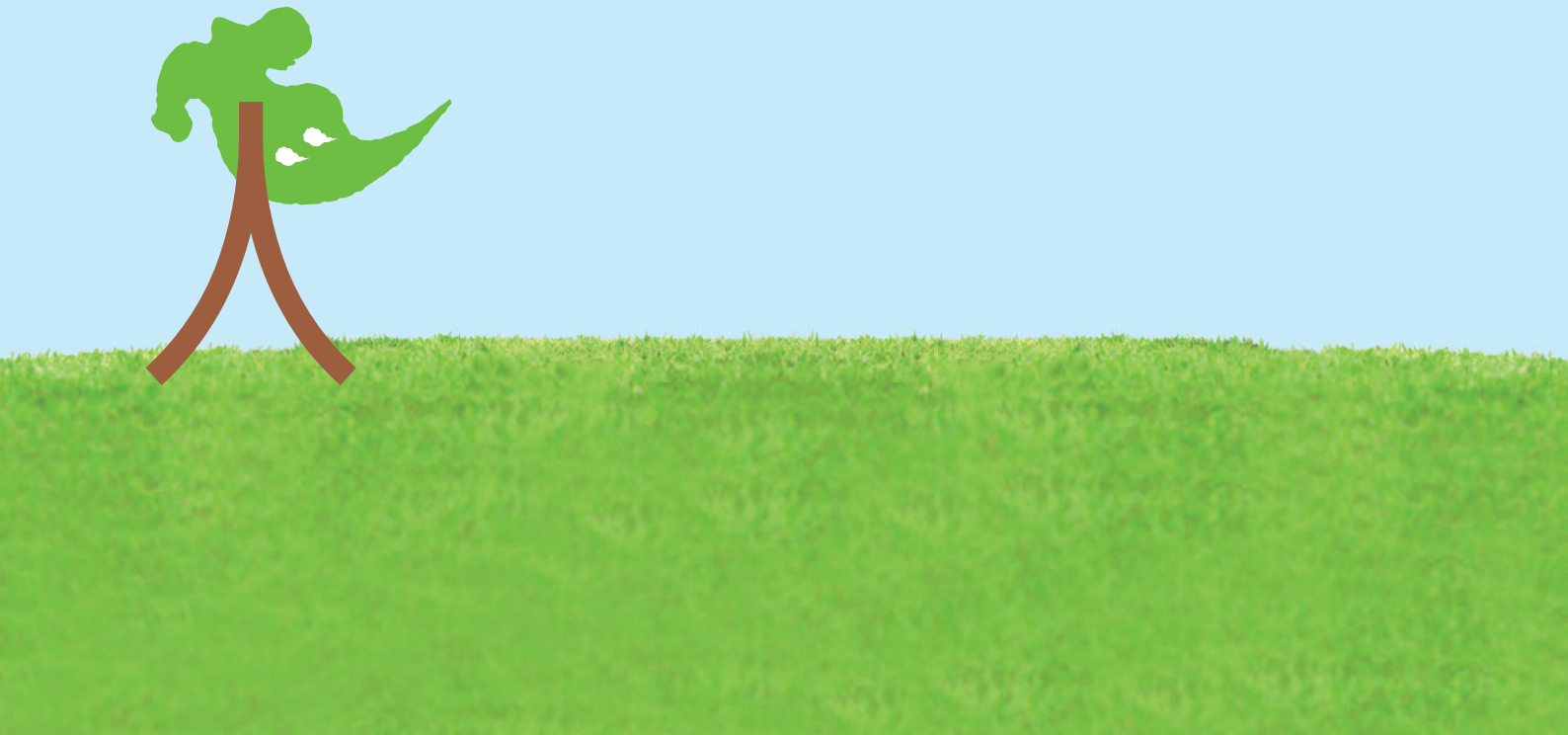
2.　大学ＣＯＣ事業プロジェクトシート

3.　地域志向プロジェクト研究
　　卒業研究・論文　地域志向関連リスト

4.　大学ＣＯＣ事業 活動報告

5.　事業検討・評価委員会
　　連携推進会議

6.　大学ＣＯＣ事業 メディア掲載 リスト



1. 事業概要・目的・計画

平成 29 年度 事業計画

平成 29 年度 大学 COC 事業活動紹介

平成 28 年度 外部委員 事業評価報告

平成 29 年度 COC 事業シート

平成 30 年度 COC 事業シート

達成目標の進捗状況

地域志向科目について・地域志向科目一覧

教育における数値目標

・「地域創生人材」育成にかかる自己評価ルーブリック

・ ジェネリックスキルの育成

【事業概要】

日本文理大学における地（知）の拠点整備事業「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」は、本学の建学の精神である「産学一致」に「人間力の育成」「社会・地域貢献」を加えた教育理念に基づき実績を上げてきた産業界・地域社会を意識した実践活動を主体とした全学での人間力教育をベースとして、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」育成へ発展させ、これを地域との実践的協働活動により実現する事業である。県内の少子高齢化が深刻である地域での「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を可能とする教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域力の向上につなげるものである。

【目的】

本事業の全体の目的は、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成することであり、具体的には、以下の通りである。

Ⅰ．教育

大分県内の少子高齢化が深刻であり、本学から 30 分圏内の大分市佐賀関地区及び 1 時間圏内の豊後大野市での「体験交流活動」＋「課題解決に必要な知識の修得」＋「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を学修のサイクルとした教育体系に再編、確立する。また、これらの学修サイクルにおいて、学部、学科横断型の教育カリキュラム体系（副専攻制度）、連携ゼミ活動を可能とする体制を合わせて確立する。さらには、正課外学習活動も本学における人材育成（ディプロマポリシー）においては重要な役割を果たすことから、大分の豊かな自然を活用した教育・社会貢献活動である「大分チャレンジアワード」制度を正課外プログラムとして創設する。以上の取り組みにより、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編を実現し、地域創生人材を輩出する。

Ⅱ．研究

本学の限られた研究資源（人材、研究時間）の中で、地域の課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを「産学官民連携推進センター」を窓口として完成させる。地域ニーズに対応できるよう大学が持つシーズをチームプロジェクトとして編成し、必要としている企業・地域とのマッチングを図る。これらの取組により、研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域の課題解決につなげる。

Ⅲ．社会貢献

学生の正課活動と正課外活動をリンクさせ、県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整え、学生ボランティア活動がさらに有効なものとなるように発展させる。また、地域貢献活動や公開講座を拡充し、行政と連携し、「地域創生人材」育成のための「県民参画講座」を開講する。これらの取組により、地域との実践的協働活動の体制を実現し、地域再生・活性化を推進する。

Ⅳ．全体

以上の取組を統括し、学長のリーダーシップのもと、教育改革・改善の調整・推進にあたる学長室を有効に機能させる。学内の全学部・学科及びセンター・部局の連携を促進、調整するほか、「自治体」「地域住民」「地域企業」「関係財団・NPO」等のステークホルダーとの横の連携を強化し、本事業目的を実現するためのそれぞれの強みを活かした「実践的協働学習体制」を構築し、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革、ガバナンス改革を実現する。

【平成２９年度事業計画】

I. 教育

① 4～3 月　正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルの取り組みを実施し、学修サイクル体系の拡充化

② 4～3 月　大分をフィールドとした正課外活動の場の増加を図り、「大分チャレンジアワード」を運用

（大分市佐賀関地区周辺での活動：①②共通）

・学生地域活動拠点の運営（2 箇所、関地区および木佐上地区）

・以下の前年度までの教育活動の内容を見直し、活動を改善、充実化

・1 次産業体験活動（農業漁業）、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動、NPO の経営支援の実施

・学生と地域の意見交換の場である「さがのせきローカルデザイン会議」の定期的な実施

・地域コミュニティの活性化活動（福祉活動、地域づくり活動、商店街活動）

・課題解決型学修による地域支援ものづくりの実施及び成果の還元活動

・高齢者向け学生 IT 講習会の実施

・総合型地域スポーツクラブの支援活動の実施

・課題解決型学修による 6 次化活動

（豊後大野市での活動：①②共通）

・学生ツーリズム等のための学生地域活動拠点の運営

・以下の前年度までの教育活動の内容を見直し、活動を改善、充実化

・1 次産業体験活動（農林業）、集落・地域におけるコミュニティ維持活動

・地域でのサービスラーニング体験活動（観光・コミュニティビジネス・福祉支援等）

・課題解決型学修による地域支援ものづくり、コミュニティビジネスの実施及び成果の還元活動

・課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動

・エコパーク等学生ガイドの育成及び課題解決型学修によるエコパーク構想の取り組み実施

II. 研究

③ 4～5 月　地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択

④ 5～3 月　地域志向プロジェクト研究の実施

III. 社会貢献

⑤ 4～3 月　地域人・社会人向けの地域創生リーダー養成制度のシステム（履修証明制度）の試験運用を実施

⑥ 6～2 月　エコパーク、外来生物除去等に関連した地域住民の知識を深めるワークショップ講座、ツアーの実施

⑦ 6～2 月　事業協働機関と連携して、実践を伴う地域人・企業向け地域創生人材講座の実施

⑧ 6～3 月　地元企業の大分ＣＳＲプログラムとして、大学・学生と企業が協働した地域の子ども向け講座の企画、実施（大分のニーズに合ったＣＳＲの提案）

⑨ 11～2 月　未来志向型の県民対象公開講座「大分学・大分楽」の実施

IV. 全体

⑩ 4～3 月　学長室（事業推進ＷＧ）による事業推進・統括・情報発信を実施し、全学での事業展開化

⑪ 4 月、2 月　学生のジェネリックスキルの向上を計測する学生能力アセスメントテスト（nEQ、PROG）と専門的課題解決力の向上を計測するアセスメントを連携して実施し、地域創生人材としての能力を体系的に測定する方法を試行

⑫ 5 月、10 月　連携自治体との連携推進会議を開催

⑬ 2 月　学修成果・地域志向プロジェクト研究等の取り組み成果の発表報告会を連携・関係機関と共同で、それぞれの対象地域において開催

⑭ 3 月　地域志向活動推進のためのＦＤ／ＳＤ研修会を実施

⑮ 3 月　年次成果報告書を発行、配布し、地域や関係機関に広く取組成果を周知

⑯ 3 月　外部評価委員会を開催し、本年度の取り組み対する評価の実施

文部科学省 地(知)の拠点

NBU NIPPON BUNRI UNIVERSITY 日本文理大学

日本文理大学 COC 事業
『豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成』

NBU が大分で育む、豊かな心と地域愛。

体感。 感動。 感謝。
おおいた、つくりびと

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、素晴らしき大分県が、私たちのキャンパスです。

事業概要

本事業の目的は、大分県の地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」=" おおいた、つくりびと" を育成することである。

【教育分野】 大分県内の少子高齢化が深刻な地域を主な対象に「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルによる教育体系を確立し、地域創生人材の輩出をはかる。

【研究分野】 地域課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを完成させ、地域の課題解決につなげる。

【社会貢献】 県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整えるとともに、行政と連携した「県民参画講座」を開講し、地域再生・活性化を推進する。

以上の各分野の取り組みを通じて、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編を行うことで、教育分野と社会貢献活動との有機的な接続と、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点の形成を目指す。

連携自治体

『おおいた、つくりびと』が取り組む 地域再生・活性化７つの視点

1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化
2. 人口減少社会を支えるための先進的な "ものづくり"
3. 自然の積極的な活用による保全と地域活性化
4. 商店街の活性化による地域振興
5. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
6. NPO 法人の活動・経営支援
7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（６次化）

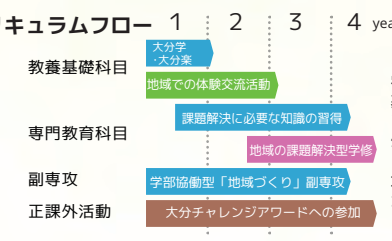
教育 × 体感

「主体的な学びのスタイルへ」
地域への愛着を持ち、主体的に課題を発見し、専門的なスキルを活用して住民や関係者とともに、地域の課題解決に取り組むことができる人材を育成するために必要な力をつける学修サイクルの確立を目指す。

「地域創生人材」育成のための学修サイクル

- **1 年次** 体験交流活動 — 地域に愛着を持ち、地域の魅力を感じる
- **2 年次** 課題解決に必要な知識の習得 — 教養基礎及び専門教育科目の再編
- **3～4 年次** 課題解決型学修 — ゼミナールや卒業研究で地域の課題に取り組む

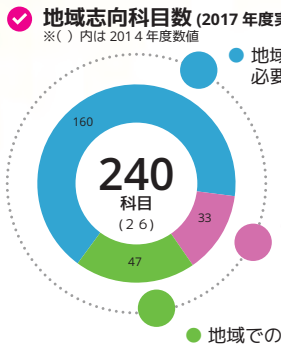
カリキュラムフロー



学修サイクルにもとづき、教養基礎科目、専門教育科目を配置。また、学部協働型副専攻、正課外活動「大分チャレンジアワード」など、地域に愛着を持ち、地域の課題解決に取り組むことが出来る人材を育成する。

地域志向科目数 (2017 年度実績)

※( ) 内は 2014 年度数値

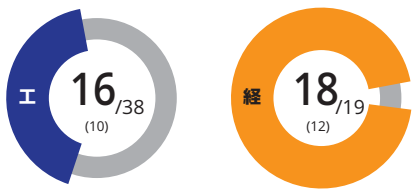


- 地域における課題解決に必要な知識を習得する科目
- ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目
- 地域での体験交流を教育内容に含む科目

【最終年度達成目標】
地域志向科目を200科目以上に設定。地域志向科目をカテゴリー分類し、効果的な学修サイクルとなるように、各科目を設定。

地域志向のゼミ活動状況 (2017 年度実績)

※( ) 内は 2015 年度数値



【最終年度達成目標】
●工学部における「プロジェクト系科目」(1~3 年に開講) において、地域実践活動を行う取組を拡充し、「卒業研究」において地域の課題解決を扱うプロジェクト研究を全体の半数以上に設定。
●経営経済学部における「ゼミナール」(2~4 年に開講 必修) の教育内容を見直し、地域実践活動を中心としたゼミを全体の半数以上に設定。

COC 事業プロジェクトの進捗

2o15 年度 31 プロジェクト → 2o17 年度 41 プロジェクト

地域再生･活性化の７つの視点に教育に特化した視点を加えた計８テーマに対して、卒業研究、ゼミ活動、正課外活動などを中心に、42 プロジェクト（2017 年度）を実施。

詳しくは、
年次報告書（http://coc-nbu.jp/annual-report）で公開

特徴ある地域志向カリキュラム科目の一例

教養基礎教育における地域志向科目の全学必修化

「地域創生人材」育成のための学部・学科によらず根幹となる科目の全学必修化により、すべての学生が地域に関する科目を卒業までに 12 単位以上履修することとした。地域学の導入科目である「大分学・大分楽」（１年前期）を 2015 年度入学生より全学必修としている。また、全学共通の教養基礎科目の必修科目のうち、６科目 10 単位の教育内容を見直し、地域志向科目として設定した。

『大分学・大分楽』
多様な講師陣より講話を受け、大分の魅力を多面的に学び（大分学）、楽しみ（大分楽）、魅力的に育む（大分楽）ための導入科目。

『産学一致の勧め』
大学と産業界、社会、地域をつなぐことを意識し、良き社会人として活躍するキッカケとする科目。

『社会参画入門、応用、実習１，２』
ｱｶﾃﾞﾐｯｸｽｷﾙ習得の他、早期に社会との関わり方を体感するため、県内企業等の取材、業界研究等の実施や、大分県・大分市の身近な政策課題に対しての企画提案など、社会で必要な人間力や社会人基礎力を養う科目群。

学生の視点で捉えた豊後大野の魅力 ～豊後大野市の地域資源を活用した『サービスラーニング』科目への展開～

地域資源観光に経営の概念を取り入れ、地域が顕在的・潜在的にもつ魅力を観光資源として発掘・利活用し、まちづくりマーケティングによって観光サービスを持続可能な事業へとプロデュースし実践する能力を備えた人材の育成を目指し、サービスラーニング科目群（経営経済学科）では、視察やヒアリングをとおして豊後大野の観光における地域資源の魅力の発見や現状、課題を議論するなどし、学生おすすめのツアープランを提案したり、食と豊肥本線を主軸とした豊後大野の魅力を伝えるプロモーション活動を行っている。

「ものづくり」から見えてくる地域課題 ～工学部専門基礎科目『ロボットプロジェクト』科目での実践～

人口変動にともなう医療福祉問題、産業構造の変化や生産の効率化など様々な社会の問題に対して、学生自ら課題を見つけ、「もの」を創ることで課題解決に取り組むことを目的に、自由な発想をもって創造的に問題解決に取り組める人材を育成するためのプロジェクト型の教育プログラム作りを目指している。その中では、「地域に生きるものづくり」をテーマとして大分市木佐上地区との連携や、「シカケ（仕掛け）」をとおして社会課題にとりくむ「シカケプロジェクト」などを実践している。

研究 × 感動

○特徴ある地域づくりのための地域・企業との共同研究の推進
○複数教員によるプロジェクト型研究の促進

２０１５年度：４プロジェクト、２０１６年度５プロジェクト、2017 年度３プロジェクト

教育、社会貢献活動を通じて見つけた『地域再生・活性化 7 つの視点』の地域の課題解決に向けて、専門分野の知識・スキルをもって研究に取り組み、特色ある地域づくりに取り組む。異なる分野が融合することによる「プロジェクト型研究 (地域志向研究プロジェクト)」を主に、ゼミナールでの活動（経営経済学部）、卒業研究（工学部）、地域との共同研究などに積極的に取り組んでいる。

2017 年度 地域志向研究プロジェクト

地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究

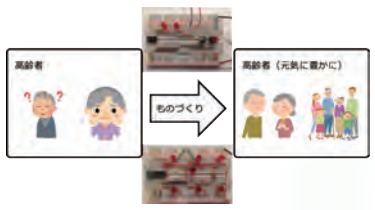
（経営経済学部　連携自治体：豊後大野市）

本学学生が提案している観光ツアーなどが実現可能であるかを判断するため、2016 年度では、アンケートデータに基づいた需要予測分析を行い、グルメを含むコースへの来訪意向が強い一方、支払意思額が低い傾向であることが分かった。本研究では、この問題を踏まえ、地域資源を活用した観光に対する支払意思額を高めるためにどのような付加価値をつけるべきかを分析し、地域資源を用いた観光需要の掘り起こしに貢献することを目的とする。

高齢者向けものづくり教材の開発

（工学部 情報メディア学科、機械電気工学科、建築学科　連携自治体：豊後大野市）

2016 年度から高齢者向けのものづくり教材の開発を行っている。昨年度は、高齢者及び施設担当者からのヒアリングを中心に、教材の開発を行ってきた。「目で見て、耳で聞いて、触って操作して」楽しめる教材開発を目的に、試作教材を高齢者向けに改良してきた。高齢者への配慮に関してはある程度の要望を実現できたので、今年度は高齢者から頂いたテーマに関する要望を実現し、教材の数を増やすことを考えている。昨年好評であった子供たちとの合同ものづくり教室も実施回数を増やしたいと考えている。



地域経済を考慮した地域課題取組みに向けたプラットフォーム構築

（工学部 情報メディア学科、機械電気工学科、経営経済学科　連携自治体：大分市）

これまで個々の課題解決で産まれた研究成果を統合するためのプラットフォーム開発を進め（2015 年度・2016 年度「共通プラットフォームによる効率良いICT 技術の利活用」)、「要介護者のコミュニケーション支援」についての研究成果を蓄積した。今回は、成果を他分野に展開すべく「地域経済」における課題解決を「シカケ」という概念を用いて、工学的な観点と経済的な観点を組み合わせ、地域経済を含む活性化に向けて進めるための学内における「知」のプラットフォームとして構築することを目標とする。

〒870-０３９７　大分県大分市一木１７２７
Ｔｅｌ：097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp

【ＣＯＣ事業】
Ｔｅｌ/Ｆａｘ：097 - 5２４ - ２６６３(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

QR ACCESS
coc-nbu.jp

NBU 日本文理大学

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでは、はかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

日本文理大学　地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）
平成 28 年度　事業検討･評価委員会　事業評価 報告書

平成 29 年 3 月 30 日
日本文理大学 大学ＣＯＣ事業
事業検討・評価委員会

評価基準：　S:特筆すべき進捗が見られる。
A：順調に進んでいる。
B:やや順調に進んでいる。
C:やや遅れている。
D:遅れている･未実施
（総合評価、事業評価については、各委員の評価をもとに(別紙)にもとづいて判定を行う。）

【事業全体 総合評価】

総合評価：　A
● 概ね順調に進んでいる。今後、地域における取組の広がり（横）と継続性（縦）について、県、市町村の取組を促すとともに、学際的な視点からの課題解決に向けた政策提案なども期待したい。 ● 教育、研究、社会貢献すべての項目において、多彩な取組が全学的に推進され地域のための大学としての成果は大きいと思います。今後も柔軟で斬新な発想で行政や関係団体等に積極的な事業提案をされることを期待しています。また、より効果的・効率的な事業を展開するためには事業の再構築等も検討する必要もあると思います。 ● 意欲的に活動を展開している。ウィングを広げ過ぎて事業過多になることを心配するが、一年ごとに充実度を増している。 ● 学生がプログラム参加を通じて大分を愛するマインドを養い、卒業後に県内就職等を通じて貢献するようになることを願っています。 ● 二年目では、多岐にわたり地域との問題点解決のための接点ができたと思われます、後はそれぞれの分野の研究成果にどう互換性を持たせ地域の問題点をまとめ上げるかが、課題になると思われます。来年度の地(知)の拠点の整備事業を楽しみにしております。 ● 地域プロジェクト実施で、４年生が１年間関わり続けても、卒業でまた１から関係づくりをしないといけなくなるケースが出てくる。１年生から４年までの学生グループを編成し、プロジェクトにあたっていくと継続性も生まれるし、学生同士で引き継ぎなどしやすくなるのでは。
委員評価：S（1)、A（6)、B（0)、C（０)、D（０）

教育・研究・社会貢献　各事業評価

【教育事業評価】

事業評価：　A
● 地域志向科目数が目標 180 に対し 222 科目で、全体の 40 %、ゼミの 60 %となるなど成果をあげているが、副専攻制度、正課外活動の導入が目標に達していない。 ● 学修サイクルの再編、学部・学科横断、学年縦断の教育を通じて、大分に愛着を持った優秀な地域創生人材が育成されていることから、今後も事業の着実な進捗と県内就職率のさらなる向上を期待しています。 ● 正課教育として、1 年生時から「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の習得」などをとり入れ、本市では全域で活動展開していただいている。貴大学を挙げた意気込みと学生の真面目な活動は、一年ごとにステップアップしている。 ● 地域創生人材育成のための学修サイクルの確立など、カリキュラムの再編に取り組み、効果が期待できる。 ● 商店街の活性化に関して、これまで実施したプログラムでも十分に教育効果は果たしていると思われるが、中心市街地の活性化には若者の貢献が期待されていることから、今後より積極的に関与されたい。 ● 地域での新しい問題点の発掘を行い、解決方法を探り、発見し、行動する、そして発表することにより、学びの PDCA のサイクルが出来上がっている。 ● 大分市佐賀関など連携地域との体験活動を通じて、さらなる信頼関係も築かれている。年間を通して関わりながら、学生の積極的な意識の向上がみられた。
委員評価：S（2）、A（4）、B（1）、C（0）、D（0）

【研究事業評価】

事業評価：　A
● 地域との共同研究を行う教員数が目標に達している。また、積極的に取り組む教員が増えたことが教育項目の地域志向科目数増にもつながっている。 ● 本市では、貴大学との有害鳥獣対策に関する連携事業として、安価で地域住民にも簡単に操作できる IoT を活用したわな検知器と通報システムの開発研究に取り組んでおり、その成果に大いに期待しているところですが、各地域にはそれぞれ特有の課題があります。今後も地域住民との積極的な交流を通じて地域課題を把握し、各専門分野の視点から地域の課題を解決するための住民や企業等との共同研究や活動が進められることを期待しています。 ● 徘徊老人の位置検出システム、見守りシステム、自然エネルギー利用型プラズマ農業の研究、生物多様性回復のための基礎的研究など、様々な課題にチャレンジしている。より完成度が高まることを期待する。 ● 地域との共同研究を行う教員数が着実に増加しており、この点においても全学あげての体制が整いつつあると評価できる。 ● 昨年より多方面にわたり研究開発ができ、地域創成の問題点を複眼的に解析している。 ● 大学本来の事業である研究も、地域課題に直面したテーマに様々な機関と連携して取り組んでいる。
委員評価：S（1）、A（6）、B（0）、C（0）、D（0）

【社会貢献事業評価】

事業評価：　A
● 地域向けボランティアの活動数が目標を上回っている。また、無作為アンケートによる県民の本学に対する本事業分野の地域貢献度の評価が４２．１％と目標を大きく上回っている。 ● 教育活動のほか、学生参加の公開講座、地域での体験活動や地域住民との意見交換などの取組により学生の社会貢献に対する意識が向上していることは高く評価されると思います。 ● 豊後大野市全域で活動している。市民も日本文理大学の認知度が高くなっている。若者が地域に来て、地区民と話し、交流することに意義がある。価値がある。 ● 地域で求められているのは、地域活性化のための産業振興や人材育成のために異分野同士のマッチングや多組織からなる協働を取り計らえるコーディネーターであると感じている。そのような人材の育成をプロジェクトの中で進めて頂ければありがたい。 ● 小学生からお年寄りまで幅広い世代と交流し、様々なプログラムにより地域貢献を果たしている点は高く評価できる。今後は中高生等、更に対象を拡げることを期待したい。 ● 学生が地域に入ることにより、いろんな効果があったと思うが、何と言っても地域を巻き込み、地域の人たちに希望を与えたことが最高にすばらしい。 ● なかなかすぐに結果がみえてこない分野・取り組みだと思います。県内各地の課題に取り組みたいところでしょうが、今行っている活動の対外的な成果も見据え質を上げていってほしい。県内で連携できるＮＰＯとのコーディネートの必要性があれば支援したい。
委員評価：S（3)、A（4)、B（0)、C（０)、D（０）

<u>事業検討･評価委員会　学外委員</u>

大分県 企画振興部 部長　廣瀬祐宏

大分市 農林水産部 部長　森本亨

豊後大野市 副市長　赤嶺謙二

（一財）セブン-イレブン記念財団　九重ふるさと自然学校 代表　川野智美

日本政策投資銀行 大分事務所 所長　和田康宏

大分県中小企業家同友会　代表理事　佐藤貞一

ＮＰＯ法人 おおいたＮＰＯデザインセンター 代表理事　山下茎三

(別紙)

総合評価、事業評価の算出方法

次式により評価点を算出し、総合評価・事業評価判定表により、判定を決定した。

評価点＝
（4.0× S 評価の数＋3.0×A 評価の数＋2.0×B 評価の数＋1.0×C 評価の数）÷　評価委員の数
※小数第２位を四捨五入とし、小数第１位までの数値で扱う。

評価点	>3.7	>2.7	>1.7	≧1.0	<1.0
総合評価・事業評価	S	A	B	C	D

平成29年度　日本文理大学　COC事業総括シート　（概要・教育）

			事業全体の概要	H29年度の実施計画	実施概要	成果	自己点検評価
概要			本事業の全体の目的は、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成することである。つまり、教育では大分県内の少子高齢化が深刻な地域を主な対象に「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルによる教育体系を確立し、地域創生人材を輩出する。研究では、地域課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを完成させ、地域の課題解決につなげる。社会貢献では、県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整えるとともに、行政と連携した「県民参画講座」を開講し、地域再生・活性化を推進する。学長のリーダーシップのもと、以上の取組を通じて、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革、ガバナンス改革を実現する。 本年度の目的は、上記の全体の目的を達成する最終前年度としてその全体基盤を完成させつつ、ＣＯＣ＋事業への成果の実質的な提供・連携を図ることであり、具体的な目的は右欄の通りである。	Ⅰ．教育 大分市佐賀関地区周辺及び豊後大野市での活動を中心にした「体験交流活動」、「課題解決に必要な知識の修得」、「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」からなる学修サイクルの全学での拡充を行い、体系化を図る。そのために必要な地域志向科目の精査・連携を強化し、全学科での学修サイクルの本格運用を行う。卒業研究、ゼミ活動等での「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を積極的に実施できる全学体制をとる。正課と連動した正課外活動である「大分チャレンジアワード」の拡充を図り、学生個々人に対応した地域活動プログラムを積極的に運用する。以上の取り組みを体系化したカリキュラムの運用を通じて、地域創生人材の育成体系の確立を図る。 Ⅱ．研究 地域志向プロジェクト研究の学内公募を行い、５月からH29年度の研究を実施する。前年度までの採択課題については、フォローアップなどを実施し、地域の課題解決に向けた研究成果を積極的に地域へ還元していく。また、本事業における地域課題解決に向けた研究成果をさらに実質化していくため、地域のＮＰＯや企業等を巻き込んだプロジェクトチームの編成を強化し、取り組みの加速化、成果の地域への波及を図る。 Ⅲ．社会貢献 地域が持つ魅力や課題に対する公開講座・ワークショップ等を実施することで、地域との実践的協働活動の体制の確立を図る。大学の「知」の地域への還元を行うため、履修証明制度を用いた学習機会の提供を試行し、社会人等の地域創生への意識の向上を図る。 Ⅳ．全体 以上の取組に対して、学長のリーダーシップのもと、学長室に設置した事業推進ワーキンググループ（WG）と関係各学科、部局との連携を図り、各取り組みが実効性を持つように事業を推進する。学内の体制構築、地域志向の制度設計の浸透、学外のステークホルダーとの連携強化の進捗状況を随時チェックし、必要に応じて改善を図ることで、地（知）の拠点、ガバナンスの基盤強化を図る。また、事業最終年度の前年度であることから、事業終了後の自立に向けて、地域ニーズへの対応において、継続と新規のバランスを図る工夫を、外部評価や地域との連携を通じて模索する。	事業最終前年度にあたる本年度は、「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」からなる学修サイクルの全学科での体系化がさらに進んだ。本年度は多くの新規教員が着任したが、地域志向のプロジェクト活動、ゼミ活動に積極的に参加していただくことで、事業の組織的展開を継続した。正課外活動については、「大分チャレンジアワード」の本格運用3年目となっている。社会貢献活動についても、環境保全に関する各種公開講座、企業向けの地域創生人育成の講座等を継続したほか、企業と大学が共同で実施するCSR活動を試行した。また、学生活動においても、環境教育や地域の小学生に対する体験教室など学生活動の幅が広がり、また、企画・運営する機会が増加している。 それぞれの活動については、当初計画をほぼすべて達成することが出来てた。あわせて学長のリーダーシップのもと、学内の地（知）の拠点に向けた体制強化とガバナンス改革が着実に進行した。 また、COC+事業との連携も進み、本学COC事業のノウハウに基づく協働開発科目の実施や県委託事業への積極的な参加（本年度5件）も行われた。COC+事業（代表校：大分大学）の文部科学省中間評価を受審した。	本年度における取り組みの成果としては、 ○教育活動：「地域志向科目」として240科目を開設し、最終のH30年度の目標（200科目以上）を既に上回る科目を開設できた)。地域志向のゼミ活動を行う研究室・ゼミ数が34研究室・ゼミとなり(全57研究室・ゼミ中、59.6%）、最終年度目標の50%を既に上回っている。プロジェクト活動として大分市佐賀関地区周辺及び豊後大野市全域を中心に、40プロジェクト以上の活動を行った。 また、「大分チャレンジアワード」については、受講者の勧誘等により今年度は27名修了の大幅増となり、累積到達目標(70名以上)を超えている。 ○研究分野：地域志向プロジェクト研究の公募・採択を行い、3件の地域志向プロジェクト研究を実施した。それぞれのプロジェクトとも一定の成果をあげており、教員間連携による地域研究の可能性が広がってきた。次年度も同様の規模の地域志向プロジェクト研究を展開する。 ○社会貢献活動：学生参加型の公開講座、企業向けの人材育成講座を実施し、地域の方々と学生・教員との意見交換の場を設けることで、地（知）の拠点としての位置づけを地域に発信、理解を得ることが出来た。また、これらの講座に学生が参加することで、地域課題へ取り組む姿勢の意識が変化した(12講座開設)。 ○全体：ホームページ等や域外での成果発表通じて、学内外への事業内容の周知のほか、新聞・メディアにおいても活動内容が報道されている。COC+事業への展開も進み、県内他地域での活動へ拡がりをみせている。また、FD/SD研修会を実施することで、学内外のCOC事業へのさらなる協力体制の構築を行うことで、地域志向の学生教育を実施する体制が完成した。 ◎文部科学省COC+中間評価の結果、「A:計画通りの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。」の評価を得、優れた点として、「本事業の趣旨を理解し、COC+大学、COC+参加校、大分県も含めてしっかりと連携している。特に、日本文理大学との連携ー相互学修は高く評価できる。」が挙げられており、本学の取組が高い評価を得た。	A

		計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価
教育	①	4～3月	正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルの取り組みを実施し、学修サイクル体系の拡充を図る。	正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を積極的に実施し、学修サイクル体系の本格運用、地域志向科目の拡充を図る。あわせて、活動重点地域である大分市佐賀関地区、豊後大野市の学生地域活動拠点を前年度に引き続き運営し、学生活動を活発化する。また、随時科目間調整を実施し、内容の改善、充実を図るとともに、ゼミ活動や卒業研究等での「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を充実させる。	正課教育における学修サイクル、学生地域活動拠点を本格運用することで、学生の地域志向性を高め、地域との連携体制を固めていくと同時に、ゼミ活動や卒業研究等での「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を充実させることができる。「地域創生人材」育成に向けた取り組みを強化することで、学生の豊かな心と専門的課題解決力を高めることができる。以上の取り組みにより、地域志向科目数の達成目標（全科目の4割）を超える科目数を運用することができる。	地域学科目である1年前期教養基礎科目「大分学・大分楽」をH27年度入学生より、全学必修実施科目として実施。講義は学内の関係教員がオムニバスで担当したほか、29年度は大分商工会議所の姫野会頭が1コマ、大分合同新聞社の佐々木氏が1コマ担当した。 全学科において、学科の特性に応じた規模の「地域志向科目」による学修サイクルを実施している。29年度は大学生観光まちづくりコンテストを契機として、課題解決型学修に取り組むゼミが大幅に増えるなど、地域の課題解決に向けた取組が盛んに行われている。 また、佐賀関・関あじ関さば通りコミュニティ食堂「よらんせえ～」内、佐賀関・木佐上地区「木佐上コミュニティセンター」内及び豊後大野市清川町「ロッジきよかわ」内の学生活動拠点を昨年度に引き続き活用している。	「地域志向科目」として29年度は240科目を開設している(29年度目標240科目）。 地域志向のゼミ活動を行う研究室・ゼミ数が29年度は32研究室・ゼミとなった(全57研究室・ゼミ中、56.1%、最終年度目標50%)。 プロジェクト活動として大分市佐賀関地区周辺及び豊後大野市全域において、各プロジェクト活動を展開することができ、ジェネリックスキルの成長を確認することができた（目標値には届かなかったが、ベンチマークからの成長は確認できた）。 また、今年度、学部・学科を超えたプロジェクト活動も盛んに行われるようになり活発化したが、地域づくり副専攻の履修者数増までには結びつかなかった。 なお、COC+事業との連携により、活動重点地域以外の県内での活動も多く行われるようになった。	A
	②	4～3月	大分をフィールドとした正課外活動の場の増加を図り、「大分チャレンジアワード」を運用する。	大分の地域をフィールドとした「自然体験活動」、「運動・スポーツ」、「ボランティア活動」、「科学・文化・芸術活動」の4つの分野すべての活動に取り組み、設定した基準をクリアした学生に対して大分チャレンジアワード修了者として認める制度を前年度に引き続き運用し、充実させる。	大分チャレンジアワードの本格運用により、学生個々人に対応した地域活動プログラムを確立することができるとともに、20人以上の修了者の輩出を見込むことができる。	年間を通じて、自然体験、スポーツ、ボランティア活動、救養体験の4分野に12名の学生が取り組んでいる（実施中）。自然体験は豊後高田市・大分市・由布市・豊後大野市、ボランティア活動は大分市等で実施。	現在、アドバイザー資格所有者（指導者）は6名。 本年度28名が挑戦し、27名が修了。H26年度からの累積修了者72名（29年度目標値70名）。	S
			（大分市佐賀関地区周辺での活動：①②共通） ・学生地域活動拠点の運営（2箇所、関地区および木佐上地区） ・以下の前年度までの教育活動の内容を見直し、活動を改善、充実させる ・1次産業体験活動（農業漁業）、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動、NPOの経営支援の実施 ・学生と地域の意見交換の場である「さがのせきローカルデザイン会議」の定期的な実施 ・地域コミュニティの活性化活動（福祉活動、地域づくり活動、商店街活動） ・課題解決型学修による地域支援ものづくりの実施及び成果の還元活動 ・高齢者向け学生IT講習会の実施 ・総合型地域スポーツクラブの支援活動の実施 ・課題解決型学修による6次化活動 （豊後大野市での活動：①②共通） ・学生ツーリズムのための学生地域活動拠点の運営 ・以下の前年度までの教育活動の内容を見直し、活動を改善、充実させる ・1次産業体験活動（農林業）、集落・地域におけるコミュニティ維持活動 ・地域でのサービスラーニング体験活動（観光・コミュニティビジネス・福祉支援等） ・課題解決型学修による地域支援ものづくり、コミュニティビジネスの実施及び成果の還元活動 ・課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動 ・エコパーク等学生ガイドの育成及び課題解決型学修によるエコパーク構想の取り組み実施			※それぞれの活動については「資料２ ： 平成29年度　日本文理大学COCプロジェクト一覧」を参照。	・大分大学COC+と本学・大分県立看護科学大学COC事業事業の共催で、「おおいた創生シンポジウム」を開催した(1/15)。その中で本学学生が事例発表、トークセッションに登壇し、COC事業の取り組みを発表した。	

平成29年度　日本文理大学　COC事業総括シート　（研究・社会貢献・全体）

		計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価
研究	③	4～5月	地域志向プロジェクト研究の学内公募を行い、採択する。	本事業で設定している地域課題の解決に向けて、本学の研究資源を活かした学内共同研究を充実させることで、その成果を地域に還元し、地域での取り組みを活発にするための地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択を行う。	地域志向プロジェクト研究の学内公募を行うことで、全教員に地域課題の周知を図ることができると同時に、複数教員によるプロジェクト型研究を顕在化することができる。また、採択に至らなかった課題に関しては、フォローアップを行うことで、教員間による新たな地域志向プロジェクト研究立ち上げの可能性を探ることができる。	「地域志向教育研究費」（180万円）を活用して、本事業で設定している7つの地域課題に対する地域志向プロジェクト研究を4月24日より学内公募を行った（締切5月12日）。公募にあたっては、昨年度に引き続き、3名以上のプロジェクトチームを条件とした。また、教員間の専門分野の連携・融合による地域課題解決の促進、学内外の研究体制の活発化をさらに図るため、異なる学科の教員で構成されたプロジェクトチーム、地域内の外部協力者との協働をより評価する審査基準へ変更した。	公募に対して3件の応募（工学部2件、経営経済学部1件）があり、外部委員3名（豊和銀行、大分銀行、大分信用金庫）を含む審査委員会で書面審査、プレゼン審査を行い、学長が3件を採択した。→連携自治体：大分市、豊後大野市。採択地域課題テーマ数：3分野。 → COC事業として進める同研究者数24名(29年度目標値18名)。 H28年度採択プロジェクトの事後評価を行い、A評価3件、B評価2件となり、昨年度に比べA評価が増加した。	A
	④	5～3月	採択した地域志向プロジェクト研究を実施する。また、取り組み及び成果を広く周知する。	採択した地域志向プロジェクト研究を実施し、地域の課題解決に向けた研究成果を地域に周知、還元する。	地域志向プロジェクト研究の実施により、複数教員によるプロジェクト型研究を促進することができ、地域志向科目の内容充実とともに、地域へ大学の知を還元することができる。	採択内定後、研究活動を開始し、H30年3月9日までを研究期間として実施中。研究成果については、年次報告書にまとめるとともに、豊後大野市及び大分市佐賀関で30年2月下旬に開催した学修成果地区報告会での発表を義務づけた。	・豊後大野市での地区報告会を2月21日に豊後大野市役所で開催し、2件が研究発表を行った。参加者77名（市高齢者福祉課担当者、地区住民、学生、教職員等）。 ・佐賀関での地区報告会を2月25日に佐賀関市民センターで開催し、1件が研究発表を行った。参加者58名（大分県担当者、地区住民、学生、教職員等）。 ・実績報告書はCOC事業年次報告書に収録。成果の検証は、今後、審査委員会にて行う。 ・昨年度までの地域志向プロジェクト研究のすべて（9件）について、本学紀要に地域創生特集号として掲載した（H29.11発行）。	A

		計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価
社会貢献	⑤	4～3月	地域人・社会人向けの地域創生リーダー養成制度のシステム（履修証明制度）の試験運用を実施する。	地域創生リーダーを育成するために、地域人・社会人の多様なニーズに応じた学習機会を提供し、その内容について履修証明制度としてシステム化するための試験運用を行い、運用上の課題を整理する。	履修証明制度を用いた学習機会を提供することで、地域人・社会人の地域創生に対する意識向上につながり、地（知）の拠点としての取り組み促進ができ、かつ、社会のニーズを学内教員が知る機会ともなるため正課教育に対しても良い影響を及ぼすことができる。	実施に向けて、学長室にて検討を行ったが、ニーズにかなう履修証明制度に必要な120時間の教育プログラムを単年度で実施するには、ハードルが高いとの結論に達し、次年度以降に延期した。また、COC+事業での連携によるリカレント教育実施の可能性も高いことから、合わせて検討を継続することとした。	履修証明制度としての教育プログラムは実施できなかったが、2日間プログラムとして、COC+大分県委託事業「おおいた地域創生リーダー養成講座」を実施し、高大社接続での若手社会人教育の可能性について、昨年度のプログラムを発展させて、県内3地区で実施した。	B
	⑥	6～2月	エコパーク、外来生物除去等に関連した地域住民の知識を深めるワークショップ講座、ツアーを実施する。	地域自然環境を活かしたエコパークの推進や外来生物除去等による自然保全の意識向上、対策のための地域住民向けワークショップや教員・学生によるツアーを実施する。	地域の自然を活かした観光資源であるエコパーク等の保全・活用、外来生物の繁殖防止にあたって、学内シーズを活用した地域住民向けのワークショップや教員・学生によるツアーを実施することで、地域住民の自然保護活動・意識向上につながり、地（知）の拠点としての取り組み促進ができる。	「祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク」がユネスコエコパークとして6月14日に登録決定。杉浦教授が「祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク推進協議会」の会長として様々な取組を推進している。今後、教員と学生による地域向けの取組を実施する。	「祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク」がユネスコエコパークとして登録が決定したことにより、地域への認知が進んでいる。また、8月11日に佐伯市保健福祉総合センターで開催された登録記念講演会で、杉浦教授が講演を行った。	B
	⑦	6～2月	事業協働機関と連携して、実践を伴う地域人・企業向け地域創生人材講座を実施する。	事業協働機関、地域企業等と連携して、地域創生人材に関する実践を伴う講座やワークショップを開催し、本事業における大学シーズ及び人材育成像を広く公表・普及するとともに、地域企業人等との意見交換を行う場とする。	実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座を実施することで、本学の「知の資源」を地域の人材育成に還元することができ、また、地域企業との意見交換を通じて、事業改善につなげることで、地（知）の拠点としての取り組みを促進することができる。	生きがいのある暮らしを創るオープンイノベーションワークショップ『Hallowワークショップ』を産官学民医連携で実施中（前後期の2回開催）。 大分市産業活性化プラザと連携して、「『地域創生人材』育成のためのマネジメント実践講座」を実施した。 大分県信用組合との包括協定を活用し、「けんしん大学」講座の運営委員、講師を派遣し実施した。	『Hallowワークショップ』は前期分（5/27,6/11,7/8, 8/19,9/16）、後期分（11/18,11/26,12/9,1/20, 2/17）の2講座を開講した。 マネジメント講座は1/11,18,25,2/1,8,15の全6回で開催した。 けんしん大学講座は前期講座において1回（4/15）、後期講座において1回（10/21）の講師を担当。後期講座では、初めて日田市にて開催。	A
	⑧	6～3月	地元企業の大分ＣＳＲプログラムとして、大学・学生と企業が協働した地域の子ども向け講座を企画、実施する（大分のニーズに合ったＣＳＲの提案）。	事業協働機関、地元企業等と連携して、多様なステークホルダーと社会の間での共通価値を創造し、地域の子ども向け講座を企画し、これからの「おおいた」のためのＣＳＲプログラムとして、地域企業と協働で実施する。	企業の単独の視点でのＣＳＲではなく、地（知）の拠点としての大学の「知」を活用するとともに、将来世代である子ども向けの講座を共同で企画、実施することで、企業体として地域に即したＣＳＲを実施することができ、大学としては地（知）の拠点としての取り組み促進ができる。	小学生を主な対象とした仕事体験イベント「お仕事発見ランド」を開催。1回目は本学単独で各学科等の専門性に関係するお仕事の体験ブースを出展。2回目は地元企業に参画していただき、CSRの視点から次世代の子ども教育に各企業の特長を活かして出展いただき実施した。	1回目を本学学園祭において実施（10/14,15）。 2回目はH30年2月17日に佐賀関市民センターにて実施。企業のCSR事業として、大分信用金庫、ノットファクトリーの2社が参画した。	A
	⑨	11～2月	未来志向型の県民対象公開講座「大分学・大分楽」を実施する。	未来志向型の県民対象公開講座「大分学・大分楽」を開催し、本取組における大学シーズを広く公表するとともに、地域住民等との意見交換を行う場とする。	未来志向型の県民対象公開講座「大分学・大分楽」を実施することで、大分の地域資源の再発見や未来への提言などを行うとともに、地域住民等との意見交換を通じて地（知）の拠点としての取り組み促進ができる。	COC+大分県委託事業「おおいた地域創生リーダー養成講座」として実施し、高大社接続での地域の魅力発見フィールドワークと課題解決策の検討ワークショップを県内3地区（中津市、佐伯市、豊後大野市）で実施した（再掲）。	11月25日、26日に中津市で、12月9日、10日に佐伯市で、12月17日、23日に豊後大野市で実施した。 3地区合計で、大学生62名、高校生12名、社会人12名の合計86名が参加した。	A

		計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価
全体	⑩	4～3月	学長室（事業推進WG）による事業推進・統括・情報発信を実施し、全学での事業展開を行う。	学長のリーダーシップを補佐し、本事業を着実に推進・統括する学長室において、H26年度に設置した事業推進ワーキンググループ（WG）の機能を活用して、各取り組みが実効性を持つように整理し統括する。これらの活動において、各科目の教育内容・ゼミ活動内容の精査、実践教育推進のための体制整理、「大分チャレンジアワード」の制度設計、改善を行い、全学での全面的な事業展開を行う。また、本事業の取組をホームページ等を通じて広く情報発信するとともに、活動内容のアーカイブ化、県民との双方向型コミュニケーションを強化する。	学長室に設置した事業推進ワーキンググループ（WG）の機能強化を図ることで、学長のリーダーシップを補佐し、事業を適切に統括し、円滑に推進、全学展開することができる。また、本事業の取組をホームページ、ＳＮＳを通じて、広く情報発信することで、本事業の目的や意義を地域住民等へ周知し理解を得ることができる。あわせてデータベースを活用することで活動内容のアーカイブ化を行うことができる。	年間スケジュールに応じて、学長室またはCOC-WGの会議を月1回程度のペースで随時行った。 ホームページについては、主要な取組について随時掲載し、情報発信を行った。 また、事業成果の外部への発信として、各種会合、研究会等で発表、また視察の受け入れを行った。	学長室またはCOC-WGの会議は、年間で14回開催。 外部への発信として、「日本私立大学協会 事務局相当者研修会【招待講演】」（9/28）、「九州・沖縄COC/COC+合同シンポジウム in おおいた 2017」(10/28)、「第4回地域課題解決全国フォーラムin庄内」（11/3)、「大学マネジメントセミナー2017 in やまぐち【招待講演】」(12/18)等での発表を行った。 徳山大学(2/15)の視察を受け入れた。	S
	⑪	4月、2月	学生のジェネリックスキルの向上を計測する学生能力アセスメントテスト（nEQ、PROG）と専門的課題解決力の向上を計測するアセスメントを連携して実施し、地域創生人材としての能力を体系的に測定する方法を試行する。	学生に対して「地域創生人材」としての汎用的能力についてのアセスメントテスト（nEQ、PROG）を実施し、全国平均に対しての学生個人の豊かな心（nEQ）やジェネリックスキル(PROG)の強みと弱みの部分を把握する。あわせて、前年度に開発した汎用的能力をベースにした専門的課題解決力を評価するアセスメントツールを運用し、アセスメントツールの統合化の試行を行う。	学生に対する「地域創生人材」としての汎用的能力に関するアセスメントテスト（nEQ、PROG）結果から、本事業における地域志向の正課教育、正課外活動の状況と照らし合わすことで、正課教育、正課外活動の取り組みについて評価することができる。あわせて、本事業独自に開発した専門的課題解決力の評価ツールと統合、試行することで、本事業における人材育成像である地域創生人材としての総合的な評価ツールを体系化することができる。	「こころの力」を測る外部テスト（nEQアセスメント）を入学時(4月)及び 2年終了時(1月)に、「リテラシー」及び「コンピテンシー」を測る外部テスト（PROG）を2年当初(4月)及び3年終了時（12月）に実施。 地域創生人としての能力を測定する自己評価ルーブリックを作成しており、1年生は後期開始時（10月）に、全学年について年度終了時に自己評価を実施した。	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」50(48)、「社会的役割意識」　51(49)、「自然等に感動する心」45(44) ※( )は入学時 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」4.06(4.18)、「コンピテンシー」3.71(3.56) ※( )は2年開始時。リテラシーはレベル判定変更があるため今年度はスコアが低く出る。 いずれも年次目標は達成できていないが、ベンチマークの当初スコアが高くなく、ベンチ-マークに対してはいずれも成長を確認できた。 専門的課題解決力を評価するアセスメントツール（ルーブリック）の開発は昨年度完了し、本格的な運用を行った。	A
	⑫	5月、10月	連携自治体との連携推進会議を開催する。	本学幹部教員と連携自治体の担当部局長等からなる連携推進会議を半期に1回開催し、本事業の円滑な推進、連携を図る。	本学幹部教員と連携自治体の担当部局長等からなる連携推進会議を開催し、情報共有、意思統一を図ることで、本事業の円滑な推進、連携を図ることができる。	第1回を7月5日に、第2回を11月29日に実施。	大分県、大分市、豊後大野市の関係部課長らが出席している。また、オブザーバーとして金融機関関係者、新聞社関係者らも出席している。第1回：外部出席者23名。第2回：外部出席者15名。	A
	⑬	2月	学修成果・地域志向プロジェクト研究等の取り組み成果の発表報告会を連携・関係機関と共同で、それぞれの対象地域において開催する。	活動重点地区(大分市佐賀関地区、豊後大野市)等において、学生の学修成果発表、教員の地域志向研究成果を報告する発表会を連携・関係機関と共同で開催し、県民・市民やステークホルダーに成果を発信、還元する。	活動対象地域において学生と教員の取組成果報告会を連携・関係機関と共同で開催することで、広く県民・市民、ステークホルダー、学内構成員に本事業の取り組み状況を発信でき、本事業の目的や意義の理解や成果の普及につながるとともに、関係者との関係強化を図ることができる。あわせて学生の成長の場としても活用できる。	・豊後大野市での報告会を2月21日に豊後大野市役所で実施し、学生の地域活動・研究活動報告12件、教員のプロジェクト研究報告3件を行った。 ・佐賀関地区での報告会を2月25日に佐賀関市民センターで実施し、学生の地域活動・研究活動報告10件、教員のプロジェクト研究報告1件を行った。 ・今年度は発表件数の増加が見込まれたことから、口頭発表セッションとポスターセッションを組み合わせて実施した。	・豊後大野での報告会には、学外参加者21名、本学教職員23名、本学学生33名の合計77名が参加した。活動報告内容の全体的な評価に対して97%が良かったとの回答を得た。 ・佐賀関での報告会には、学外参加者10名、本学教職員27名、本学学生21名の合計58名が参加した。活動報告内容の全体的な評価に対して96%が良かったとの回答を得た。	A
	⑭	3月	地域志向活動推進のためのＦＤ／ＳＤ研修会を実施する。	地域志向活動推進のためのＦＤ／ＳＤ研修会を実施し、地域志向科目・活動の拡充や学修評価方法等の改善策等について検討する。プログラムの一部は外部講師を招き、各地のCOC事業の取り組み状況等を知る機会とする。	FD／SD研修会を実施することで、教職員の地域志向の理解を促進するとともに、これまでの事例や地域志向科目・活動の状況を知ることで、それらの実施方法等について理解を深めることができる。	他大学の地域学習の事例を知る研修会として、島根大学 教育推進センターの岩瀬 峰代 准教授を招聘し、3月22日に実施した。	島根大学を中心に山陰地方の大学連携で実施した「大学と地域社会を結ぶ大学間連携ソーシャルラーニング」を知る機会となり、プログラムの設計法や学習評価法等について知るよい機会とすることができた。	A
	⑮	3月	年次成果報告書を発行、配布し、地域や関係機関に広く取組成果を周知する。	本年度の取り組みをまとめた年次成果報告書を発行し、事業成果を広く公表、周知、普及させる。	本年度の取り組みをまとめた年次成果報告書を発行することで、事業成果を広く公表、周知、普及することができる。	H29年度年次報告書を3月末に発行、関係機関に配布する。	関係機関に配布し、成果を広く周知、普及できた。	A
	⑯	3月	外部評価委員会を開催し、本年度の取り組み対する評価を受ける。	外部委員を含めた事業検討・評価委員会を開催し、本年度の事業成果を総括、評価を受けるとともに、事業最終年度であるH30年度に向けた取組計画の妥当性について検討する。	外部委員を含めた事業検討・評価委員会を開催し、本年度の事業成果を総括、評価を受けるとともに、H30年度に向けた取組計画の妥当性検討を通じて、事業について見直し、改善を図ることができる。	外部委員として、自治体委員3名（大分県、大分市、豊後大野市）、民間委員4名（日本政策投資銀行、大分県中小企業家同友会、セブン-イレブン記念財団、NPO法人おおいたNPOデザインセンター）を任命し、3月29日に事業検討・評価委員会を実施した。	委員会での意見を踏まえ、次年度への事業改善、カリキュラム改善につなげる予定である。	A

平成30年度　日本文理大学　COC事業総括シート (概要・教育)

			事業全体の概要	H30年度の実施計画
概要			本事業の全体の目的は、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成することである。つまり、教育では大分県内の少子高齢化が深刻な地域を主な対象に「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルによる教育体系を確立し、地域創生人材を輩出する。研究では、地域課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを完成させ、地域の課題解決につなげる。社会貢献では、県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整えるとともに、行政と連携した「県民参画講座」を開講し、地域再生・活性化を推進する。学長のリーダーシップのもと、以上の取組を通じて、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革、ガバナンス改革を実現する。 本年度の目的は、上記の全体の目的を達成する最終前年度としてその全体基盤を完成させつつ、ＣＯＣ＋事業への成果の実質的な提供・連携を図ることであり、具体的な目的は右欄の通りである。	Ⅰ．教育 大分市佐賀関地区周辺及び豊後大野市での活動を中心にした「体験交流活動」、「課題解決に必要な知識の修得」、「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」からなる学修サイクルの全学での体系化を完成させる。そのために必要な地域志向科目の精査・連携を強化し、全学科での学修サイクルの運用を行う。卒業研究、ゼミ活動等での「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を積極的に実施できる全学体制をとる。正課と連動した正課外活動である「大分チャレンジアワード」の本格運用を行い、学生個々人に対応した地域活動プログラムを積極的に活用する。以上の取り組みを体系化したカリキュラムの運用を通じて、地域創生人材の育成体系の確立を図る。 Ⅱ．研究 地域志向プロジェクト研究の学内公募を行い、５月から最終年度の研究を実施する。前年度までの採択課題については、フォローアップなどを実施し、地域の課題解決に向けた研究成果を積極的に地域へ還元していく。また、本事業における地域課題解決に向けた研究成果をさらに実質化していくため、地域のＮＰＯや企業等を巻き込んだプロジェクトチームの編成を強化し、取り組みの定着化、成果の地域への波及を生み出す好循環をつくる。 Ⅲ．社会貢献 地域が持つ魅力や課題に対する公開講座・ワークショップ等を実施することで、地域との実践的協働活動の体制の確立・強化を図る。大学の「知」の地域への還元を行うため、履修証明制度を用いた学習機会の提供を行い、社会人等の地域創生への意識の向上を図る。 Ⅳ．全体 以上の取組に対して、学長のリーダーシップのもと、学長室に設置した事業推進ワーキンググループ（WG）と関係各学科、部局との連携を図り、各取り組みが実効性を持つように事業を推進する。学内の体制構築、地域志向の制度設計の浸透、学外のステークホルダーとの連携強化の進捗状況を随時チェックし、必要に応じて改善を図ることで、地（知）の拠点、ガバナンスの基盤確立を図る。また、事業最終年度であることから、事業終了後の自立に向けて、地域ニーズへの対応において、継続と新規のバランスを図る工夫を外部評価や地域との連携を通じて行い、事業終了後の継続、及び、COC+事業とのさらなる連動を実現する。

		計画	項目	内容	期待される成果
教育	①	4～3月	正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクル体系を完成させる。	正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を積極的に実施し、拡充した地域志向科目による学修サイクル体系の本格運用を行う。あわせて、活動重点地域である大分市佐賀関地区、豊後大野市の学生地域活動拠点を前年度に引き続き運営し、学生活動を活発化する。また、必要に応じて随時科目間調整を実施し、内容の改善、充実を図るとともに、ゼミ活動や卒業研究等での「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を充実させる。	正課教育における学修サイクル、学生地域活動拠点を本格運用することで、学生の地域志向性を高め、地域との連携体制を固めていくと同時に、ゼミ活動や卒業研究等での「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を充実させることができる。「地域創生人材」育成に向けた取り組みを強化することで、学生の豊かな心と専門的課題解決力を高めることができる。以上の取り組みにより、地域志向科目数の達成目標（全科目の4割）を超える科目数を運用し、地域創生人材育成の教育プログラムを確立することができる。
	②	4～3月	大分をフィールドとした正課外活動の場の増加を図り、「大分チャレンジアワード」を安定運用する。	大分の地域をフィールドとした「自然体験活動」、「運動・スポーツ」、「ボランティア活動」、「科学・文化・芸術活動」の４つの分野すべての活動に取り組み、設定した基準をクリアした学生に対して大分チャレンジアワード修了者として認める制度を運用し、学生個々人に応じた支援体制を確立する。	大分チャレンジアワードの運用により、学生個々人に対応した地域活動プログラムを確立することができるとともに、20人以上の修了者の輩出を見込むことができ、事業目標を達成することができる。
			（大分市佐賀関地区周辺での活動：①②共通） ・学生地域活動拠点の運営（2箇所、関地区および木佐上地区） ・以下の前年度までの活動の完全履行、完成 ・1次産業体験活動（農業漁業）、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動、NPOの経営支援の実施 ・学生と地域の意見交換の場である「さがのせきローカルデザイン会議」の定期的な実施 ・地域コミュニティの活性化活動（福祉活動、地域づくり活動、商店街活動） ・課題解決型学修による地域支援ものづくりの実施及び成果の還元活動 ・高齢者向け学生IT講習会の実施 ・総合型地域スポーツクラブの支援活動の実施 ・課題解決型学修による6次化活動 ・交流人口の拡大 （豊後大野市での活動：①②共通） ・学生ツーリズム等のための学生地域活動拠点の運営 ・以下の前年度までの教育活動の内容を見直し、活動を改善、充実させる ・1次産業体験活動（農林業）、集落・地域におけるコミュニティ維持活動 ・地域でのサービスラーニング体験活動（観光・コミュニティビジネス・福祉支援等） ・課題解決型学修による地域支援ものづくり、コミュニティビジネスの実施及び成果の還元活動 ・課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動 ・地域資源等に関する学生ガイドの育成及び課題解決型学修による地域資源を活かした地域活性化の取り組み実施		

平成30年度　日本文理大学　COC事業総括シート　(研究・社会貢献・全体)

		計画	項目	内容	期待される成果
研究	③	4～5月	地域志向プロジェクト研究の学内公募を実施し、採択する。	本事業で設定している地域課題の解決に向けて、本学の研究資源を活かした学内共同研究を充実させることで、その成果を地域に還元し、地域での取り組みを活発にするための地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択を行う。	地域志向プロジェクト研究の学内公募を行うことで、全教員に地域課題の周知を図ることができると同時に、複数教員によるプロジェクト型研究を顕在化することができる。また、採択に至らなかった課題に関しては、フォローアップを行うことで、事業終了後にも継続して教員間による新たな地域志向プロジェクト研究立ち上げの可能性を探ることができる。
	④	5～3月	地域志向プロジェクト研究を実施し、これまでの成果とあわせて、教育、地域へ還元する。	採択した地域志向プロジェクト研究を実施し、地域の課題解決に向けた研究成果をこれまでの成果と合わせて、教育に還元するとともに、地域に周知、還元する。	地域志向プロジェクト研究の実施により、複数教員によるプロジェクト型研究を促進することができ、地域志向科目の内容充実とともに、地域へ大学の知を還元することができる。

		計画	項目	内容	期待される成果
社会貢献	⑤	4～3月	地域人・社会人向けの地域創生リーダー養成制度のシステム（履修証明制度）を確立、実施する。	地域創生リーダーを育成するために、地域人・社会人の多様なニーズに応じた学習機会を提供し、その内容について履修証明制度としてシステム化し、運用を行う。	履修証明制度を用いた学習機会を提供することで、地域人・社会人の地域創生に対する意識向上につながり、地（知）の拠点としての取り組み促進ができ、かつ、社会のニーズを学内教員が知る機会ともなるため正課教育に対しても良い影響を及ぼすことができる。
	⑥	6～2月	エコパーク、外来生物駆除等に関連した地域住民の知識を深めるワークショップ講座、ツアーを実施する。	地域自然環境を活かしたエコパークの推進や外来生物除去等による自然保全の意識向上、対策のための地域住民向けワークショップや教員・学生によるツアーを実施する。	地域の自然を活かした観光資源であるエコパーク等の保全・活用、外来生物の繁殖防止にあたって、学内シーズを活用した地域住民向けのワークショップや教員・学生によるツアーを実施することで、地域住民の自然保護活動・意識向上につながり、地（知）の拠点としての取り組み促進ができる。
	⑦	6～2月	事業協働機関と連携して、実践を伴う地域人・企業向け地域創生人材講座を実施する。	事業協働機関、地域企業等と連携して、地域創生人材に関する実践を伴う講座やワークショップを開催し、本事業における大学シーズ及び人材育成像を広く公表・普及するとともに、地域企業人等との意見交換を行う場とする。	実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座を実施することで、本学の「知の資源」を地域の人材育成に還元することができ、また、地域企業との意見交換を通じて、事業改善につなげることで、地（知）の拠点としての取り組みを促進することができる。
	⑧	6～3月	地元企業の大分ＣＳＲプログラムとして、大学・学生と企業が協働した地域の子ども向け講座を企画、実施する（大分のニーズに合ったＣＳＲの提案）。	事業協働機関、地元企業等と連携して、多様なステークホルダーと社会の間での共通価値を創造し、地域の子ども向け講座を企画し、これからの「おおいた」のためのＣＳＲプログラムとして、地域企業と協働で実施する。	企業の単独の視点でのＣＳＲではなく、地（知）の拠点としての大学の「知」を活用するとともに、将来世代である子ども向けの講座を共同で企画、実施することで、企業体として地域に即したＣＳＲを実施することができ、大学としては地（知）の拠点としての取り組み促進ができる。
	⑨	11～2月	未来志向型の県民対象公開講座「大分学・大分楽」を実施する。	未来志向型の県民対象公開講座「大分学・大分楽」を開催し、本取組における大学シーズを広く公表するとともに、地域住民等との意見交換を行う場とする。	未来志向型の県民対象公開講座「大分学・大分楽」を実施することで、大分の地域資源の再発見や未来への提言などを行うとともに、地域住民等との意見交換を通じて地（知）の拠点としての取り組み促進ができる。

		計画	項目	内容	期待される成果
全体	⑩	4～3月	学長室（事業推進WG）による事業推進・統括・情報発信を実施し、全学での事業展開、地(知)の拠点を確立する。あわせて、事業終了後の継続について関係機関と協議する。	学長のリーダーシップを補佐し、本事業を着実に推進・統括する学長室において、H26年度に設置した事業推進ワーキンググループ（WG）の機能を活用して、各取り組みが実効性を持つように整理し統括する。これらの活動において、各科目の教育内容・ゼミ活動内容の精査、実践教育推進のための体制整理、「大分チャレンジアワード」の制度設計、改善を行い、全学での全面的な事業展開を行う。また、本事業の取組をホームページ等を通じて広く情報発信するとともに、活動内容のアーカイブ化、県民との双方向型コミュニケーションを強化する。さらに、関係機関と事業終了後の継続取り組み、支援体制等について協議を行い、自律化に目処をつける。	学長室に設置した事業推進ワーキンググループ（WG）の機能強化を図ることで、学長のリーダーシップを補佐し、事業を適切に統括し、円滑に推進、全学展開することができる。本事業の取組をホームページ、ＳＮＳを通じて、広く情報発信することで、本事業の目的や意義を地域住民等へ周知し理解を得ることができる。また、データベースを活用することで活動内容のアーカイブ化を行うことができる。あわせて、事業終了後の継続について関係機関と協議を重ねることで、事業終了後の継続実施体制に道筋をつけることができる。
	⑪	4月、2月	学生のジェネリックスキルの向上を計測する学生能力アセスメントテスト（nEQ、PROG）と専門的課題解決力の向上を計測するアセスメントを連携して実施し、地域創生人材としての能力を体系的に測定する方法を確立する。	学生に対して「地域創生人材」としての汎用的能力についてのアセスメントテスト（nEQ、PROG）を実施し、全国平均に対しての学生個人の豊かな心（nEQ）やジェネリックスキル(PROG)の強みと弱みの部分を把握する。あわせて、独自開発した汎用的能力をベースにした専門的課題解決力を評価するアセスメントツール（ルーブリック）を運用し、アセスメントツールの統合化を行う。	学生に対する「地域創生人材」としての汎用的能力に関するアセスメントテスト（nEQ、PROG）結果から、本事業における地域志向の正課教育、正課外活動の状況と照らし合わすことで、正課教育、正課外活動の取り組みについて評価することができる。あわせて、本事業独自に開発した専門的課題解決力の評価ツールと統合することで、本事業における人材育成像である地域創生人材としての総合的な評価ツールを体系化することができる。
	⑫	6月、11月	連携自治体との連携推進会議を開催する。	本学幹部教員と連携自治体の担当部局長等からなる連携推進会議を半期に1回開催し、本事業の円滑な推進、連携を図る。	本学幹部教員と連携自治体の担当部局長等からなる連携推進会議を開催し、情報共有、意思統一を図ることで、本事業の円滑な推進、連携を図ることができる。
	⑬	9月	地域志向活動推進のためのＦＤ／ＳＤ研修会を実施する。	地域志向活動推進のためのＦＤ／ＳＤ研修会を実施し、地域志向科目・活動の質向上や学修評価方法等の改善策等について検討する。プログラムの一部は外部講師を招き、各地のCOC事業の取り組み状況等を知る機会とする。	FD／SD研修会を実施することで、教職員の地域志向の理解を促進するとともに、これまでの事例や地域志向科目・活動の状況を知ることで、それらの実施方法等について理解を深めることができる。
	⑭	12月	本学の地域貢献度等を把握する県民アンケート調査を実施する。	本学のこれまでの大学COC事業に対する地域貢献度や課題等を把握するための県民アンケート調査を実施し、現状を明らかにする。	県民アンケート調査を実施することで、事業最終年度における本学の地域貢献度や課題を把握することができ、事業成果の波及状況を確認することができる。
	⑮	2月	学修成果・地域志向プロジェクト研究等の取り組み成果の発表報告会を連携・関係機関と共同で、それぞれの対象地域において開催する。	活動重点地区(大分市佐賀関地区、豊後大野市)等において、学生の学修成果発表、教員の地域志向研究成果、本事業全体の成果を報告する発表会を連携・関係機関と共同で開催し、県民・市民やステークホルダーに成果を発信、還元する。	活動対象地域において学生と教員、事業全体の取組成果報告会を連携・関係機関と共同で開催することで、広く県民・市民、ステークホルダー、学内構成員に本事業の取り組み状況を発信でき、本事業の目的や意義の理解や成果の普及につながるとともに、関係者との関係強化を図ることができる。あわせて学生の成長の場としても活用できる。
	⑯	3月	年次成果報告書を発行、配布し、地域や関係機関に広く取組成果を周知する。	本年度及び事業全体の取り組みをまとめた事業成果報告書を発行し、事業成果を広く公表、周知、普及させる。	本年度及び本事業全体の取り組みをまとめた事業成果報告書を発行することで、事業成果を広く公表、周知、普及することができる。
	⑰	3月	外部評価委員会を開催し、本年度及び本事業全体の取り組みに対する評価を受ける。あわせて、取り組みの自律化に向けた体制を確認する。	外部委員を含めた事業検討・評価委員会を開催し、本年度及び事業全体の事業成果を総括、評価を受けるとともに、事業終了後の継続についての取組計画の妥当性について検討、確認する。	外部委員を含めた事業検討・評価委員会を開催し、本年度及び本事業全体の事業成果を総括、評価を受けるとともに、H31年度以降に向けた取組計画の妥当性検討を通じて、事業の継続化を担保することができる。

事業達成目標の進捗状況

【教育】

	事業開始時(H26.10調査)	H26年度達成値(H27.4調査)	H27年度達成値(H28.4調査)	H28達成状況（H28年度末）	**H29達成目標**	**H29年度達成状況（暫定）**	最終年度(H30)達成目標
地域志向科目数	26 科目	26 科目	160 科目	222 科目	240 科目	240 科目	200 科目
地域志向カリキュラムの再編成 （全学生が12単位以上を取得）	4 単位	12 単位	12 単位	12 単位	12 単位	12 単位	12 単位
副専攻制度	0 名	0 名	4 名	4 名	15 名	5 名	30 名
正課外活動「大分チャレンジアワード」の導入	3 名	17 名	34 名	45 名	70 名	72 名	100 名
地域志向科目を履修した学生の満足度	地域志向科目を設定	体験科目：平均3.9 知識修得科目：平均3.9 課題解決型学修課目：平均3.9 正課外学習活動：-	体験科目：平均3.71 知識修得科目：平均3.59 課題解決型学修科目 ：平均4.03 正課外学習活動：4.25	体験科目：平均3.98 知識修得科目：平均3.82 課題解決型学修科目 ：平均4.01 正課外学習活動：平均4.25	体験科目：平均3.9以上 知識修得科目：平均3.5以上 課題解決型学修科目 ：平均4.1以上 正課外学習活動：平均4.2以上	体験科目：平均　　以上 知識修得科目：平均　　以上 課題解決型学修科目 ：平均　　以上 正課外学習活動：平均4.47	体験科目：平均4.0以上 知識修得科目：平均3.5以上 課題解決型学修科目 ：平均4.2以上 正課外学習活動：平均4.2以上
ジェネリックスキルの育成	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」51 「社会的役割意識」53 「自然等に感動する心」44 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」3.42 「コンピテンシー」3.48	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」 50 「社会的役割意識」 52 「自然等に感動する心」 44 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」 3.52 「コンピテンシー」3.50	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」51 「社会的役割意識」53 「自然等に感動する心」46 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」4.25 「コンピテンシー」3.37	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」50 「社会的役割意識」53 「自然等に感動する心」45 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」4.48 「コンピテンシー」3.68	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」51 「社会的役割意識」53 「自然等に感動する心」47 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」4.25 「コンピテンシー」3.80	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」50(48) 「社会的役割意識」　51(49) 「自然等に感動する心」45(44) ※( )は入学時 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」4.06(4.18) 「コンピテンシー」3.71(3.56) ※( )は2年開始時。リテラシーはレベル判定変更あり。	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」52 「社会的役割意識」54 「自然等に感動する心」50 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」4.00 「コンピテンシー」4.00
県内就職率	31.35 %	31.32 %	33.55 %	34.38 %	35 %	34.9 %	35 %

【研究】

	H26現状(H26年度始め)	H27現状(H27年度始め)	H27達成状況(H27年度末)	H28達成状況（H28年度末）	**H29達成目標**	**H29年度達成状況（暫定）**	最終年度(H30)達成目標
地域との共同研究を行う教員数	8 名	8 名	14 名	16 名	18 名	24 名	20 名

【社会貢献】

	H26現状(H26年度始め)	H27現状(H27年度始め)	H27達成状況(H27年度末)	H28達成状況（H28年度末）	**H29達成目標**	**H29年度達成状況（暫定）**	最終年度(H30)達成目標
地域向けボランティアの活動数	675 名	723 名	804 名	816 名	800 名	名	800 名
地域向け公開講座数	3 講座	3 講座	11 講座	11 講座	11 講座	12 講座	7 講座
県民の本学に対する本事業分野の地域貢献度の評価	（推定値）20 %	27 %	未実施 （予定なし） %	41.5 %	未実施 （予定なし） %	未実施 （予定なし） %	40 %

「地域志向科目」について

大学 COC 事業では、「地域での体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルにより、学生が地域に愛着を持ち、主体的に課題を発見し、専門的課題解決力（知識をただ持っているだけでなく、知識を活用し、組み合わせ、また様々なステークホルダーや他の学生と協働し、地域社会に役立つ解決策を導き、実践することで身につけた専門力を定着させる）を習得させることを目指している。これらの学修活動を通じて、県内のみならず、社会で主体的に活躍できる人材を育成することが目的である。

上記の学修サイクルに関わる科目を「地域志向科目」と定義し、平成 27 年度シラバスより、該当するカテゴリーを明示している。

1．カテゴリーⅠ「地域での体験交流活動を教育内容に含む科目」
- 大分県内の地域（学外）へ学生が出向き活動する内容がある。
- 大分県内に所在する企業・団体等を訪問し、外部の人との交流（講話や意見交換を含む）がある。
- 大分県内の企業・自治体・団体・住民の方を対象とした学生発表がある。
（大分県内に関する調査・研究内容を含む場合は「カテゴリーⅠ」）

・・・（例）農林業体験や高齢化が深刻な地域コミュニティに入っての住民との交流の中で、地域のことを肌で感じ、自分たちの地域での役割を認識し、学修への意欲と主体性、ジェネリックスキル、人間力を高める

2．カテゴリーⅡ「地域における課題解決に必要な知識を修得する科目」
- 大分県内に関する歴史・文化・産業・社会・地域問題など大分に関する具体的な知識の教授を行う内容（全国や県外と大分との対比を含む）がある。
- 大分県内に関わるものをケーススタディとして扱う講義・演習がある。
- 大分県内の企業・自治体・団体・住民の方の講話（ゲストスピーカー）がある（非常勤講師が学問的なことのみを教授するケースは除く）。
- 大分県内に関する調査・研究内容についての学生発表がある。
- カテゴリーⅢ「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目」において必要となる知識・技能を教授する内容がある（授業計画の学修内容に明示することが必要）。

・・・（例）単に知識を獲得するだけでなく、獲得した知識を地域の題材や課題に結合する、もしくは地域の題材や課題をもとに理論的な知識を構築するための能動的な学修（書く、話す、議論する、分析する、発表するなど）を通じて、知識の活用法や思考・判断力を深く認知化させる

3．カテゴリーⅢ「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目」
- 大分県内の課題を解決する調査・研究内容を明示的に扱っている（ゼミ・卒研含む）。
- 調査・研究内容を大分県内の企業・自治体・団体・住民の方を対象として学生発表している。

・・・（例）地域での実践活動により獲得した知識を活用してリアルな課題を発見、整理し、解決策を立案し、実践する

日本文理大学　平成29年度　地域志向科目　一覧表

構築する地域志向学修サイクル（H30年度目標：200科目以上）

	開講科目数(ｾﾞﾐ除)	ゼミ・卒研ｸﾗｽ数	合計科目数
カテゴリー Ⅰ：地域ﾞの体験交流活動を教育内容に含む科目	32 科目	15 科目	**47 科目**
カテゴリー Ⅱ：地域における課題解決に必要な知識を修得する科目	100 科目	60 科目	**160 科目**
カテゴリー Ⅲ：ステークホルダﾞーとの協働による課題解決型学修科目	17 科目	16 科目	**33 科目**
合計	149 科目	91 科目	**240 科目**

地域志向のゼミ活動（H30年度目標：各学部ゼミ数の半数以上）

	地域志向ゼミ数	全体ゼミ数	割合
【工学部】卒業研究	16 研究室	38 研究室	42.1%
【経営経済学部】ゼミナールⅣ	18 ゼミ	19 ゼミ	94.7%
合計	**34 研究室・ゼミ**	**57 研究室・ゼミ**	**59.6%**

学年	1		2		3		4	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
教養基礎科目								
大分を知り、地域に貢献できる素養を身につける	【必】大分学・大分案	森里海連環学と地球的課題						
人間力コア科目／コア科目	【必】社会参画入門	【必】社会参画実習１	【必】社会参画応用【キャリア型】	【必】社会参画実習２【キャリア型】				
	【必】人間力概論	現代社会要論	【必】産学一致の勧め	起業学				
自分を取り囲む世界と交流するための知識とスキルを身につける		ヒューマンアート	第二外国語１（中国語）	第二外国語２（中国語）				
汎用力科目	ジェネリック養成１	ジェネリック養成２						
		大分の地域ブランド創造体験						
特別科目	提携講座（ボランティア概論）							
工学部 機械電気工学科								
プロジェクト分野	ロボットプロジェクト入門１	ロボットプロジェクト入門２	ロボットプロジェクト基礎１	ロボットプロジェクト基礎２				
研究キャリア分野							卒業研究（1）（通年）	
工学部 建築学科								
環境・地域分野	プロジェクト実習		流域生態論	環境計画論	環境・地域創造演習			
			データ解析演習		【必】地域再生論			
建築基礎分野					【必】技術者倫理			
建築設計製図分野			設計製図１	設計製図２	設計製図３	設計製図４	設計製図５	
						設計製図４【インテリアデザインクラス】		
			ＣＡＤ１		ＣＡＤ２	ＣＡＤ３		
建築生産分野						建設マネジメント演習及び実習		
建築法規分野						建築法規２		
研究・資格・インターンシップ分野	プロジェクト１（通年）		プロジェクト２(通年)		プロジェクト３(通年)			
	建築フィールドワーク		提携講座(グローバルコミュニティ演習)					
	インターンシップ							
					研究ゼミナールＡ（2）	研究ゼミナールＢ（3）	【必】卒業研究（3）（通年）	
					研究ゼミナールＡ（7）	研究ゼミナールＢ（4）	【必】卒業研究（4）（通年）	
工学部 航空宇宙工学科								
熱・原動機分野			【必】熱力学					
プロジェクト分野	ロボットプロジェクト入門１	ロボットプロジェクト入門２	ロボットプロジェクト基礎１	ロボットプロジェクト基礎２				
卒研分野							卒業研究（２）（通年）	
工学部 情報メディア学科								
情報システム基礎分野	eビジネス入門	【必】ＩＴ基礎						
メディア処理分野			データ解析及び演習					
組み込み分野					情報システム回路入門	組み込み演習		
ネットワーク分野			【必】インターネット基礎	【必】インターネット応用	インターネット実践			
データベース分野					データベース実践			
情報デザイン基礎分野				コンテンツ企画論				
視覚デザイン分野						３Ｄ　ＣＡＤ応用		

学年	1		2		3		4	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
映像デザイン分野					取材実践・編集学及び演習			
			初等教育のためのICT活用１	初等教育のためのICT活用２				
キャリア開発分野		情報技術と職業-入門	情報技術と職業-演習（通年）		情報技術と職業-実践（通年）			
プロジェクト演習分野	ロボットプロジェクト入門１	ロボットプロジェクト入門２	ロボットプロジェクト基礎１	ロボットプロジェクト基礎２				
ゼミナール分野					研究ゼミナールＡ（2）	研究ゼミナールＢ（2）	卒業研究（2）（通年）	
					研究ゼミナールＡ（２）	研究ゼミナールＢ（２）	卒業研究（２）（通年）	
経営経済学部 経営経済学科								
専門基礎分野		経済学入門						
	経営学入門	社会福祉入門						
地域マネジメント分野	フィールド・スタディⅠＡ	フィールド・スタディⅠＢ	サービスラーニングⅡ(通年)		サービスラーニングⅢ(通年)	フィールド調査(フィールド研修)		
			社会調査法	まちづくりマーケティング	まちづくりマーケティング演習	地域ブランド論		
			観光学入門	観光ビジネス論	地域経営論	地域企業論		
					地域イノベーション論			
経済学分野	日本経済事情		日本経済論			ＮＰＯ・ＮＧＯ論		
			ミクロ経済学					
			財務諸表論	金融論	国際金融論			
			経済政策論					
法律学分野					憲法Ａ	憲法Ｂ		
					労働法	行政法		
会計ファイナンス分野	簿記入門		原価計算論Ａ	原価計算論Ｂ		管理会計論Ｂ		
					監査論Ａ	監査論Ｂ		
スポーツビジネス分野				地域とスポーツ	スポーツ法学			
			特殊講義（スポーツイベント実践）(通年)		スポーツリテラシーⅥ(スポーツビジネス実践)(通年)			
スポーツトレーナー分野			スポーツリテラシーⅢ(スポーツコンディショニング)		ストレングス＆コンディショニング指導法(通年)			
社会福祉分野	フィールド・スタディⅠＡ	フィールド・スタディⅠＢ	ボランティア実習(通年)		社会保障論Ａ	社会保障論Ｂ		
			サービスラーニングⅡ(通年)		サービスラーニングⅢ(通年)			
			児童福祉論			福祉経営論		
			地域福祉論		社会福祉原論Ａ	社会福祉原論Ｂ		
			相談援助の基盤と専門職Ａ	相談援助の基盤と専門職Ｂ	社会福祉調査法			
			社会福祉援助技術演習Ⅰ(通年)		社会福祉援助技術演習Ⅱ(通年)			
			公的扶助論	コミュニティワーク論	社会福祉援助技術現場実習(通年)			
					社会福祉援助技術現場実習指導(通年)			
					コミュニティワーク演習(通年)		コミュニティワーク実習(通年)	
			家族援助論(通年)		就労支援サービス	権利擁護と成年後見		
心理学分野		心理学	青年心理学	発達心理学		精神保健学		
		児童心理学	臨床心理学	カウンセリング				
ＩＴシステム分野					データ解析Ａ			
特別科目分野	フィールドワーク		提携講座(グローバルコミュニティ演習)		短期集中語学研修			
ゼミナール分野					ゼミナールⅢ（１）（通年）		ゼミナールⅣ（１）（通年）	
			ゼミナールⅡＡ（9）	ゼミナールⅡＢ（9）	ゼミナールⅢ（９）（通年）		ゼミナールⅣ（９）（通年）	
			ゼミナールⅡＡ（5）	ゼミナールⅡＢ（４）	ゼミナールⅢ（4）（通年）		ゼミナールⅣ（2）（通年）	

※備考
研究ゼミナールA、研究ゼミナールB、卒業研究、ゼミナールⅡA、ゼミナールⅡB、ゼミナールⅢ、ゼミナールⅣ の（）内の数字は、地域志向科目としての登録クラス数。

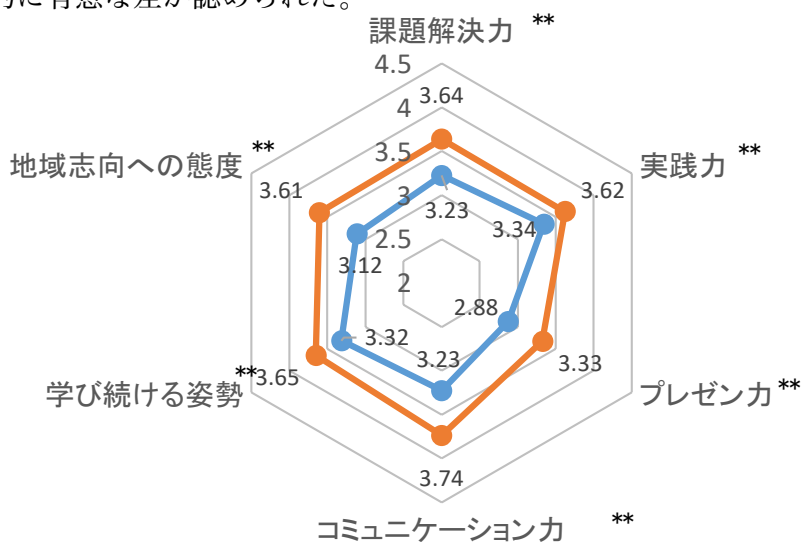
【教育における目標】 ルーブリックによる地域創生人の能力評価

本事業では、地域創生人として育成する能力として、基盤となる学部によらず共通した力（ジェネリックスキル）とあわせて、専門的課題解決力を挙げている。専門的課題解決力を測定、評価するにあたり、本事業では、地域志向への態度を含めた次ページのルーブリック表を作成した。ルーブリックとは、パフォーマンスの質を量的に評価するために用いられる評価基準で、１つ以上の評価観点（＝評価規準、求める具体的なスキルや知識）とそれについての１つ以上の数値的な評価尺度（達成レベル）及び尺度の中身（認識や行為の特徴）を説明する評価基準の記述語からなる。

本事業では、後述の外部テストとの整合性を考慮しながら、ルーブリック表の妥当性や実行可能性を探るため、ジェネリックスキルを含めたルーブリック表を作成した。本年度も昨年度と同様、評価の蓄積として、１年生は後期開始時と終了時に、２～４年生は学年終了時にそれぞれ学生による自己評価を実施した（４年次は集計中）。

＜１年生の自己評価結果＞

現１年生（2017年入学生）の後期開始時及び終了時の結果の平均スコアを下図に示す。いずれも統計的に有意な差が認められた。



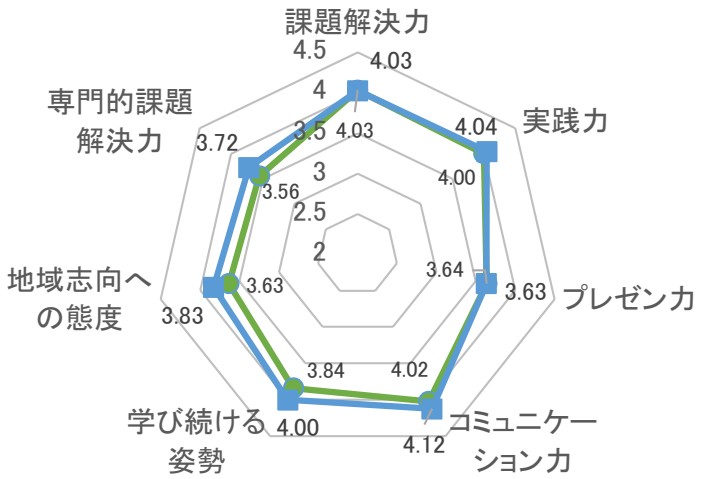
N＝545名

1年10月
1年終了時

※１年生は専門的課題解決力を除く
※レベルは次ページルーブリック表のレベル６を除く６段階評価
※ **：1%有意

＜ ２年生及び３年生の自己評価結果＞

現２年生（2016年入学生）及び現３年生（2015年入学生）の各学年終了時の結果の平均スコアを下図に示す。



２年生：N＝472名
３年生：N＝260名

現2年生
現3年生

※レベルは次ページルーブリック表の７段階評価

ＣＯＣ事業「地域創生人材」育成にかかる卒業時自己評価ルーブリック（2018年3月）

学籍番号：　　氏名：

本項目は，大学全体で取り組んでいる文部科学省「地（知）の拠点整備事業（ＣＯＣ）」での地域創生人材育成にかかる能力群を示しています。

問１　各観点について，ルーブリックのレベルを読んで，卒業時点であてはまる自己評価レベルに○を記入して下さい。

分類	レベル／評価項目（観点）	7	6	5	4	3	2	1
（Ａ）対課題基礎力（課題解決のための思考とツールを使い実践する）	課題発見・解決力	レベル６を満たした上で，そのレベルを越えることができる。	レベル５に加え，自ら発見した解決すべき課題を具体的に解決することができる。	与えられた情報に加え，自らの既存の知識を生かし，問題を発見したり，解決すべき課題を設定することができる。	与えられた情報の中から，問題を広い観点から洗い出したり，分析することで，問題を発見したり，解決すべき課題を設定しようと試み，一定程度の課題発見・設定ができる。	与えられた情報の中から，問題を洗い出したり，分析することができる。	与えられた情報の中から問題を発見したり，解決すべき課題を設定しようとする姿勢がある。	レベル２を達成できていない。
	該当レベルに○→							
	実践力	レベル６を満たした上で，そのレベルを越えることができる。	レベル５に加え，困難な状況に直面しても，常に積極的にチャレンジし，状況を打開できる。	活動の中で設定した目標に向けて，状況をふまえながら，新しいアイデアを出し，積極的にチャレンジできる。さらに，その経験を次の活動に活かすことができる。	活動の中で設定した目標に向けて，状況をふまえながら，積極的にチャレンジできる。	活動の中で設定された目標達成に向けて積極的にチャレンジできる。	活動の中で設定された目標達成に向けて取り組もうとする姿勢がある。	レベル２を達成できていない。
	該当レベルに○→							
	プレゼンテーション力	レベル６を満たした上で，そのレベルを越えることができる。	レベル５に加え，異なる意見が出た場合にも，理路整然とした説明や反論，柔軟な対応ができ，相手を説得することができる。	プレゼンテーションの方法を習得しており，自分の考えや計画，構想について論理的に説明でき，相手を納得させることができる。	プレゼンテーションの方法を一定程度習得しており，自分の考えや計画について，論理的に説明することができる。	自分の考えを他者に対して，論理的に表現することはできるが，論理性や表現力において未熟な点がある。	自分の考えを他者に対して，論理的に表現しようとする姿勢がある。	レベル２を達成できていない。
	該当レベルに○→							
（Ｂ）対人基礎力（人とよい関係をつくる）	チームで活動するためのコミュニケーション力	レベル６を満たした上で，そのレベルを越えることができる。	レベル５に加え，多様な世代・立場の人を巻き込むことができ，適切な対応を取り，チームを率いていくことができる。	レベル４に加え，世代等が多様な集団や，立場が異なる相手に対して，会話や文書などを用いたコミュニケーションを取ることができ，適切な対応が取れる。	グループ内で自分の役割を果たしつつ，自ら進んで情報を伝えたり得たりすることができ，周囲の状況にも気を配ることができる。	グループ内で自分の役割を果たしつつ，自ら進んで情報を伝えたり得たりすることができる。	グループ内で自ら進んで情報を伝えたり得たりすることができる。	レベル２を達成できていない。
	該当レベルに○→							
（Ｃ）対自己基礎力（自律的に行動する）	学び続ける姿勢	レベル６を満たした上で，そのレベルを越えることができる。	レベル５に加え，常に社会の動きを注視し，将来を見越して柔軟に自分自身が取るべき学びや行動を変化させ，継続的に実行できる。	様々な経験やふりかえりを通じて得られた，自分自身がとるべき学びや行動を継続している時に，障害が生じたとしても，それを乗り越えるための方法を考え，粘り強く実行している。	様々な経験やふりかえりを通じて，今後自分自身がとるべき学びや行動が明らかになった時に，それを継続的に行う方法を考え，実行している。	様々な経験やふりかえりを通じて，自分自身がとるべき学びや行動が明らかになった時に，それを継続的に行おうと試みている。	様々な経験やふりかえりを通じて，自分自身がとるべき学びや行動を考えようとする姿勢がある。	レベル２を達成できていない。
	該当レベルに○→							
（Ｄ）地域に対する興味（主体的に行動する）（地域に対して）	地域志向への態度 ※ここでの「地域」は大分に限らず，自分が生まれ育った「地域」などを含む。	レベル６を満たした上で，そのレベルを越えることができる。	レベル５に加え，自分が地域を良い方向に変えていくという強い意志を持って実践的に取り組むことができる。	地域の課題に積極的に関心を持ち，地域特有の課題を見つけ，地域に対して自分が何ができるかを考えながら取り組むことができる。	地域の課題に対して，積極的に関心を持ち，地域特有の課題を見つけようとしている。	地域の課題に対して関心を持ち，一般的な課題を見つけようとしている。	地域の課題に関心を持つことができる。	レベル２を達成できていない。
	該当レベルに○→							

問２　あなたが<u>所属した学科の専門教育</u>のうち，あなた自身が一番得意もしくは習得した<u>専門分野の番号１つに○をつけて</u>下さい。

（必ずしもあなたが選択しているコースである必要はありません。一番近い分野を選んで下さい。）

○機械電気工学科　→　①機械　②電気　③エネルギー　④自動車　⑤ロボット　⑥電子　⑦機械と電気の融合

○建　築　学　科　→　①建築デザイン　②建築工学　③インテリアデザイン　④まちづくり　⑤土木　⑥地域創生　⑦環境

○航空宇宙工学科　→　①航空機整備　②航空機設計　③宇宙機器設計　④航空機製造　⑤宇宙機器製造　⑥宇宙システム開発

○情報メディア学科→　①ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ　②ｳｪﾌﾞｻｲﾄ構築・開発　③組み込みｿﾌﾄ開発　④映像ﾃﾞｻﾞｲﾝ　⑤情報ﾃﾞｻﾞｲﾝ　⑥eビジネス

○経営経済学科　→　①ﾋﾞｼﾞﾈｽｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ　②会計ﾌｧｲﾅﾝｽ　③ｽﾎﾟｰﾂﾋﾞｼﾞﾈｽ　④ｽﾎﾟｰﾂﾄﾚｰﾅｰ　⑤社会福祉　⑥心理

問３　問２で<u>あなたが選んだ専門分野について</u>，以下のルーブリックのレベルを読んで，卒業時点であてはまる自己評価レベルに○を記入して下さい。

分類	レベル／評価項目（観点）	7	6	5	4	3	2	1
（Ｅ）専門的課題解決力	専門知識と実践的応用力	レベル６を満たした上で，そのレベルを越えることができる。	レベル５に加え，解決すべき地域や社会の課題に対し，専門知識を応用・活用して課題解決に実践的に取り組み，解決に導くことができる。	レベル４に加え，解決すべき地域や社会の課題に対し，専門知識を応用・活用して課題解決に取り組むことができる。	学んでいる専門分野の知識を身に付けるとともに，それをどのように地域や社会に応用・活用できるかを考えることができる。	学んでいる専門分野の知識をある程度身に付けている。	学んでいる専門分野の知識を獲得しようとする姿勢がある。	レベル２を達成できていない。
	該当レベルに○→							

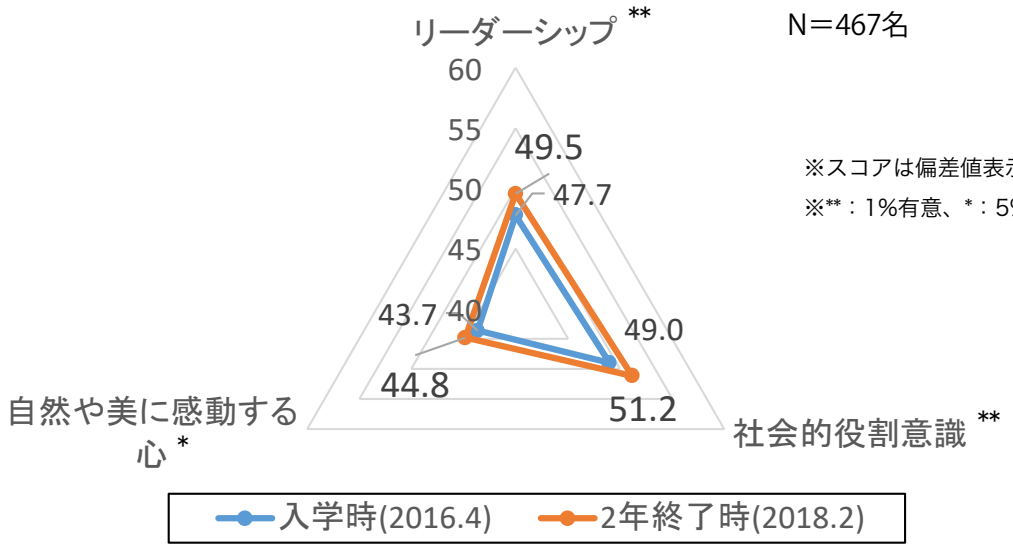
【教育における数値目標】 ジェネリックスキルの育成

本事業では、地域創生人として育成する学部によらず共通した能力として、地域で活躍するためのこころの力と汎用的技能を挙げており、具体的には「リーダーシップ」「社会的役割意識」「自然や美に感動する心」「リテラシー（知識を活用し問題解決する力）」及び「コンピテンシー（経験から学ぶ力）」などとしている。

本事業における「地域志向科目」による教育プログラムを通じて、これらの能力の成長を適切に評価するため、「こころの力」を測る外部テスト（ｎＥＱアセスメント）を入学時及び２年終了時に、「リテラシー」及び「コンピテンシー」を測る外部テスト（ＰＲＯＧ）を２年当初及び３年終了時に実施している。

＜こころの力の成長：nEQアセスメント＞

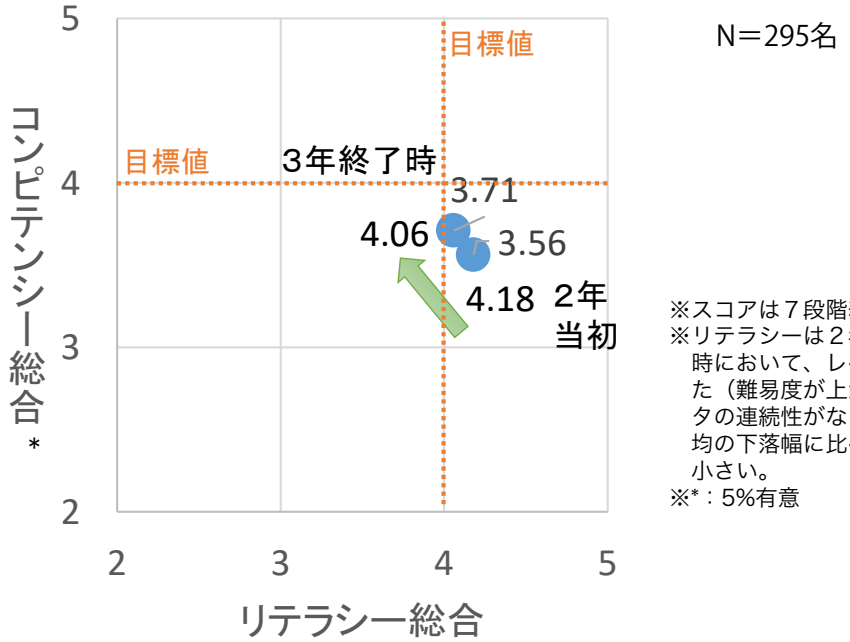
現２年生（2016年入学生）の入学時及び２年終了時の結果を下図に示す。
いずれも統計的に有意な差が認められた。



※スコアは偏差値表示
※**：1%有意、*：5%有意

＜リテラシー及びコンピテンシーの成長：PROG＞

現３年生（2015年入学生）の２年当初及び３年終了時の結果を下図に示す。
いずれも統計的に有意な差が認められた。



※スコアは７段階表示
※リテラシーは２年当初時と３年終了時において、レベル設定が変更された（難易度が上がった）ため、データの連続性がない。ただし、全国平均の下落幅に比べ、本学の下落幅は小さい。
※*：5%有意

＜参考＞

【nEQアセスメントの概要】

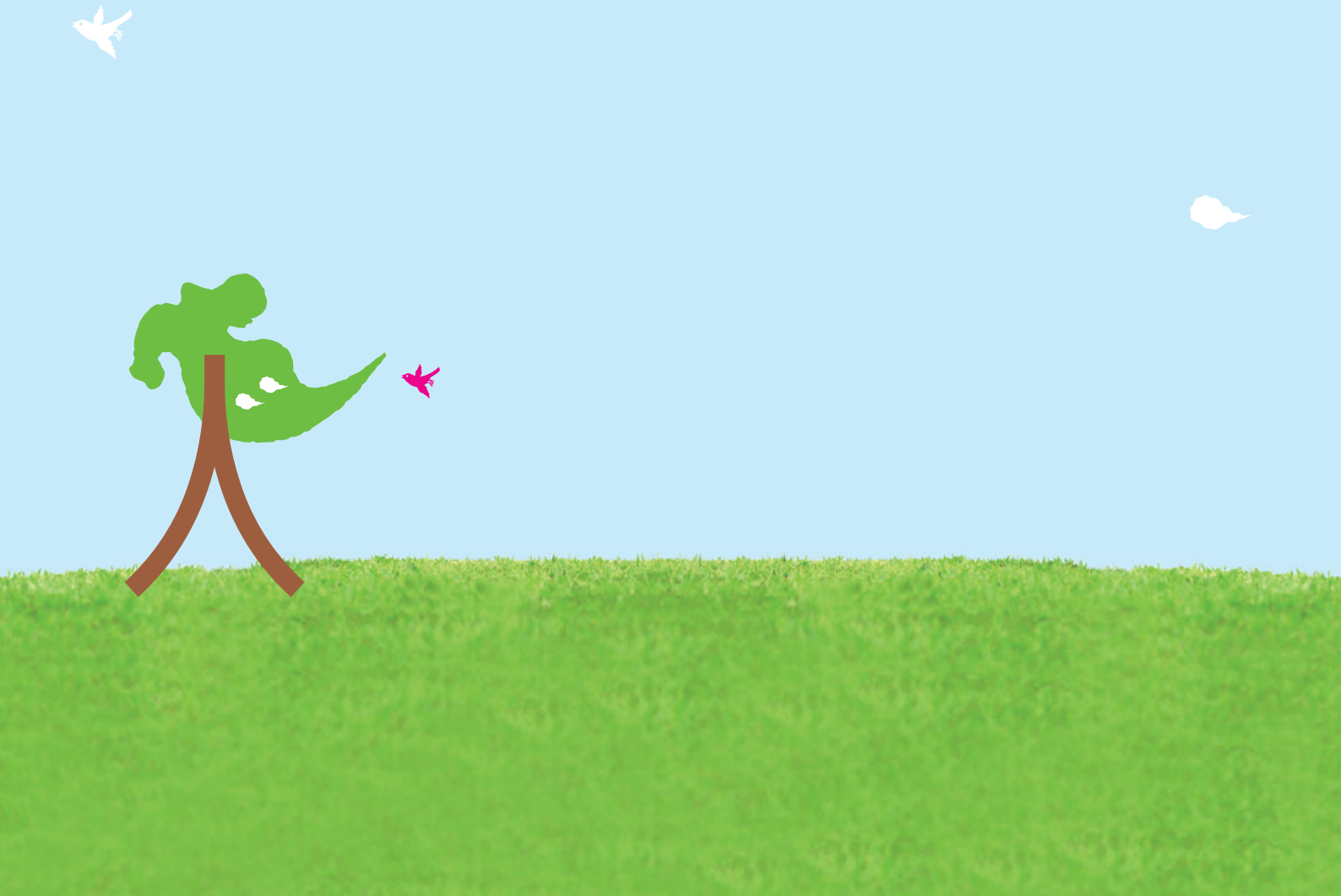
労務行政資料より

【PROGの概要】

ＰＲＯＧでは、基礎力を「リテラシー」と「コンピテンシー」の２側面から測定している。
「リテラシー」とは、知識を基に問題解決にあたる力で、知識の活用力や学び続ける力の素養をみるもの。
「コンピテンシー」とは、経験から身に付いた行動特性で、どんな仕事にも移転可能な力の素養をみるもの。

河合塾・リアセック PROG資料より

2. 大学 COC 事業 プロジェクトシート



文部科学省 地(知)の拠点

日本文理大学COC事業
『豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成』

NBU NIPPON BUNRI UNIVERSITY 日本文理大学

2017年度 COC事業 プロジェクトシートリスト

体感。感動。感謝。
おおいた、つくりびと

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、素晴らしき大分県が、私たちのキャンパスです。

プロジェクト 1

「小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化」

1-1 豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ維持活動
1-2 木佐上「まなび庵」～木佐上 IT 講習会～
1-3 留学生料理教室による佐賀関の交流会
1-4 豊後大野市大野町土師地区における地域体験交流活動研修『プロジェクト 1』の取り組み
1-5 高齢者向けものづくり教材の開発
1-6 豊後大野市ふるさと体験村における『建築マネジメント演習および実習』の取り組み
1-7 豊後大野市大野町土師地区における『環境･地域創造演習』の取り組み
1-8 地域と学生の協働による豊後大野市ふるさと体験村「開村式」の運営
1-9 佐賀関半島における地域体験交流活動研修『プロジェクト 1』の取り組み

プロジェクト 2

「人口減少社会を支えるための先進的な” ものづくり”」

2-1『地域にいきるものづくり』を目指したプロジェクト科目の実践
2-2 ものづくりによる地域貢献 ~ 被災時避難所としての廃校活用提案 ~
2-3 生きがいのあるくらしを創るオープンイノベーションワークショップ
2-4 ロボメカデザインコンペ 2017 への取り組みを通した地域課題への挑戦
2-5 地域経済を考慮した地域課題取り組みに向けたプラットフォーム構築

プロジェクト 3

「自然の積極的な活要による保全と地域活性化」

3-1 佐賀関半島・触れる観光プロジェクト
3-2 地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究
3-3 豊後大野 PR 動画プロジェクト
3-4 豊後大野酒蔵巡りプロジェクト
3-5 豊後 DEN 説 2nd Generation
3-6 あそぼーい！ポストカードプロジェクト
3-7 学生の地域資源を活用した観光プロモーション活動におけるコースを横断した教育改革

プロジェクト 4

「商店街の活性化による地域振興」

4-1 地域企業向け「地域創生人材」育成のためのマネジメント実践講座
4-2「シカケ」から見える地域課題　シカケプロジェクト
4-3「おおいた地域創生リーダー養成講座 2017 in 三重町」の取り組み
4-4 大分市佐賀関･関地区における『環境･地域創造演習』の取り組み

プロジェクト 5

「健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化」

5-1 大学で楽しく学ぼう !! 小学生対象 NBU 体験教室 2017
5-2 豊後大野市内の小中学生における社会的スキルの学校規模による比較と予防的心理教育プログラムの展開
5-3 総合型地域スポーツクラブの教室･イベントを通した教育実践活動
5-4 地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働研究
5-5 地域住民主体の地域づくり支援
5-6 住民主体の地域活動について

プロジェクト 6

「NPO 法人の活動・経営支援」

6-1 地域活性化プロジェクト「楽 . 楽マルシェ」での取り組み

プロジェクト 7

「地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6 次化）」

7-1 動画ニュース制作「地域の芽、学生の目 NBU ビデオ通信」
7-2 交流人口拡大による佐賀関半島の活性化に関する研究
7-3 大分市佐賀関･関地区の地域課題解決を目指す「さがのせきローカルデザイン会議」の取り組み

プロジェクト L

「「おおいた、つくりびと」育成のための地域志向科目・正課外活動」

L-1 教養基礎教育における地域志向科目の全学必修化
L-2 身近な政策課題を題材とした課題解決型学修
L-3 地方創生のための学生目線による地域企業リクルートビデオ制作プロジェクト
L-4 小学生のお仕事発見ランド in 佐賀関
L-5 Kids Smile Project
L-6 ジェネリックスキル養成研修

2017 年度

プロジェクト 1

小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化

豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ維持活動

実 施 体 制：池畑義人、吉村充功、園田一則、杉浦嘉雄、菅雅幸、濵永康仁（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市大野町土師地区

連 携 機 関：土師振興協議会、NPO法人ABC野外教育センター

概 要

大分県内に多く見られる小規模集落は、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている。そこで、建築学科では地域の課題を技術者の視点で解決できる人材を育成する「環境・地域創生コース」を設置している。本コースでは、人口 153 人、82 世帯、高齢化率 67%（2015 年国勢調査）の小規模集落である豊後大野市大野町土師地区をフィールドとして、コミュニティの維持策を探り、実践する取り組みを、地区の協力を得て、2011 年度より正規のカリキュラムとして取り組んでいる。本コースでは、「体験交流活動による動機付け」→「知識の修得・定着」→「課題解決型学修」という学修サイクルを明確化した科目群を導入している。このサイクルにより、学生は地域でのやりがいを感じるとともに、自分に不足する知識・技能を自覚し、その後の学びを深化できる。上級学年では実際に地域の課題解決に取り組むことで、将来、地域で活躍するために必要な幅広い能力の定着を図ることを目指している。

環境・地域創生コースに関係する主な科目群

科目名	開講学年	属性		
プロジェクト1	1年通年	専門	選必	体験交流活動
正課外活動	ー	-	ー	体験交流活動
大分学・大分楽	1年前期	教養	必修	知識の修得
森里海連環学と地球的課題	1年後期	教養	選択	知識の修得
流域生態論	2年前期	専門	選必	知識の修得
環境計画論	2年後期	専門	選必	知識の修得
地域再生論	3年前期	専門	必修	知識の修得
環境・地域創造演習	3年前期	専門	選必	課題解決型学修
建設マネジメント演習及び実習	3年後期	専門	選必	課題解決型学修
研究ゼミナールA/B	3年前後期	専門	選択	課題解決型学修
卒業研究	4年通年	専門	必修	課題解決型学修

取組内容

1 年次は通年科目『プロジェクト１』において、地域の営みを知るため、季節に応じた農林業・地域環境維持体験活動を 2017 年度は 6/4、8/8、10/7～8(合宿)の３回実施した(台風５号のため夏合宿を秋合宿に変更)。特に 3 回目は 9 月の台風 18 号の直後ということもあり、河川プールが土砂で完全に堆積するなどの被災状況も目のあたりにした。体験交流活動を通じて地域に対する興味関心が高まった学生は、学年を越えて地域での活動に正課外活動として参加している。2017 年度は地域の交流拠点施設であり、地区住民による自主運営がなされている「ふるさと体験村」の開村式（7/16）の運営スタッフとして、直前の現地準備や当日の受付、駐車場誘導、鮎のつかみ取り・学生自主企画などのイベント運営を行い、盛大に開催できた。

『プロジェクト 1』における体験活動

3 年次は課題解決型学修として、2 つの取り組みを行っている。1 つは『環境・地域創造演習』における 2 泊 3 日の合宿形式の授業である（8/31 ～ 9/2）。学生チームで地区住民へのインタビュー、フィールドワークを行い、2017 年度は専門分野の視点等から、①継承・発信すべき地域の魅力を整理し、②地域を訪れる人へ記念となるようなグッズ等の試作を、テーマとして実施した（最終日に地区住民への成果発表・提案会）。もう 1 つは、『建設マネジメント演習及び実習』における体験村内の施設整備である。住民の要望等を踏まえ、2017 年度は、五右衛門風呂・竪穴式住居内の靴箱等の製作を 4 班に分かれて実施しており、12/2 に下見、その後、学内での図面製作、資材調達等を経て、12/26 に準備施工を行った。1/20、21 に本施工を実施・完成し、最終的に原価管理等を行い、一連の施工工程を体験できた。

『環境・地域創造演習』
における住民ヒアリング

『建設マネジメント実習』
における現地施工実習

学生の学び

上記に記載した体験村や地域での各種施設の改修や環境整備の充実を現在も進行中である。また、学生との様々な協働活動は地区住民に活気をもたらしており、体験村の振興協議会での自主運営への一助にもなっている。さらには、学生達の訪問を心待ちにしておられ、地区住民の生きがいにもつながっている。

今後の展開

全体的には「地域により積極的に関わろう」、「地域の期待に応えよう」とする主体性が身についた学生が多く見られる。課題解決型学修では、専門知識・技能の活用を通じた専門力の深化が見られる。低学年の各活動では地域住民との交流や学生同士がチームで活動するため、チームワークやコミュニケーションの重要性の理解・向上が見られる。各活動の前には学生が個々の目標を設定し、教員の事前面談、事後のふり返りを徹底しており、学修効果が高まっている。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 1

小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化

木佐上「まなび庵」～木佐上IT講習会～

実 施 体 制 ：福島学（情報メディア学科）、市田秀樹（COC事業担当）

実施フィールド：大分市木佐上地区

連 携 機 関 ：木佐上連合区、木佐上コミュニティ

概 要

本講座は、2016 年度から「タブレットの使い方」から始まった「IT 講習会」である。スマートフォンやタブレット端末は、急速に普及し、高齢者のコミュニティにおいても所有している方が増大しているが、まだまだ「持っている」という状態であり、「どう使うの？」という場面が多々存在するが、孫の写真や旅行の写真を手元に残すための便利なグッズとなってきている。そこで，本年度は、「この目的のために学ぼう」に対応して必要な事が学べる講座として、木佐上コミュニティが実施する「まなび庵」の中で実施した。

ここでは「この目的のためにどう使えばいいの？」という疑問に基づいての「まなび」の場とした。また、大分市木佐上地区は、2017 年度の台風 18 号の水害の影響を受け、改めて「防災」「災害発生時」といった「有事」の時の活用法が、コミュニティ内で議論されていたことを踏まえ、これまでの IT 講習会で学んだ「LINE」を活用する方法を加えて、本講座を開催した。

図 1 「まなび庵」の様子

取組内容

地域にある拡声装置は夕方のメロディや地域の案内といった「地域コミュニティの情報共有」に利用できる施設であるが、本来の目的は「自然災害時に必要な情報を伝える」ための設備である。このように「日頃から使っている」が「いざ」という時にも使えるようになるには必要であり、どんなに優れた機能を持っていても「いざ」という時に「どう使うんだっけ？」では困る状況が生じる。この講座では「LINE」という「普段使うと便利」でかつ「緊急時に役立つ」アプリケーションの使い方を学ぶ。具体的な目標としては、「自分で」「やりたいことができる」ようになることを目指した。

図 2 「まなび」に適した環境創り

地域での成果

地域の情報が地図でいろいろ出ていることを見ることから始め、自分達でも登録できることを紹介した。まだ地域の情報発信には結びついていないが、地域のコミュニティ形成と多くの方々に魅力を知っていただく手がかりになった。

図 3 木佐上地区の水害の様子
(http://himawari928.hatenablog.com/entry/20170917/1505644405)

学生の学び

コミュニケーションの基本である「聴き取れる」の次のステップである「聴いてて疲れないか」まで一歩踏み込んで会場作りを行った。これまでは「IT 講習会」で「機材と使う技術」だけに着目していたが、「講習会でお迎えする」ことを考えるために「一歩」踏み込んだ「講習会とその環境」にまで気を配った。

今後の展開

スマートフォンに代表されるような IT 技術が使えるようになるだけでなく、「まなび」が「できる事を増やす」ことであること、そしてそれが「豊かで活力あふれる毎日」の礎であることを共有しながら、講座内容が地域の発展につながるように、2018 年度の開催を検討していく。

図 4 LINE の位置通知機能を使った地域マップの例

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 1

小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化

留学生料理教室による佐賀関の交流会

実 施 体 制 ：鄭多彬（経営経済学科･3年）、曹南（環境情報学専攻･2年）、泉丙完、卓涓涓（経営経済学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連 携 機 関 ：大分市佐賀関支所、まちの駅よらんせ～

概 要

韓国人や中国人留学生と日本人学生が一緒になって、留学生料理教室による佐賀関地域住民との交流会を行った。本学には多数の留学生がいるが、ほとんどの留学生は大分市内や福岡、別府市に行く機会が多く、本学の東側にある佐賀関地区には日頃、行く機会がほとんどないため馴染みの薄い地域である。そこで、佐賀関地区において、留学生と日本人学生、地域住民が一緒になって料理を作る交流会を企画することにより地域の活性化や国際交流を推進し、留学生には佐賀関地域について知る機会になるようにした。本交流会により、留学生には、佐賀関地区の様子や美しい環境を知る、よい機会になった。また、地域住民の方々にとっては、日頃、接することが少ない留学生との交流が生まれ、国際交流活動を促進できた。前回までは韓国留学生が中心になって交流会を推進したが、今回からは韓国の留学に加え中国の留学生が一緒になって交流会を企画・実行し、韓国料理や中国料理に加え、韓国と中国の合作料理も提案した。この活動を通して韓国人学生と中国人学生間や日本人学生間でも交流が促進され、お互いの文化などについて知る機会にもなった。また、地域の方からも地域の素材を使った和食も提供され、留学生にとっても佐賀関での良い思い出にもなった。今後も、引き続き地域創生や国際交流の観点からこの活動を継続していく予定である。

佐賀関住民との留学生料理教室

交流会の背景

取組内容

本学の留学生、日本人学生や地域住民が一緒になってお互いの国の料理を作るという共同の作業を通して、以下のような交流を図った。

- ●日本人学生や佐賀関地域住民にとって、留学生との新たな交流が生まれ、それを通して、韓国や中国の料理、文化などについて知る機会にもなった。
- ●留学生に佐賀関地域をもっと知ってもらう。

準備期間中は、留学生と日本人学生 3 名、教職員 3 名が一緒になってリハーサル等を行いながら、お互いのコミュニケーションを図った。佐賀関公民館で行われた、当日の交流会には、41 名（地域住民 10 名、留学生 24 名、教職員 3 名）が参加し、一緒に韓国や中国の家庭料理を作って食べた後、白木海岸を見て回った。

料理教室の様子

白木海岸での交流

地域での成果

交流会がきっかけになり、地域住民らとの個人的なつながりができ、お互いのイベントにも参加し、国際交流が行われるようになった。

学生の学び

交流会に参加した学生は、準備期間、交流会当日および、その後の活動を通して、異なる環境や文化の人々とのコミュニケーション能力を向上させた。以前はあまり見られなかった韓国人留学生と中国人留学生の間の交流も発展させる機会になっただけでなく、地域創生活動に対する理解を深めることもできた。

今後の展開

交流会は、留学生らが地域創生にどのような貢献ができるかを考えるきっかけとなった。今後は、さらに多くの留学生が参加した地域創生活動につなげて行く予定である。

地域住民との交流

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 1

小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化

豊後大野市大野町土師地区における地域体験交流活動研修『プロジェクト1』の取り組み

実 施 体 制 ：池畑義人、吉村充功、園田一則、杉浦嘉雄（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市大野町土師地区

連 携 機 関 ：土師地区振興協議会、ABC野外教育センター

概 要

建築学科では 2011 年度から 7 年間にわたって、豊後大野市大野町土師（はじ）地区において体験・交流活動および課題解決型学修を実践してきた。これらの活動に関連する科目群を右表に示している。このように建築学科のカリキュラムは、土師地区をフィールドとして段階的な学修が達成できるように構成されている。土師地区は豊後大野市北部の山間に位置する高齢化率が 67 % という地域である。この地区の中心部には、河川プールを併設したキャンプ施設である『ふるさと体験村』があり、地域のシンボルとして住民の手によって運営・維持管理されている。この地域を中心に展開される建築学科の学修の過程において、地域住民と学生の交流および、農業や建設分野における地域貢献活動、地域活性化の提案がなされている。ここでは、建築学科の専門科目である『プロジェクト１』において実施した体験・交流活動について報告する。

建築学科環境・地域創生コースの科目群

科目名（開講学年）		属性	
プロジェクト1	（1年）	専門	体験・交流活動
正課外活動	（1～2年）	-	
大分学・大分楽	（1年）	教養	
森里海連環学	（1年）	教養	知識の修得
データ解析演習	（1年）	専門	
流域生態論	（2年）	専門	
地域再生論	（2年）	専門	
環境・地域創造演習（3年）		専門	課題解決型学修
建設マネジメント（3年）		専門	
研究ゼミナールA/B	（3年）	専門	
卒業研究	（4年）	専門	

取組内容

『プロジェクト１』では、事前に少子高齢化社会の状況と将来について調査をした上で実習の目標を立案する。これは、建築学科の専門科目として「地域の現状を知る」という目標を明確にするためである。また、チームビルディングなどのワークショップも事前に実施している。そして 6 月と 8 月に日帰り実習、10 月に 1 泊 2 日の合宿型の実習を行った。現地実習では地域の施設整備、農林業体験などを実施している。また、現地実習では地域のリーダーから講話を受ける機会も設けている。

秋の収穫体験における稲刈り

地域での成果

地域との体験交流活動を始めた当初は、一部の住民だけとの交流にとどまっていたが、徐々に交流に参加する住民が増えつつある。『プロジェクト１』をはじめとする学生の活動によって豊後大野市において、土師地区は大学と連携して地域が活性化している地域であるという認識が広がりつつある。

台風によって障害となった樹木の剪定作業

学生の学び

実習は 6 ～ 8 名程度のチーム単位で実施される。このチーム単位で明確な目標のもと、体験交流活動を実施することで、多くの学生が地域で学ぶ・働くことの意味を考えるきっかけを持つことができた。また、学生間においても役割分担やチームワークなどを意識した行動ができるようになった。さらに、大学における事前・事後学習によって中山間部の現状と将来について考えることができる学生が増えてきつつある。

今後の展開

『プロジェクト１』は地域づくり副専攻の科目として他学科にも開講されている。今後は地域づくり副専攻の受講者を増やし、土師地区以外にもフィールドを拡大しながら他学科にも取り組みを拡げる計画である。

現地実習の前後に実施する大学内における学習

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 1

小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化

高齢者向けものづくり教材の開発

実 施 体 制 ：鈴木秀男、松永多苗子、足立元、星芝貴行（情報メディア学科）、稲川直裕（機械電気工学科）
平居孝之、濵永康仁（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市

連 携 機 関 ：豊後大野市、養護老人ホーム常楽荘、おがた放課後チャレンジ教室

概 要

高齢者施設等で実施されている介護予防やレクリエーションメニューは、体操など体を動かし、気分をリフレッシュするものが主流である。今回開発する教材は、ものづくりを通して、指先を動かし、形や色を判断しながら簡単にかつ楽しみながら組み立てられる電子工作教材である。完成した教材は、「目で見て、耳で聞いて、触って操作して」楽しめる教材であり、視覚や聴覚にも働きかけ脳の活性化につながることも期待される。また、知り得た知識や技能を家族や周りの人に教えることで、コミュニケーションの促進や生きがいの認識にもつながることが期待できる。

取組内容

開発している教材は、マイコンを用いたものづくり教材である。電子工作を基本として組み立て、マイコンを実装して、動作するものであるが、組み立て時の安全・安心・容易・時短を考慮して、ブレッドボード上での実装で完成するようにしている。実装に関しては、認識しやすい配線と部品を用いるようにしている。昨年度は、高齢者向けのものづく教室や子供たちとの合同ものづくり教室などを実施し、高齢者・子供たち・施設担当者より、多くの有意義なアドバイスをいただくとともに、実施者としても多くの気づきがあった。今年度は、いただいたアドバイスや要望、気付きをもとに、既存教材の改良と新規教材の開発に取り組んでいる。昨年度に改良を重ねてきた電子サイコロ（アナログ版、デジタル版）においては、実装とプログラミングの見直し、コストの削減を図った。

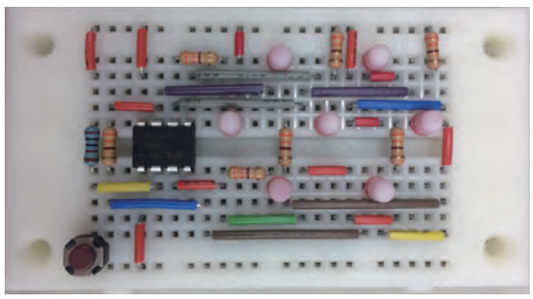
本年度は、新たに、脳トレとしても使用できるシンプルゲーム、自ら演奏ができる電子楽器を作成している。シンプルゲームでは、音と光に合わせて点灯する順番を記憶して、その通りにスイッチを押し、再現するゲームであり、次第に難易度が上がるようにしている。作成したシンプルゲームは、3 音 3 色版であるが、より高度な 4 音 4 色版も作成可能である。電子楽器では、4 個のスイッチで 1 オクターブの音程を出力する簡易版と、8 個のスイッチを使い 2 オクターブの音程を出力する拡張版の 2 種類を作成している。

地域での成果

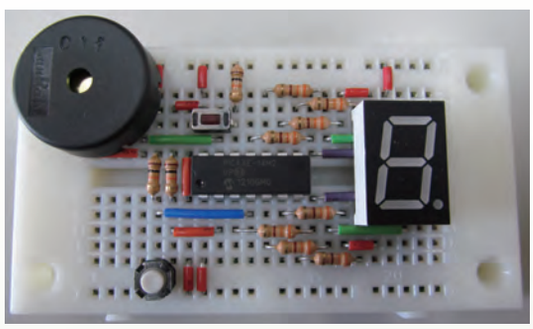
初めての方でも組み立てやすいように、分かりやすい手順書を作成しているが、学生や子供たちとの会話を楽しみながら作業をすることができ、完成して無事に動作した際には、達成感も得られることになる。

今後の展開

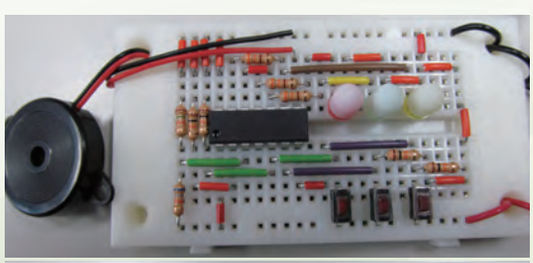
今後も教材の改良や新規教材の開発に取り組むとともに、高齢者向けのものづくり教室、子供たちと連携したものづくり教室も継続して実施したいと考える。

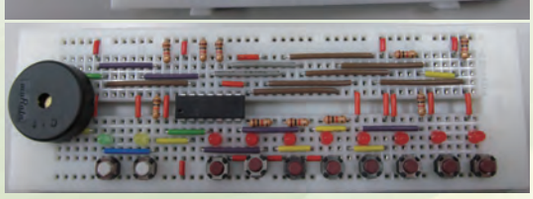


改良した電子サイコロ（アナログ表示版）。
【機能】サイコロの目の点灯、カウントアップタイマー
カウントダウンタイマー



改良した電子サイコロ（デジタル表示版）。
【機能】サイコロの目の表示、最大 9 まで表示に変更
大学ロゴの表示、バーの回転表示
カウントアップタイマー、カウントダウンタイマー





シンプルゲーム（上）と電子楽器（下）

高齢者ものづくり教室実施風景

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 1

小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化

豊後大野市ふるさと体験村における『建設マネジメント演習及び実習』の取り組み

実 施 体 制 ：吉村充功、池畑義人、濵永康仁（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市大野町土師地区

連 携 機 関 ：土師振興協議会

概 要

大分県内に多く見られる小規模集落は、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている。そこで、建築学科では地域の課題を技術者の視点で解決できる人材を育成する「環境・地域創生コース」を設置している。本コースでは、人口 153 人、82 世帯、高齢化率 67%（2015 年国勢調査）の小規模集落である豊後大野市大野町土師地区をフィールドとして、コミュニティの維持策を探り、実践する取組を、地区の協力を得て実施している。「体験交流活動による動機付け」→「知識の修得･定着」→「課題解決型学修」という学修サイクルを明確化した科目群により、学生は地域でのやりがいを感じるとともに、自分に不足する知識・技能を自覚し、その後の学びを深化できる。上級学年では実際に地域の課題解決に取り組むことで、将来、地域で活躍するために必要な幅広い能力の定着を図ることを目指している。

【下見・準備施工】

取組内容

『建設マネジメント演習及び実習』では、3 年次後期の課題解決型学修として、土師地区の中心部にある地域交流拠点「ふるさと体験村」内の施設整備を行っている。ふるさと体験村の新たな魅力を創るため、住民の要望等を踏まえ、今年度は 4 班に分かれて工作物を建設した。本授業では、建設現場管理方法を理解、習得するため、設計・資材表の作成・施工・原価管理の一連の工程を現地の方々と話し合いながらすべて実施することが特徴である。

【施工実習のスケジュール】

12/2	現地下見・測量
12/7 ～	図面、資材調達表等作成
12/26	準備施工（一部の班）
1/20 ～ 21	本施工
1/25	原価計算、振り返り
2/4､12	残施工（一部の班）

【作業風景】

地域での成果

【今年度の工作物】

・五右衛門風呂　　・ロケットストーブ風呂

・竪穴式住居内の靴箱　　・農業小屋の棚

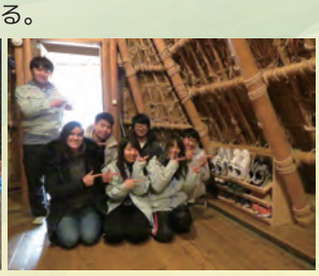
実習を通じて、上記の工作物を完成することが出来た。

学生の学び

実際に施工することで、工程の管理や、住民（施主）とのコミュニケーションの重要性を学ぶことができた。また、図面の作成から施工・片づけまであらゆる作業をこなすことで、技術面と人間性の両面で自信につながった。

今後の展開

本格シーズンである 2018 年の夏より、体験村の利用・宿泊者に利用いただくこととで、体験村の魅力向上を図るが、あわせてシーズン中の体験村の運営協力についても模索する。



【完成写真】

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた､つくりびと

『おおいた､つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 1

小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化

豊後大野市大野町土師地区における『環境・地域創造演習』の取り組み

実 施 体 制 ：吉村充功、池畑義人、杉浦嘉雄、菅雅幸（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市大野町土師地区

連 携 機 関 ：土師振興協議会

概 要

大分県内に多く見られる小規模集落は、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている。そこで、建築学科では地域の課題を技術者の視点で解決できる人材を育成する「環境・地域創生コース」を設置している。本コースでは、人口 153 人、82 世帯、高齢化率 67%（2015 年国勢調査）の小規模集落である豊後大野市大野町土師地区をフィールドとして、コミュニティの維持策を探り、実践する取組を、地区の協力を得て実施している。「体験交流活動による動機付け」→「知識の修得・定着」→「課題解決型学修」という学修サイクルを明確化した科目群により、学生は地域でのやりがいを感じるとともに、自分に不足する知識・技能を自覚し、その後の学びを深化できる。上級学年では実際に地域の課題解決に取り組むことで、将来、地域で活躍するために必要な幅広い能力の定着を図ることを目指している。

取組内容

『環境・地域創造演習』は、3 年次の課題解決型学修として、2 泊 3 日の合宿形式で実施している(8/31～9/2)。今年度は学生13名が4チームに分かれて、地区住民へのインタビュー、フィールドワークを行い、専門分野の視点等から①継承・発信すべき地域の魅力を整理し、②地域を訪れる人へ記念となるようなグッズ等の試作をテーマに実施した（最終日に地区住民への成果発表・提案会を実施）。

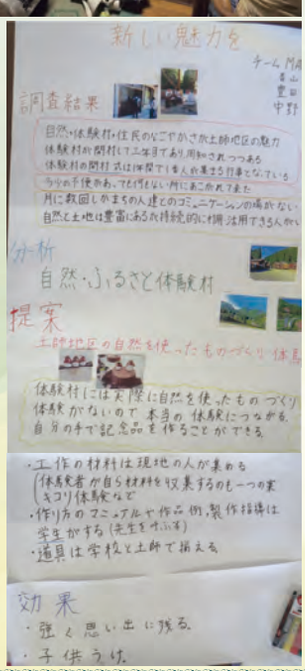
【取り組みテーマ】

・自然とふるさと体験村の活用策　・西川渓谷の活用策

・神楽の復活・活用策　・郷土料理（じり焼）の活用策

地域での成果

調査の結果、自然・体験村・住民のなごやかさが土師地区の魅力となっていることが分かった。特に体験村は地区の運営になって３年目であり、維持する意義が周知されつつある。一方で、月に数回しかコミュニケーションの場がないなど、超高齢化地区ならではの課題がある。そこで、地区の木材（端材）を活用した体験村での子ども向け工作教室を住民が指導者になって実施するなどの提案を行い、試作も提示するなど、体験村にさらなる魅力を創ることの方向性が示せた。



学生の学び

地区住民へのインタビューを通じて、それぞれの住民が求めているものが違い、同じ状況に対して、相反する意見があることを知ることができた。例えば、移住してきた人は何もない所を欲し、昔を知っている人は昔のような活気があるまちを目指していることなど。また、話を聴くなかで、昔も村おこしが行われたことを知った。そこで失敗したからこそ今の状況があることを知り、若者の視点でただ提案するだけでなく、村おこしをするのに何が大事なのかをもっと知っていくことが重要であることを学んだ。

今後の展開

本授業で提案したものの内、地区住民と合意できたものは今後のゼミ活動等を通じて積極的に実現していく。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 1

小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化

地域と学生の協働による豊後大野市ふるさと体験村「開村式」の運営

実 施 体 制 ：吉村充功、池畑義人（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市大野町土師地区

連 携 機 関 ：土師振興協議会、大分県生活環境部、NPO法人ABC野外教育センター

概 要

大分県内に多く見られる小規模集落は、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている。そこで、建築学科では地域の課題を技術者の視点で解決できる人材を育成する「環境・地域創生コース」を設置している。本コースでは、人口 153 人、82 世帯、高齢化率 67%（2015 年国勢調査）の小規模集落である豊後大野市大野町土師地区をフィールドとして、コミュニティの維持策を探り、実践する取り組みを、地区の協力を得て実施している。

取組内容

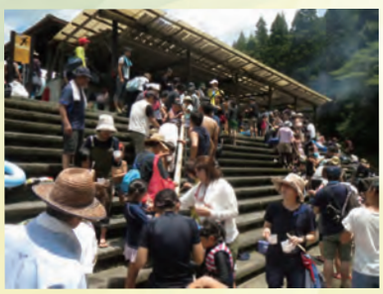
『プロジェクト 1』（建築学科 1 年次科目）での農林業体験や地域コミュニティ維持活動といった体験交流活動を通じて地域に対する興味関心が高まった学生は、学年を越えて地域での活動に正課外活動として参加している。今年度は地域の交流拠点施設であり、地区住民による自主運営がなされている「ふるさと体験村」の開村式（7/16）の運営スタッフとして、学生 14 名が地区住民と協力し、直前の現地準備（水車の設置や河川プールの土砂出し等）や当日の受付、駐車場誘導、鮎のつかみ取り・学生自主企画（ストラックアウト）などのイベント運営を行った。

地域での成果

学生協力が 3 年目となり、地区での取組が広く知られたことから、今年度は大分県主催の「大野川水環境フェスタ」、NPO 法人 ABC 野外教育センター主催の「おおいたネイチャーキッズエコアクション」も併催されるなど、地区の自然環境を活かしたイベントとして盛大に開催できた。当日は、昨年度を大幅に上回る約 400 名の参加があり、子供たちのにぎやかな声が地域に響いた。

学生の学び

2016 年度を大幅に上回る来場者があり、駐車場に入りきれなくなったり、誘導も混乱してしまった。想定外がないように改善、準備をする重要性を学んだ。地区には、まだまだ魅力が残っており、こうしたイベントを続けていくことの大切さをあらためて感じた。



今後の展開

2018 年度以降も地区と学生の協働により開村式や体験村の運営を行う。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけではははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 1

小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化

佐賀関半島における地域体験交流活動研修『プロジェクト1』の取り組み

実 施 体 制 ：吉村充功、杉浦嘉雄 (建築学科)

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連 携 機 関 ：NPO法人さがのせき・彩彩カフェ、大分県建築士会佐賀関支部、関崎海星館 他

概 要

私たちが生活する地方では、多くの地域で少子高齢化やコミュニティの衰退が急激に進行しており、新しい風（若者）による活力が求められている。同時に、これまで受け継がれてきた誇るべき地域の伝統、文化、環境が失われつつあり、それらを継承する必要性にも迫られている。本学では、学部・学科の枠をこえて、地域が誇るべき資源を理解する能力を習得すると同時に、地域住民や関係者とより良い地域社会を主体的につくるために必要なジェネリックスキル（汎用的能力）を育成する「地域づくり副専攻」を設置している。その最初の取り組みとして、大分市佐賀関校区での地域体験交流活動を実施する建築学科１年『プロジェクト１』を通年科目として開講している。佐賀関校区は、旧佐賀関町の中心部で、漁業と精銅で栄えた港町であるが、現在は人口 5 千人弱、高齢化率 50% 強と急激な人口減少、高齢化が進んでいる。本取り組みでは、佐賀関半島にある関崎海星館や関崎灯台周辺での環境整備活動を通じた観光活性化につながる取り組みや、地域の小学生との交流活動を通じて、地域コミュニティの現状を知る機会としている。

関崎海星館での講話

関崎灯台入口駐車場での活動

取組内容

2017 年度の『プロジェクト１』（佐賀関班）には、建築学科 18 名、経営経済学科 3 名の合計 21 名の学生が参加し、3 回の現地研修会を実施した（うち 1 回は合宿）。

●第 1 回研修：6 月 3 日（土）
関崎灯台周辺の環境整備、関崎海星館の視察等

●第 2 回研修：8 月 5 日（土）～6 日（日）（宿泊研修）
関崎灯台入口駐車場・波舞の坪周辺の環境整備、子ども達との交流会、ごみ拾い活動（秋の江地区）

●第 3 回研修：10 月 7 日（土）
関崎灯台入口駐車場の環境整備等

活動前後の関崎灯台からの眺望（奥は四国・佐田岬）

地域での成果

10 年以上、手が入っていなかった関崎灯台周辺の環境整備を行った結果、灯台からの眺望が開けたり、駐車場が利用しやすい環境を整えることができた。また、地区外との交流が少ない地区の子どもたちにとって、大学生との交流会は大変良い刺激になったとの声を地域からいただいた。

学生の学び

環境整備の重労働を通じて、地区を整備・維持する大変さを知るとともに、目に見える成果を得たことでやりがいにつながった。また、地区の過疎化の現状を肌で感じることができた。

学生企画による子どもたちとの交流会

関崎海岸での集合写真

今後の展開

今回の環境整備活動をキッカケとして、関崎灯台周辺の本格的な整備、観光活用の動きが出始めた。今後も継続的に佐賀関半島の環境整備を行っていく。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけではははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 2

人口減少社会を支えるための先進的な“ものづくり”

『地域にいきるものづくり』を目指したプロジェクト科目の実践

実 施 体 制：福島 学、松永多苗子（情報メディア学科）、筑紫彰太（機械電気工学科）、市田秀樹（COC事業担当）

実施フィールド：大分市 木佐上地区

連 携 機 関：木佐上連合区、木佐上コミュニティー

概 要

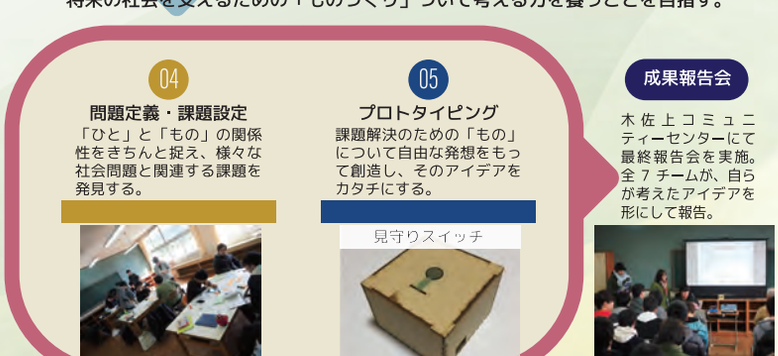
日本の現状を取り巻く社会において、働き方の変化や人口減少に伴う少子高齢化など、さまざまな社会問題が取り上げられている。これらの問題に向き合いながら、将来の社会が持続的に豊かになっていくためには、それを支え続けるための「ものづくり」が必要となる。特に、高齢化にともなう医療福祉問題、労働人口の減少による産業構造の変化や生産の効率化など「もの」が果たす役割は大きい。そこで、「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、自由な発想をもって創造的に問題解決に取り組める人材を育成するための教育プログラム作りを目指す。
本プロジェクトでは、「地域にいきるものづくり」をテーマとして、学生自らが地域（大分市木佐上地区）に出て、現地の現状を自分たちの目で見て、肌で感じ、そこからさまざまな社会問題と関連する課題を発見する事からはじめる。その後、課題解決に必要だと考える「もの」について、自由な発想をもって考え、それをカタチにすること（プロトタイピング）を実践していく。このプロセスを通して、「ものづくり」と社会との接続について考えることで、将来の社会を支えるための「ものづくり」について考える力を養うことを目指す。

取組内容

専門基礎科目『ロボットプロジェクト入門２』（1 年生後期科目 工学部 機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科 ）では、授業前半を地域活動を含む形での「課題抽出 / 発見」→「問題定義 / 課題設定」のプロセスに設定している。「課題抽出 / 発見」のプロセスにおいて、少子高齢化の地域課題に直面している大分市木佐上地区の中で活動することで、多様な地域社会の課題について学生自らが触れる機会をつくる。さらに授業後半では、その中で見出された課題に対する解決手法の検討をおこなう。創造性を大切にしながら、アイデアをカタチにするプロトタイピングを行う。全体のプログラムを通じて、「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、将来の社会を支えるための「ものづくり」ついて考える力を養うことを目指した。

2017 年度のロボットプロジェクト入門２の授業パターン

将来の社会を支えるための「ものづくり」ついて考える力を養うことを目指す。



地域での成果

最終報告会を木佐上コミュニティーセンターにて行い、2017 年度は、全 11 チームが、自ら考えたアイデアについて報告を行った。獣害対策や高齢者向けの見守りや、遮断機や警報器が設置されてない踏切のための安全・安心デバイスなど、IoT や ICT などの要素を取り入れた学生目線でのアイデアが多く出た。地域住民からは、若者が地域課題に取り組む事への期待、活動の継続性への期待、一部のアイデアに対しては実際に使えるモノにして欲しいなど、アイデアに対する期待する声が多かった。

学生の学び

「各自の作業の進歩状況など、情報を共有すること」など、プロジェクトを進めるにあたっての必要な力への気づきや、「実際に木佐上地区に行ったことで、現地でしか分からない気づきがあったこと」など、「ものづくり」において最も必要なユーザ中心の考え方の一端に触れることで、「作りたいモノをつくる」から「必要とされるものをつくる」という捉え方の大切さを実感していた。

今後の展開

地域の声として、「課題に対するものづくりの継続性と発展」が望まれていることから、上位学年での展開も視野にいれながら、「ロボットプロジェクト」全体として地域と連携しながら、「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、将来の社会を支えるための「ものづくり」ついて考える力を養うことを目指していく。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 2

人口減少社会を支えるための先進的な“ものづくり”

ものづくりによる地域貢献
～被災時避難所としての廃校活用提案～

実 施 体 制 ：近藤 正一、濱永 康仁（建築学科）

実施フィールド：大分市木佐上地区

連 携 機 関 ：木佐上連合区、木佐上コミュニティー

概 要

建築学科では、１年次から３年次まで各学年に通年科目として『プロジェクト１～３』が開講されており、１年前期の『プロジェクト実習』と合わせて〈プロジェクト系科目〉として位置付けられている。プロジェクト系科目では、１年次に地域における体験交流活動を経験し専門教育の学修に対する動機付けを図り、２年次は専門知識の修得と定着を目指す様々な実践教育を行い、３年次にはより高度な調査・分析に基づく提案を目指す課題解決型学修に取り組む。これら一連の学修サイクルを明確化させるため、各コースにおいてプロジェクト系科目を中心とする専門教育科目の体系化が図られている。そして、それらの中間段階を担う２年通年科目『プロジェクト２』では、とくにインテリアデザインコースとのカリキュラム連携の中で、ものづくりによる地域貢献の技術と豊かな感性を身につけることを目的とし、具体的な地域課題に対する解決方法の提案を行う。

『プロジェクト２』の授業風景

取組内容

旧木佐上小学校は、廃校後、木佐上コミュニティーセンターとして活用されており、木佐上地区の被災時避難所に指定されている。また、近年、避難所での長期間の避難生活において個人や家族のプライバシーを守るためのパーティションが全国的に注目されていることから、『プロジェクト２』では、高機能なパーティションの開発提案とモックアップによる実際の使用報告を課題として取り組んだ。履修した学生たちは、主に竹材を使用した軽量で扱いやすい躯体を作ることにより、簡便に安心できる空間を生み出すための最適な間仕切りの方法を考案し、実際に制作し木佐上コミュニティーセンターで報告した。

アイデアスケッチの例

地域での成果

スタードームと呼ばれる簡易なスケルトンに様々なインフィルを組み合わせることで、用途や目的に合わせた多様かつ魅力的な仮設空間を構築することに成功した。木佐上地区の方々に活用していただける提案となり、さらなる取り組みへの期待から、次年度の活動へつながる成果を上げることができた。

木佐上コミュニティーセンターでの発表会の様子

学生の学び

全履修生に対し、各自およびグループごとの取り組みについて振り返るためのレポート提出を義務づけた。１年次に育んだ動機付けが実を結び、より専門性を活かした具体的な提案として結実させることができた。また、チームワークによるプロダクトデザインという高度な課題を十分な水準で成し遂げることができ、これまでの学修へのフィードバックとなるとともに、今後の学修サイクルへとつなげることができる学びとなった。

モックアップ組み立て実演の様子

今後の展開

今回の提案や作品発表は、一定の評価を得たものの、未だ発展の余地があると目される 2018 年度は、カリキュラムの連携をさらに強化するとともに、指導体制の見直しや 2017 年度までのノウハウを活かした課題の再設定により、実効性の向上を目指す。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけではははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 2

人口減少社会を支えるための先進的な“ものづくり”

生きがいのあるくらしを創る オープンイノベーションワークショップ

実 施 体 制 ：市田秀樹（COC事業担当）、池畑義人（産学官民連携推進センター、建築学科）

連 携 機 関 ：大分県立芸術文化短期大学、大分県立看護科学大学、
社会医療法人 敬和会 大分リハビリテーション病院、大分県医療ロボット･機器産業協議会

概 要

これまで人の暮らしは、モノによって支えられ、モノの進化によって豊かになってきた。しかしながら、大量生産・消費の今日の社会においては、企業利益主導型のくらしの形態が構成されており、一人ひとりのくらしの多様性は、ある部分で置き去りにされている。このような状況の中で、２１世紀を迎えた日本では、超高齢化・人口減少等の社会構造の変化を受けて、一人ひとりの多様性を尊重することの重要性が強く認識され、くらしの在り方についてそれぞれの立場で一人ひとりが考えていく必要性に迫られている。

このプロジェクト型ワークショップでは、学生、大学関係者、医療機関、企業、自治体など様々なセクターのメンバーが集まり、対話とものづくりを通して社会課題の解決に取り組む。テーマとしては、今後の超高齢化社会の中で必要とされる「モノ」に焦点をあてる。特に、「くらしを支えるモノ」、具体的には介護･医療･福祉に関わる器具･機器に着目し、それらを必要としている人が自立した生活を送れることを目標に、課題に対するアイデアを創造しカタチにする。

取組内容

本ワークショップでは、①知る　②共感する　③デザインする　④創る　の４つステップで構成される。

①知る：デザインプロセス（デザイン思考など）、インクルーシブデザイン、オープンイノベーションなど、今後の共創社会において課題解決に向けた取り組みに必要なデザイン手法について学ぶ。

②共感する：ユーザーの立場に立ち、共感する事から、課題の本質を探る。そのために、実際に体験をしたり、ユーザーの行動を観察する事を行う。

③デザインする：共感することから得られた課題に対して、創造的に解決するために、様々な分野のメンバーやユーザーを巻き込みながらアイデアを検討する。

④創る：プロトタイピングを通してアイデアをカタチにし、対話を進めることで、創造的課題解決に向けた取り組みを行う。

これらのプロセスから成る計４回のワークショップ（デザインワークショップ、ヘルスケアハッカソン、アイデアソン、プロジェクトメイキング）と成果報告会を行う。2017 年度は、合計 10 プロジェクトについて、成果報告を行った。

①知る：最新の情報を共有

②共感する：体験･観察から考える。

③デザインする：解決策を考える。

④創る：試作品を創り、試す。

図 1. ワークショップの４つのステップ

地域での成果

参加３大学（ＮＢＵ，大分県立芸術文化短期大学、大分県立看護科学大学）の他に、医療機関、ものづくり企業、自治体などの構成員が参加している。このような多様なメンバーが集まる機会は少なく、参加者からは、専門外のメンバーとものづくりを行うことで新たな視点を獲得した、今後の業務に活かせるなど、人材育成の観点からは、大きな成果を上げている。

学生の学び

参加大学の学生にとっては、専門外の学生や社会人とコミュニケーションを取る中で自分の専門性の再確認や、モノを創りあげていく中で、ユーザーの立場に立って考えることに必要性など、今後の社会の中で必要とされるスキルの醸成につながっている。またワークショップの場を越えて、複数の共同研究（企業−大学間）が生まれるなど、その可能性は広がってきている。

2017 年度前半には、義手を開発している NPO 法人 Mission Arm Japna の近藤氏による講演会、後半には IoT（Internet of Things）を意識して、スマートフォンでプログラミングできる電子タグ「MESH」を取り入れたワークを行うなど、ワークショップの中身を発展させた。

図 2. プロジェクトの成果の例：「Seen Glasses」

今後の展開

今後は、さらに多様なメンバーの参加を促し、社会の中で必要とされるものづくりを通してネットワークを形成することで、今後の社会にとって必要な「知」と「情報」の共創エコシステムの一部にワークショップが位置づけられるように展開を目指していく。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870−0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた､つくりびと

『おおいた､つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 2

人口減少社会を支えるための先進的な“ものづくり”

ロボメカデザインコンペ2017への取り組みを通した地域課題への挑戦

実 施 体 制 ：大里一矢，大塚柊，高橋瑞希，宮﨑翔也（情報メディア学科･3年）

実施フィールド：大分市木佐上地区

連 携 機 関 ：（一社）日本機械学会 ロボティクス・メカトロニクス部門

概 要

大分県は、湯治文化にゆかりが深く鎌倉中期の浜脇温泉には大友頼泰によって温泉奉行が置かれ、別府温泉の楠温泉には元寇の役の戦傷者が保養に来た記録が残っている。別府は､1931年(昭和6年)に日本の大学で初めて温泉療法研究施設が開設されている。ここでの湯治文化は農閑期の福祉的側面が強く、疲れを癒し「活力」を取り戻すために利用されることが多かった。しかし現在は「福祉」が「高齢者や障碍者向けのサービス」との認識が強いのが現状である。これらのことから｢福祉産業｣を「継続可能な産業」とし、かつ「地域活性」につなげることを考え地域住民が相互に支え合う地域コミュニティ形成の支援（福祉産業支援）を可能にする装置として「ウェルステッキ」を考えた。

図１　地域コミュニティ支援のコンセプト

取組内容

１）木佐上地区での課題発見

ロボットプロジェクト関連科目を通して発見した地域課題を精査し、課題解決策を考えた。

２）Hallow を通した福祉との向き合い

Hallow（生きがいのあるくらしを創るオープンイノベーションワークショップ）での活動を通し「福祉」についてどうすることが必要なのかを考えた。

３）解決策で使う技術の試作

歩行情報、位置情報、音源情報、画像情報、造形技術、を駆使して試作を行った。

図２　木佐上地区での取組み

図３　Hallow での取組み

地域での成果

木佐上地区の地図情報に、日常のアクティビティとして、よく使う道路やひやりとした場所といった位置情報と歩行情報、さらにはよくその場所に居る人等の地域情報を収集するための基礎技術の試作が行えた。この情報から、万が一の災害時に避難誘導や声掛けを行う等を実施する際の地域基礎情報に活用できると考えている。

図４　ロボメカデザインコンペ

学生の学び

１ 年次の科目からの学びが重なり、お世話になった地域に自分達ができることを考え、プロトタイプし、検証実験に踏み出せるまでのスキル修得のステップを確実に踏んでいる。地域課題に継続的に取り組むことで、地域課題が解決できるだけでなく、自己理解が深まり、修得目標が明確になり「学ぶこと」が「できる事を増やす」ことであることに気づき、自ら学び、発展させる「自分なりのやり方」を発見してきている。

今後の展開

現在、要素技術のプロトタイプができてる状況であり、機能毎の検証実験および統合したシステム構築、さらには実証実験に進めればと考えている。

図５
木佐上安心・安全マップ

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた､つくりびと

『おおいた､つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 2

人口減少社会を支えるための先進的な“ものづくり”

地域経済を考慮した地域課題取り組みに向けたプラットフォーム構築

実 施 体 制：福島学、松永多苗子（情報メディア学科）、筑紫彰太（機械電気工学科）、市田秀樹（大学COC事業）、今西衛、本村裕之、山城興介（経営経済学科）

実施フィールド：大分市、大分市木佐上地区

連 携 機 関：木佐上コミュニティー、パークプレイス大分 他

概 要

2015 年度、2016 年度に研究成果を統合するためのプラットフォーム開発を進めてきた。その成果の検証を行うとともに、さらに発展させるため本年度は、統合した成果を利活用できるかを検討するため他分野への展開を目指す。そこでは「地域経済」を視野に入れた取組みを行う。そこで、課題解決を「シカケ」という概念を用いて、工学的な観点と経済学的な観点を組み合わせ、地域経済を含む活性化に向けて進めるための学内における「知」のプラットフォームとして構築することを目標とする。

取組内容

地域課題への取組みとして、次の項目に取り組んだ。

1）木佐上地区での活動
- a) まなび庵：LINE による地域コミュニティ
- b) ロボットプロジェクト入門 2（1 年生科目）
- c) ロボメカデザインコンペ（正課外活動）

2）大分地域での活動
- a)OISA（大分情報産業協会）
- b) ロボットプロジェクト基礎 2（2 年生科目）

3）生活の質（QoL）向上
- 睡眠の質改善に向けた計測実験と結果の評価

図 1　まなび庵の取り組み（木佐上コミュニティセンター）

地域での成果

1）木佐上地域
- a) 地域講座の実施と利活用による展望の紹介
- b) 課題を発見し解決策のプロトタイプ作成と紹介
- c) モックアップ（機能試作）とコンセプト評価（受賞）

2）大分地域での活動
- a) OISA（大分情報産業協会）行事のネット配信
- b) パークプレイスにおける回遊性改善に向けた取組み

3）生活の質（QoL）向上
- 計測実験実施と結果の公表（J-COM でオンエア）

図 2　ロボットプロジェクト入門 2 成果発表会

図 3　ロボメカデザインコンペ

学生の学び

1）木佐上地域
- a) 普段使っている技術の社会的需要
- b) 地域と触れ合うことで「自分でできる事」の発見
- c) 社会的評価と企業の取組み

2）大分地域での活動
- a) 確実性と継続性および結果振返りの重要性
- b) 製品の安全性と安定性／持続性の難しさとやりがい

3）生活の質（QoL）向上
- 実験計画と結果の質保証の重要性

図 4　OISA サウンズコンテスト・ネット配信

今後の展開

地域課題の解決は「1 つの技術」だけではなく、それが維持継続できるための「ビジネス的視点」が重要である。効果を評価するための継続的取組みが必要である。また成果の地域へのフィードバックが必要だと考えている。

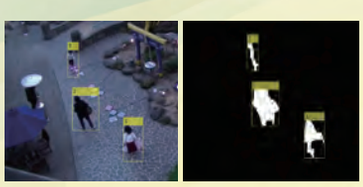


図 5　回遊性効果計測

図 6 睡眠実験装置

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 3

自然の積極的な活用による保全と地域活性化

佐賀関半島・触れる観光プロジェクト

実 施 体 制 ：吉村充功（建築学科）、吉本圭一郎（経営経済学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連 携 機 関 ：NPO法人さがのせき･彩彩カフェ、大分県建築士会佐賀関支部、関崎海星館 他

概 要

国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2010 年から 40 年の 30 年間で大分市の東端に位置する佐賀関地区は43％の大幅減と推計されている。大分市は「市周辺部はすぐ近くに都会があるため、人口流出など疲弊の進展が早い」と「県都の過疎」に危機感を持つ。人口減少がもたらす影響は様々な分野に連鎖していく。過疎化、高齢化、小売業（商店街）や施設の閉鎖と路線バスなどの地域交通機関の廃止･縮小が進む。そのような社会環境の中では、地域内のコミュニケーション力が低下するとコミュニティの維持も難しくなる。日常生活に欠かせない持続可能な地域社会の創造には「参加型」が重要である。地域で多様な人々が触れ合い、学び、話し合って成長していく場をつくる。そうした場を通じて人々が多様性、柔軟性、そして創造性を生み出す「中･長期的なプログラム」が地域課題を解決する糸口になる。このような環境下にあって、佐賀関半島には、十分に顕在化できていない豊かな地域資源（海産物、自然、文化財（寺社仏閣、灯台、戦争遺跡等）、関崎海星館等）と、年間約50万人が利用する国道九四フェリーの交流客が存在する。そこで、佐賀関半島の地域課題解決を目指すための、学生と地域の NPO や団体との協働コミュニティである「さがのせきローカルデザイン会議（LDM）」を中心に、「人の流れ」「モノの流れ」を佐賀関半島地域に誘導･対流させるキックオフとなる実証社会実験を 2018 年 4 月末の大型連休前半に実施することとし、その準備をこれまで進めてきた。

取組内容

さがのせき LDM には、本学から建築学科 吉村研究室を中心とした環境･地域創生コースの学生、経営経済学科 吉本ゼミの学生が参加している。LDM の定期会合を毎月第 3 火曜日 18 時半より「まちの駅よらんせえ～」にて開催しており、実証実験に向けて、参画者や協力者が着々と増加している。

【参画・協力予定者】
NPO 法人さがのせき･彩彩カフェ、大分県建築士会佐賀関支部、
NPO 法人おおいた NPO デザインセンター、関崎海星館、
㈱メイクティブ、インフルエンサーマーケティング九州、
国道九四フェリー㈱、佐賀関げんきがかり、
大分商工会議所佐賀関支所　等

デザイン会議の会合

この事業は、海上ルートを効果的に活用する手段を探る社会実験プロジェクトであり、地域の資源を再発掘し、背伸びをしない持続可能な方法を模索するものである。現在予定している内容は以下の通りである。

【主な内容（予定）】
・臨時観光案内所
・土産品･飲食ブース（新開発の「関もの」）
・貸し自転車コーナー／サイクルガイド
・各種体験ツアー企画 など

メイン会場予定地　（左がフェリー乗り場）

学生の学び

佐賀関半島でのこれまでの地域活動を活かした企画会議や各ステークホルダとのやりとりを通じて、コミュニケーション力、実行力、発想力などが養われている。

今後の展開

国道九四フェリーの利用者を主なターゲットにした交流人口拡大のキックオフ社会実験を、ゴールデンウィーク前半の 2018 年 4 月 28 日 (土) ～ 30 日 (月) で開催予定している。その後、検証を行い、今後の方向性を LDM 等で検討を行う。

実証実験予定アリア

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけではかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 3

自然の積極的な活用による保全と地域活性化

地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究

実 施 体 制 ：今西衞、本村裕之、工藤順一、舛田佳弘、山城興介（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連 携 機 関 ：ぶんご大野里の旅公社、豊後大野鉄道百年をお祝いする会、大分まちなか倶楽部

概 要

本学学生が提案している観光ツアーなどが実現可能であるかを判断するため、2016 年度では、アンケートデータに基づいた需要予測分析を行い、グルメを含むコースへの来訪意向が強い一方、支払意思額が低い傾向であることが分かった。本研究では、この問題を踏まえ、地域資源を活用した観光に対する支払意思額を高めるためにどのような付加価値をつけるべきかを分析し、地域資源を用いた観光需要の掘り起こしに貢献することを目的とする。

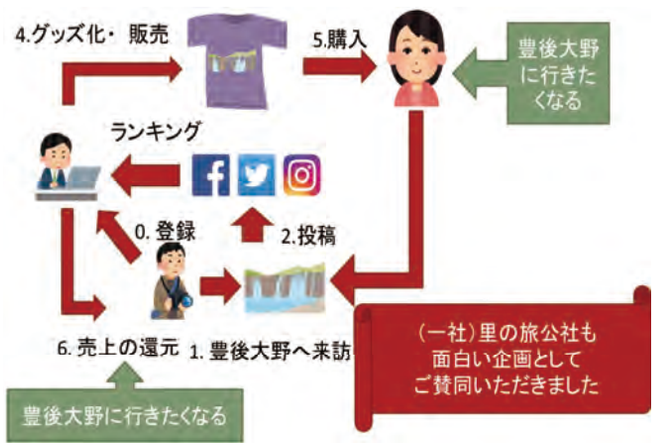


図1　大学生観光まちづくりコンテストでの学生提案のスキーム

取組内容

地域マネジメントコースでは、2015 年度より『サービスラーニング』、『フィールドスタディ』などの演習形式の講義を通して、豊後大野の観光における地域資源の魅力の発見や現状、課題を議論し、2016 年ものがたり観光行動学会第６回年次大会九州広域観光シンポジウム「普段使いのローカル線『沿線の日常』が注目される観光の時代」（2016 年、大分市）などで学生おすすめツアープランや豊後大野の PR 動画、リーフレットを発表した。2016 年度は、自然、歴史、ジオパーク、冒険、食をキーとするツアーパッケージに対してどの程度の需要があるのか、需要予測を行った。需要予測では、2016 年度の研究における推計の結果、大分市民の 58.6% にあたる 18,265 人が豊後大野市に訪れるとの結果が出た。しかし、これらの結果は、1 度訪れるのみなのか、リピータとなってくれるのかまでは分からない。学生から SNS による情報発信の提案（図 1）があったこと、県外との比較も行うべきとの指摘から、2017 年度も調査を行い分析を行った。2017 年に実施したインターネット調査を利用し、東京都、大阪府、福岡県、大分市に居住する 20 歳以上 79 歳までを対象者とした。まず、豊後大野の観光地について各都府県の認知度を調べた。東洋のナイアガラと呼ばれる原尻の滝は、大分県は 7 割以上認知しているのに対して、福岡県は、3 割程度で、東京都、大阪府の認知度は 10% 未満であった（図 2）。行ったことがあるのに対して、雪舟が水墨画で描いた沈墜の滝は、大分県の認知度も低いが、それ以上に他の都府県の認知度が低いこと（図 3）が改めて確認できた。次に、全国的に有名と思われる臼杵石仏も、原尻の滝よりかは若干認知度がある程度（図 4）であった。この結果は、大分の観光が非常に厳しいことを意味し、今後の観光政策を大分県全体で考えるべきであることを示唆している。

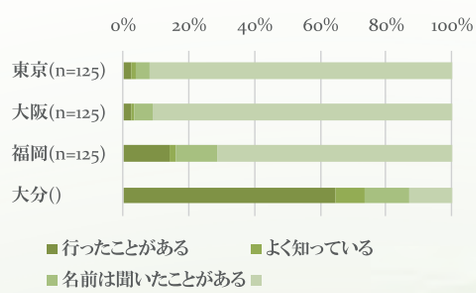


図2 原尻の滝の認知度

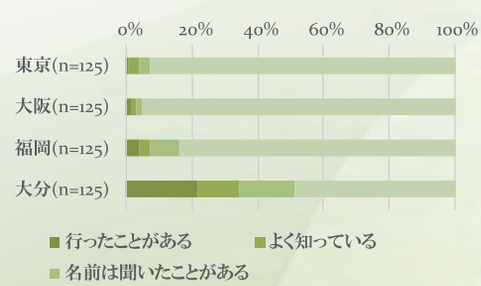


図3 沈墜の滝の認知度

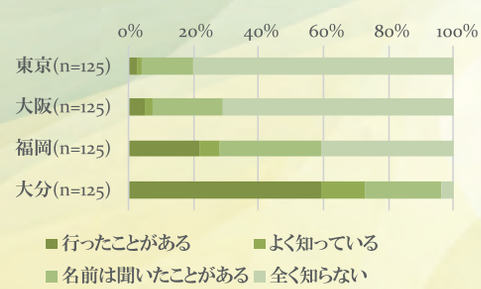


図4 臼杵石仏の認知度

今後の展開

今回の研究では、SNS や、認知度などから需要予測を紙面の都合上、ここでは掲載していないが、詳しくは、地域志向プロジェクトの報告書を参考されたい。本研究でも学生が提案した SNS による PR 活動ををもとに、基本モデルを改良し、需要予測を行った。この需要予測分析に関しても学生にも行ってもらい、経済学やマーケティングの習得や技能を身につけてもらいたいと考えている。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 3

自然の積極的な活用による保全と地域活性化

豊後大野PR動画プロジェクト

実 施 体 制 ：『フィールド・スタディIB』受講生（担当教員：今西衛、舛田佳弘）

実施フィールド：豊後大野市

連 携 機 関 ：(一社)ぶんご大野 里の旅公社

概 要

地域マネジメントコースでは、豊後大野市をフィールドとし、『フィールド・スタディ IA、IB』、『サービスラーニング II、III』などの科目を中心に学生が豊後大野市での魅力を発掘し、PR 動画、ポストカード、リーフレットなどを配布している。より広く知ってもらうためには、学生が豊後大野を紹介する PR 動画を作成し、世界的に普及している動画投稿サイト「YouTube」に投稿することが望ましいと考え、本プロジェクトを実行した。

講義で課題設定（上）と動画編集作業（下）

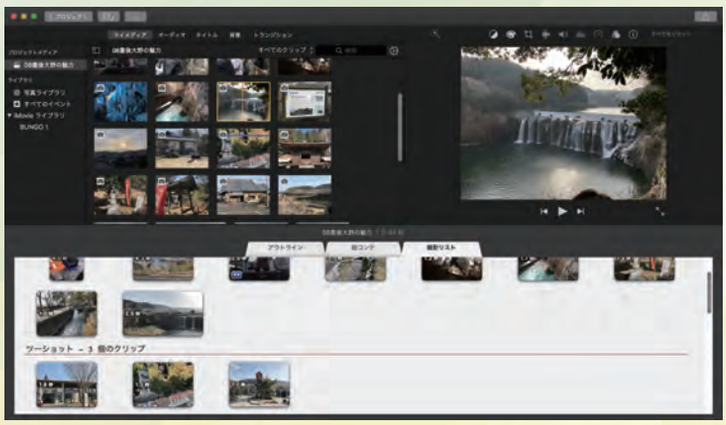
取組内容

本プロジェクトは、2017 年度教育改革採択事業の一環で、『フィールド･スタディ IB』の受講生を中心に、豊後大野 PR 動画を作成することを目的としている。半数の学生は、『フィールド・スタディ IA』の受講生で、8 月に夏合宿を行い、豊後大野の魅力を探して、本学 COC 事業、JR 九州、ぶんご大野里の旅公社と連携して、ポストカードにする活動を行った。ポストカードは、2017 年 10 月 6 日のあそぼーい 92 号にて配布した。しかし、『フィールド・スタディ IB』では、新たなメンバーが加わり、豊後大野の魅力を昨年から継続している動画プロジェクトを通じて、フィールド活動による専門知識の習得や、人間力の育成を目的とした。まず、YouTube へ投稿することを前提に、著作権や肖像権に注意しながら、魅力ある動画を撮影するために、再び豊後大野市内各所へ取材し、動画編集作業を行った。１つのグループは VR 撮影に臨んだ。

VR で撮影した原尻の滝：ゴーグル着用で 360 度の世界が広がる。

学生の学び および 今後の展開

当初は、YouTube に投稿する動画作成を前提とした写真撮影を行う飲みであったが、プロジェクトが進むにつれ、豊後大野市の発展のため、世界に発信したいものを見つける写真を撮って、いかにありのままの豊後大野を PR するか、など、様々な意見が出た。情報メディアの基礎知識がない奇想天外な作品を作ろうとしたが、意外に苦戦していたようである。できあがりの動画にはもう少し手を加えた方よい点があるので、いくつかの場所で発表して、修正を加えていきたい。



iPhone,iPad に初期インストールされている iMovie での動画編集。画面は Mac。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 3

自然の積極的な活用による保全と地域活性化

豊後大野酒蔵巡りプロジェクト

実 施 体 制 ：山際樹、渡邊翔吾、難波正和 他2名（経営経済学科･3年）（担当教員：今西衞、山城興介）

実施フィールド：豊後大野市

連 携 機 関 ：藤居醸造、吉良酒造、浜嶋酒造、牟礼鶴酒造、ぶんご大野 里の旅公社、豊後大野市

概 要

豊後大野市は「おんせん県おおいた」の中でも唯一温泉がなく、人口も少ない上、観光産業も乏しい。しかし、豊後大野市には重要文化財や国定公園が多く存在し、ジオパークにも認定されているくらい自然が豊かなまちである。さらに、豊後大野市には、おいしいお酒を造る酒蔵が４つも存在していることから、酒蔵をうまく活用した豊後大野市の活性化プランを提案した。

酒蔵でのヒアリング

取組内容

近年、お酒の売り上げが全体的に減少傾向にある。その中でも焼酎は 1985 年頃からずっと右肩上がりだったが、ここ１０年あたり停滞している。それには若者のアルコール離れも大きく影響している。しかし、日本には美味しいお酒がたくさんある。しかも、豊後大野の４つの酒蔵は、それぞれ個性的でとても美味しいお酒を造っている。そこで、おいしいお酒を飲んでもらいお酒の売り上げを向上させると共に、豊後大野に観光に来てもらう人を増やして行こうということで、このプロジェクトが始まった。しかし、お酒を飲んで運転すると飲酒運転になるので、豊肥本線や里の旅タクシーを使った公共交通による酒蔵巡りを提案した。

期待される効果としては、２つある。観光客に対しては飲酒運転することなく、お酒を楽しむことができる。同時に観光地を巡ることができる。豊後大野のお酒が全国に知れ渡る。が上げられる。地域に対しては、生活の足となるバスや鉄道のインフラが持続可能となる。お酒や、観光に関連する商品の売り上げが増大する。などが上げられる。

大学生観光まちづくりコンテストでの発表

学生の学びおよび今後の展開

当初、焼酎には、興味がなかったが、「酒蔵の方は温かく」、そのお酒を普及させたいとの思いになった。酒蔵の方から、「どうやったら若者にお酒を飲んでもらえるか」と聞かれ、SNS である Twitter を使ったほうが訴求力があるなど、アドバイスも行った。こうした地域の方との意見交換をした経験を、今後、活かしていきたい。

提案したプラン

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 3

自然の積極的な活用による保全と地域活性化

豊後 DEN説 2nd Generation

実 施 体 制 ：平川彰悟、日名子瀬名、相川瑞貴、矢田悠馬、財津太一 他　(経営経済学科･3､2年)
（担当教員：今西衛 他）

実施フィールド：豊後大野市

連 携 機 関 ：豊後大野市、ぶんご大野里の旅公社、ベジカフェ・ミズ、HAB&Co.、豊後大野市

概 要

豊後大野市は、大分県が「おんせん県おおいた」を標榜しているにもかかわらず、温泉がない自治体の一つで、観光産業は確立していない。このような現状の中で、少子高齢化が続けば、地域の維持が困難な状況である。一方で、日本ジオパーク、ユネスコエコパークに認定されたり、大分の野菜畑ぶんご大野、大正から昭和のはじめにかけて作られた石橋などの歴史建造物、神楽などの伝統文化など観光資源はたくさんある。そこで、観光プランを提案することで、豊後大野を盛り上げたい。

大学生観光まちづくりコンテストで
JTB クリエイティブ賞を受賞

取組内容

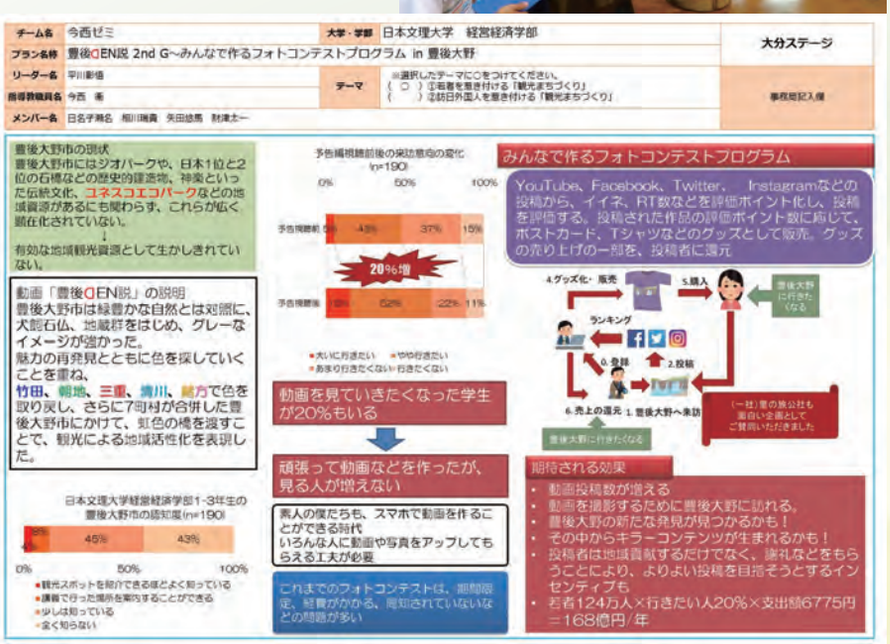
2016 年 4 月の熊本・大分地震により、JR 豊肥本線の一部が 2017 年 3 月現在も不通となっており、豊後大野市は 6 つの駅を抱えるが、このままでは、廃線の恐れも危惧される。我々は、2 年前から、JR 豊肥本線沿線の魅力を動画、ポスター、リーフレットなどで紹介してきた。豊後大野市は、緑豊かな自然とは対照に、犬飼石仏、地蔵群をはじめ、グレーなイメージが強かった。そこで、「豊後 DEN 説」として、魅力の再発見とともに色を探していくことを重ね、竹田、朝地、三重、清川、緒方で色を取り戻し、さらに 7 町村が合併した豊後大野市にかけて、虹色の橋を渡すことで、観光による地域活性化を表現した。本プロジェクトで制作した動画の予告編を視聴した本学経営経済学部の 1−3 年生のアンケート調査では、予告編を見ることで、20% も訪れたくなるという結果を得た。しかし、頑張って作った動画・リーフレットがみんなに届かない !! という現状がある。スマートフォンで動画を作ることができる現代、いろんな人に動画や写真をインターネット上に投稿してもらうことができる。これまでのフォトコンテストは、期間限定、経費、審査基準、周知徹底されていないなど、不完全な部分があるが、フェイスブック（Facebook）やインスタグラム（Instagram）などから、大ヒットするものもある。

地域での成果

フォトコンテストから期待される効果としては、「動画投稿数が増える」、「動画を撮影するために豊後大野に訪れる」、「豊後大野の新たな発見が見つかるかも！」「その中からキラーコンテンツが生まれるかも！」等が、考えられる。また、投稿者には、地域に貢献するだけでなく、評価などをしてもらうことにより、よりよい投稿を目指そうとするインセンティブも働く。若者が与える地域に対する経済効果を試算すると、

124 万人 × 20 % × 6,775 円
=168 億円 / 年

となる。このことから、是非ともフォトコンテストプログラムを事業化していきたい。



NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870−0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた､つくりびと

『おおいた､つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 3

自然の積極的な活用による保全と地域活性化

あそぼーい！ポストカードプロジェクト

実 施 体 制 ：八坂龍汰郎、甲斐友耀、前田香穂、樋口明愛、市江佑多（経営経済学科･2年）
（担当教員：今西衛他）

実施フィールド：豊後大野市

連 携 機 関 ：ぶんご大野 里の旅公社、九州旅客鉄道株式会社、豊後大野市

概 要

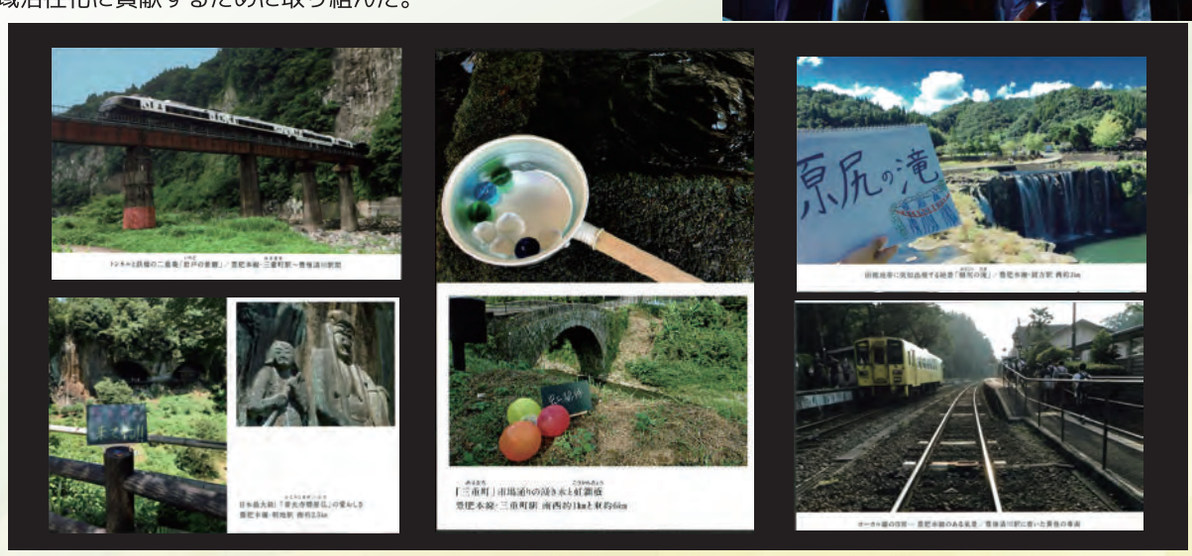
2017 年 10 月 7 日（土）に、特急「あそぼーい！ 92 号」の車内で、豊後大野市や豊肥本線の列車や風景をモチーフにしたポストカードセットを配布した。これは、本学経営経済学部の学生と（一社）ぶんご大野里の旅公社が連携し、豊後大野市の観光資源を活用した地域観光のあり方について研究・活動するプロジェクトの一環として、今回、JR 九州と連携することで、別府駅・大分駅～阿蘇駅を期間限定で結ぶ特急「あそぼーい！」車内で、豊後大野市や豊肥本線の列車や風景をモチーフにしたポストカードセットを列車の乗客にプレゼントするプロジェクトである。

取組内容

プロジェクトの初日には、本学学生 5 名が「あそぼーい」に乗車し、客室乗務員とともに、乗客にポストカードを配布した。

2016 年 4 月の熊本・大分地震により、JR 豊肥本線の一部が現在（2017 年 3 月）も不通であり、豊後大野市には 6 つの駅を抱えているが、このまま普通が続けば、廃線の恐れも危惧される。経営経済学科地域マネジメントコースと（一社）ぶんご大野里の旅公社は、2015 年より観光アイデンティティが希薄だった豊後大野市において、ローカル線の「沿線の日常」が注目される今日的な観光のあり方にもとづき、豊肥本線沿線の観光価値に対して、学生目線からの堀りおこしを行っている。その一環として、これまでに「ものがたり観光行動学会九州広域シンポジウム」（2016 年 11 月）において、これまでの取り組みを発表するなどすることで、今回の JR 九州との連携プロジェクトにつながっている。

あそぼーい！ポストカードプロジェクトでは、『フィールド・スタディ』、『サービスラーニング』等の 1～3 年次開講科目における、豊後大野市での合同合宿形式の授業において、科目受講生 40 名が、いまだ知られていない豊後大野市の観光価値としての「日常風景のリアル」を抽出し、学生の視点で写真撮影したものを、これまでの成果とともに、ポストカードとしてまとめ、広く発信（配布）することで、地域活性化に貢献するために取り組んだ。



ポストカード内容：あそぼーい！、普光寺、湧水・虹潤橋、原尻の滝、豊後清川駅

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 3

自然の積極的な活用による保全と地域活性化

学生の地域資源を活用した観光プロモーション活動におけるコースを横断した教育改革

実 施 体 制 ：本村裕之、今西衞、山城興介、舛田佳弘、工藤順一（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連 携 機 関 ：(一社)ぶんご大野 里の旅公社、九州旅客鉄道(株)、豊後大野市、(株)大分まちなか倶楽部
ホテルますの井

概 要

地域マネジメントコースでは、豊後大野市をフィールドとし、『フィールド・スタディ IA、IB』、『サービスラーニング II、III』などの科目を中心に学生が豊後大野市での魅力を発掘し、観光 PR につながるような活動を行っている。豊後大野の PR 活動を通じて、学生の人間力の育成などの取り組んでいるが、産業の 6 次化などが依然、大きな課題としてある。2017 年 10 月 6 日にあそぼーい 92 号車内にて、学生が豊後大野を紹介するポストカードを配布したが、PR 活動は途上である。そこで、PR 動画を作成し、6 次化など、より高度な学生の専門知識の習得や、人間力の育成に力を注ぐことを目的とした。

取組内容

本事業は、2017 年度教育改革採択事業であるが、採択に先立ち、『フィールドスタディ IA』、『サービスラーニング II、III』において、8 月に夏合宿を行い、豊後大野の魅力を探して、本学 COC 事業、JR 九州、里の旅公社と連携して、ポストカードにする活動を行った。ポストカードは、2017 年 10 月 6 日のあそぼーい 92 号にて配布した。採択後は、豊後大野の魅力を 2016 年度から継続している動画プロジェクトを通じて、フィールド活動による専門知識の習得や、人間力の育成を目指したプログラムを実施した。

地域での成果

あそぼーい 92 号でのポストカード配布については、大分合同新聞、読売新聞地域面、豊後大野市報などに掲載された。あそぼーいの乗客からは喜ばれる一方、地域の方からもポストカードをもっと配布してほしいのとの声があった。そこで、歩行者天国やホテルますの井などでポストカードを配布するなどスピンオフ企画も生まれた。また、大学生観光まちづくりコンテストに、今西、本村担当のチーム 6 チームが出場し、1 チームが本選出場さらに、JTB クリエイティブ賞を受賞した。動画については、タブレット等を使って、YouTube に投稿できるよう、著作権、肖像権に注意しながら作成した。動画をどのように配信するかは今後の課題である。

学生の学び

当初、「YouTube に投稿する動画作成を前提とした写真撮影」、「豊後大野市の発展のために、世界に発信したいものを見つける写真を撮り、いかにありのままの豊後大野を PR するか」、など様々な意見が出た。講義を通じて、スポーツを通して活発にしていく事業があったということを知り、「さらに深掘りできたらいいな」、「スポーツの強豪大学が、あそこの〇〇大学も使ってるから自分らも行ってみようかというふうになるのではないか」など、ホテルますの井の角田社長の現場の話が、学生に強いインパクトを与えた。

今後の展開

JR 九州、ぶんご大野 里の旅公社、ホテルますの井などと連携を図ることで「産学一致」を遂行した。連携機関も増えてきたので、協働しながら、社会・地域貢献、地域活性化につながる活動を継続的に実施したい。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 4

商店街の活性化による地域振興

地域企業向け「地域創生人材」育成のためのマネジメント実践講座

実 施 体 制 ：梅本光一、橋本堅次郎、吉本圭一郎（経営経済学科）、小島康史（情報メディア学科）

実施フィールド：ホルトホール大分（大分市）

連 携 機 関 ：大分市産業活性化プラザ

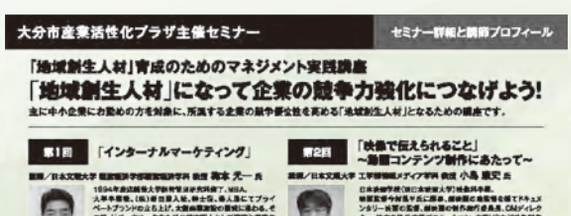
概 要

大分の企業が競合他社に対して優位性を高めるために、実践的なマネジメント力を持った「地方創成人材」を育成し、大分市の産業競争力を向上させるために大分市産業活性化プラザとの連携でセミナー「「地方創生人材」になって企業の競争力強化につなげよう！」を開催した。セミナーの開催時間は 18：30 から 20：20 の約 2 時間を使用。スタート時間は会社勤めの受講生に配慮し、遅い時間のスタートとした。当日の資料代として 500 円を受講生から頂戴した。またセミナー終了後は受講生との交流会の場（会費 300 円）を設け、セミナーに関しての質疑を通してさらに講座内容の深い理解を目指し 21：00 に終了する設定とした。

取組内容

セミナーーは、通算 6 回の講座を開催した。

- ●第 1 回：マーケティングにおけるベストプラクティスを紹介し組織外だけでなく組織内（インターナル）のマーケティングの重要性をテーマにした。
- ●第 2 回：スマホやカメラを使い誰でも簡単に映像を作成し情報発信できる社会になった今日、映像によって伝えることについて講義を行った。
- ●第 3 回、第 4 回：昨年も実施し好評であった会計基礎講座でボードゲームを使い簿記 3 級の基本知識の習得を目指した。
- ●第 5 回：フォロワーシップ（部下力）を取り上げる研修を少なくビジネスゲームを使いフォロワーシップとは何かについて学ぶ場とした。
- ●第 6 回：変革を目指すリーダーを目指すために「外部指向性」「変革指向性」「仕事への興味関心」の診断を使用し自己のチェンジリーダーの状況を把握し目標とする方向性を学んだ。



地域での成果

「受講者数 61 名のうち 59 名から回答を得たアンケート調査結果」

- 講座内容について　①大変良い　35 名　②良い　24 名　③あまり良くない　0 名④良くない　0 名
- 講座内容の量について　①多すぎる　1 名　②多い　12 名　③ちょうど良い　44 名　④少ない　1 名
- 講座内容の質について　①易しすぎる 2 名　②丁度良い 42 名③難しいけど分かる 14 名④難しい　0 名
- 有効であったか　①大変に有効 27 名　②有効 32 名　③あまり有効でない 0 名　④全く有効でない 0 名
- 講師について　①大変に分りやすい 34 名②分りやすい 25 名③分りにくい 0 名④全く分らない 0 名
- 交流会について（参加者のみ）　①大変に有意義であった　14 名　②有意義だった　11 名

受講生からの評価も高く、講師側も社会人に対して取り組みやすい工夫をして講座を実施しており今後も開催への要望が高い。

今後の展開

講座の開設時間については 1 時間半から 2 時間という希望が多く現状で良いと考える。回数も現状の 6 回で良いとする意見が多い（44 名）。内容について「女性対象」「AI」「人材育成」「モチベーション」「HP、SNS の運用」「起業」といった要望が見られる。2018 年度も開催予定であり参考としたい。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 4

商店街の活性化による地域振興

「シカケ」から見える地域課題 シカケプロジェクト

実 施 体 制 ：市田秀樹（COC事業担当）、福島学（情報メディア学科）、筑紫彰太（機械電気工学科）
今西衛（経営経済学科）

実施フィールド：大分市

連 携 機 関 ：パークプレイス大分

概 要

シカケプロジェクトは、世の中に溢れている「シカケ」をテーマに、モノが果たす役割について考え、実際にシカケをつくる事を目指す。「シカケ」とは、普段の人の意識や行動をシカケに対応するモノによって変化を促すことであり、シカケプロジェクトでは、「モノのデザイン」を通して、社会課題の解決にアプローチする。つまり、モノが持つ機能によって課題を解決するのではなく、モノによって人の行動変容が誘引されることによって社会課題を解決するということである。

プロジェクトでは、特に人とモノとのインタラクションに着目し、人の行動によってシカケが働き、シカケが引き起こす変化が人の行動にフィードバックされることによって、人の意識や行動を変化させることをねらっている。つまり、シカケがトリガーになって、人の行動変容が誘発される。シカケの形態としては、様々なものがあるが、そのシカケの中に、センサーや駆動部分、データ解析を含む制御部分などの要素技術を取り込むことで、工学部専門基礎科目『ロボットプロジェクト基礎２』（機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科の３学科合同での２年次開講科目）のコースとして実施した。

取組内容

2017 年度は、2 つのシカケ：（1）図書館の利用が楽しくなるシカケ「ぷろった君」（前期：NBU 図書館）、（2）大型商業施設 における人の回遊性に着目したしかけ：「ケンケンパ」「光の落書き」（後期：パークプレイス大分（大分市））を実施した。プロジェクト全体の進行としては、(1) シカケについての基礎知識や情報収集、(2) シカケを製作するための要素技術 (3D プリンタやレーザーカッターなどのデジタルファブリケーションや、マイコンや FPGA などの組み込み技術) の習得、(3) 現地での課題調査のためのヒアリング、（4）シカケの提案、（5）シカケの製作、(6) 実証実験、（7）データ分析、（8）結果報告とした。それぞれのシカケの概要を以下に示す。

【ぷろった君（図 1)】図書の返却日を栞に記入してくれるミニロボット。プロッタ君の動きが、ちょっと気になる、見ていて楽しいなどを利用者に感じ手もらう事で、図書館の利用を楽しんでもらうためのシカケ。

【ケンケンパ（図 2)、光の落書き（図 3)】踏むとシカケが順に光り、それを追いかけていくことでケンケンパになるシカケと、池の中に設置した大型スクリーンに文字や絵を描くシカケを、施設内の人の動線が弱い（回遊性が低い）場所に設置することで、触れてみたい、試してみたいと惑わせ、人を引き込むためのシカケ。

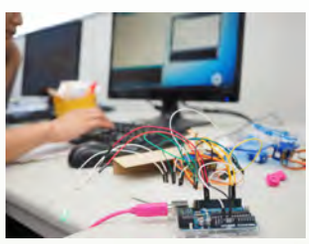


図 1. ぷろった君

成果と学生の学び

今回シカケを製作するに当たって、アイデアの創出から製作、実証実験とすべてを学生のみで行っている。実証実験のデータ分析においては、本稿執筆時において進行中であるため、別の機会で報告するが、特に利用された回数が多かった「ケンケンパ」においては、シカケ設置による成果が現れていそうである。学生にとっては、課題の多い内容だったが、自分たちのアイデアをシカケてみたいという気持ちと、おもしろくしたいという遊び心（好奇心）が交わって、最後はかなりのペースで試行錯誤を繰り返しながらの製作が進んだ。この授業で経験した内容は、上位学年へと繋がることを期待する。

図 2. ケンケンパ

今後の展開

モノによって人の意識･行動変化を引き起こすシカケについて、工学的な視点からの「ものづくり」と経済学的な分析･検証、それらを組み合わせることによる科学的な視点から、「シカケ」を今後も取り組んで行く。学生が製作したシカケが、人の行動変容が誘引し、社会課題への取り組みの一例になるようなテーマ（問い）の設定を行いながら、学生の好奇心を引き出すプロジェクトとして実施･展開していく。今回の成果の一部は、地元紙（大分合同新聞 2017 年 3 月 1 日付）にも掲載された。

図 3. 光の落書き

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 4

商店街の活性化による地域振興

「おおいた地域創生リーダー養成講座 2017 in 三重町」の取り組み

実 施 体 制 ：吉村充功、島岡成治、池畑義人（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市三重町市場通り周辺

連 携 機 関 ：一般社団法人ぶんご大野里の旅公社

概 要

少子高齢化が急速に進む大分県においては、主体的に行動し、課題を解決したり、新たな価値を生み出すこと、さらには多様な人的ネットワークを形成し、人口減少社会でも経済活動を活発化させ、社会を明るくできる人材の育成が急務である。本プロジェクトでは、「まち、ひと、しごと」の観点から地域のリーダーとして活躍できる若手社会人「おおいた地域創生リーダー」を育成するきっかけとして、県内 3 地区（中津・佐伯・豊後大野）において、大学生･高校生と社会人の混成グループによる講座を開催した。講座は講義＋街歩き＋ワークショップ＋発表を 1 日完結型で 2 日に渡って行い、1 日目はその地域固有の魅力を考える内容、2 日目はその魅力を活かして地域のまちづくり課題の解決策を提案する内容とした。

取組内容

【講座の流れ】　1 日目　①総論 / 地域講義　②まち歩き（ガイド）　③ワークショップ　④成果発表

2 日目　⑤まち歩き（ガイド）　⑥ワークショップ　⑦成果発表

【豊後大野市での取り組み】
フィールド：三重町市場通り周辺
開催日：12月17日（日）,23日（土・祝）
会場：豊後大野市商工会館、
　　里の旅ものがたり館 あっそうか！
参加者：日本文理大学学生13名、
　　大分県立三重総合高校生徒1名

学生の学び

大学生･高校生のそれぞれの立場で地域創生に対する意識向上や能力の自覚、ならびに、まち歩きやワークショップを通じたその地域固有の魅力の発見、それを踏まえた地域課題解決の重要性を理解することにつながった。

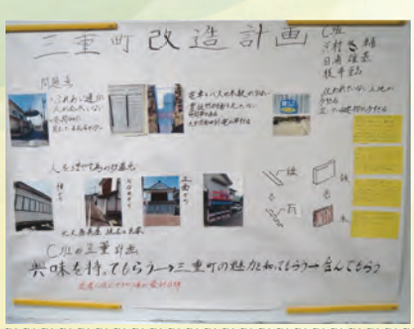
今後の展開

2018 年度は 10 ～ 11 月に国民文化祭・おおいた 2018 が大分県内各地で開催される。本地区においても、（一社）ぶんご大野里の旅公社を中心に企画が計画されており、本講座をキッカケとして、本地区の魅力に気づいた学生達が協働して、イベントを盛り上げる予定である。

地域での成果

●1 日目の成果（私たちが見つけた地域の魅力）

●2 日目の成果（課題解決策の提案）



NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 4

商店街の活性化による地域振興

大分市佐賀関・関地区における『環境・地域創造演習』の取り組み

実 施 体 制 ：吉村充功、池畑義人（建築学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連 携 機 関 ：NPO法人さがのせき・彩彩カフェ

概 要

大分県内各地では、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている地区が多い。そこで､建築学科では地域の課題を技術者の視点で解決できる人材を育成する｢環境･地域創生コース｣を設置している。本コースでは、大分市周辺部にあたる佐賀関校区をフィールドの一つとして、コミュニティの維持策を探り、実践する取り組みを、NPO 法人さがのせき・彩彩カフェや自治区の協力を得て実施している。佐賀関校区の人口減少、高齢化は深刻であり、人口 4,828 人に対し、高齢化率が 55.7%となっている（2015 年国勢調査)。｢体験交流活動による動機付け｣→｢知識の修得・定着｣→｢課題解決型学修｣という学修サイクルを明確化した科目群により、学生は地域でのやりがいを感じるとともに、自分に不足する知識･技能を自覚し、その後の学びを深化できる。上級学年では実際に地域の課題解決に取り組むことで、将来、地域で活躍するために必要な幅広い能力の定着を図ることを目指している。

取組内容

『環境・地域創造演習』は、3 年次の課題解決型学修として、豊後大野市大野町土師地区で行っている。本年度はさらに本地区での学修に取り組む班を編成し、夏休みに集中講義として学生 3 名が取り組んだ。関あじ関さば通りを中心に、関地区中心部を散策し、地区住民へのインタビュー、フィールドワークを行い、専門分野の視点等から地区の魅力と課題の整理、解決策の提案を行った。

地域での成果

取り組みを通じた成果は以下の通りである。

【地区の魅力】

①佐賀関バスターミナル

現在は大分バス単独運行だが、昔は、日本鉱業佐賀関鉄道が通り、バスセンターが国鉄バスの自動車駅でもあった。

②早吸日女神社

拝殿の屋根はこの地方独特の瓦技法を伝える屋根で、浦島太郎や三重塔などのユニークな瓦が載っている。

③徳応寺

1864 年 2 月 15 日には長崎へ向かう坂本龍馬や勝海舟らが宿泊しており、佐賀関は龍馬が九州に初上陸した地とされている。

④まちの駅よらんせぇ～

コミュニティ食堂として、地域の高齢者の憩いの場となっている。現在は本学学生の活動拠点にもなっている。

【関地区の良い点】

・歴史上の人物にゆかりのある建物があること。

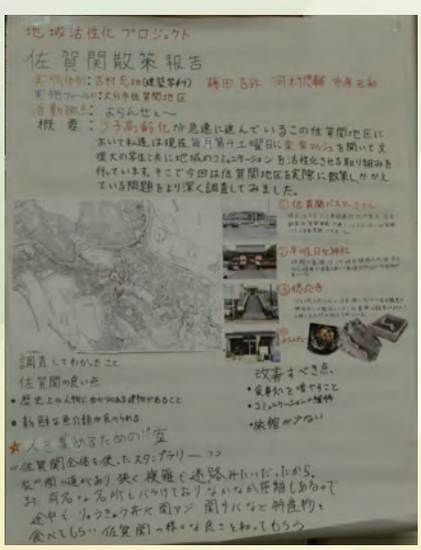
・新鮮な魚介類が食べられる。

【関地区の課題】

・食事処が少ない。地域の特産である魚が手に入らない。

・高齢者だらけでコミュニティの維持が難しい。

・旅館が少なく、観光客等が立ち寄りにくい。



学生の学び

まちを丹念に歩くことで、路地裏などの魅力にも気づくことができ、表面的ではない地域の魅力を発見、発信する重要性に気づいた。

今後の展開

本調査での提案を踏まえ、国道九四フェリーの利用者を主なターゲットにした「まち歩き」の可能性を模索し、交流人口拡大のキックオフ社会実験へと展開することとなった。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた､つくりぴと

『おおいた､つくりぴと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりぴと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりぴと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 5

健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化

大学で楽しく学ぼう!!
小学生対象NBU体験教室2017

実 施 体 制 ：河村裕次、鍋田耕作、栗延孟、坂口昌宏（経営経済学科）

実施フィールド：大分市

連 携 機 関 ：

概 要

大分市内の小学生を対象に、「みんなでコミュニケーションを取りながら楽しく学ぼう！！」をテーマとした様々な体験活動を準備し、自由研究等のヒントになる活動や他校の児童等とのコミュニケーションの場を提供した。今回の教室は、こども・福祉マネジメントコース２年生が、全体進行、環境整備、体験コース担当に分かれ、企画から運営まで、学生主体で取り組んだ。この教室を通して、学生は、自ら “PDCA サイクル”を経験することにより、社会人基礎力（特に「計画力」、「実行力」、「課題発見力」、「プレゼンテーション力」）を養うことを目的とした。

取組内容

この教室は、2017 年 7 月 29 日（土）に実施した。
具体的な体験活動は、以下のとおりである。

【体験活動】
- オリジナルけん玉をつくろう
- ふうせんゲームランド
- 世界で一つだけのスライムをつくろう
- 真夏のペットボトルボウリング大会

体験活動ごとに、「大学で楽しく学ぶ」ことができるよう、学生が中心となって体験型の学習教室を行った。

地域での成果

参加していただいた保護者から、次のような意見をいただいた。「他のこどもたちと楽しそうにしている姿が印象に残りました。来年も参加したいと思いました」、「学生のみなさんが笑顔でこどもたちと接してくれたので、とても嬉しかったです」、「学生の皆さんがこどもたちのことをしっかりと見ていてくれたので、安心して参加できました」などがあった。

学生の学び

このイベントを通して、学生の振り返りからは、「企画から運営までの流れを考えながら、参加者に合わせた内容にしていくことが大切だと感じました」、「参加したこどもたちの作業スピードを計算しながら、全体的な流れ（スケジュール、進行の合わせた対応）を考えていくことが重要」などの気づきがあった。

体験活動準備

今後の展開

今後は、イベント開催前に、どのような企画を地域の小学生・保護者が望んでいるのか調査し、より参加者のニーズに応じた内容にできればと考えている。また、これまで大学内で実施してきたが、今後は地域に出て、このような取組を実施していきたい。

体験ブース（けん玉をつくろう）

体験ブース（ペットボトルボウリング）

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 5

健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化

豊後大野市内の小中学生における社会的スキルの学校規模による比較と予防的心理教育プログラムの展開

実 施 体 制 ：髙橋淳一郎（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連 携 機 関 ：豊後大野市立朝地中学校･小学校、豊後大野市内全小中学校

概 要

豊後大野市内の多くの学校では学年に 1 クラスしかない小規模校となっている。それらの学校においては、文部科学省 (2015) で次の点が指摘されている。①人数が少ないため社会性を学ぶ機会が限定される。②クラス替えがないため人間関係が固定化される。この結果、不適応に陥りやすくなるとされているが、この点についてのエビデンスは明確ではないそこで、市内の小中学生について小規模校と中規模校を比較し、小規模校の児童生徒は社会性が低いのか明らかにした。また、小規模校であっても児童生徒が社会性を身につけ、適応力を上げていくための支援として、小中学校すべての学年を対象とした予防的心理教育プログラムを朝地小中学校において実施している。本報告では調査研究の結果と朝地小中学校での 2 年目の結果と 3 年目の取り組みについて紹介する。

取組内容

豊後大野市の特徴として小規模校が小中学校ともに多いこと、そして一部の学校に児童生徒が集中していることを受けて、小規模校と大規模校のそれぞれについての課題を洗い出す重要なデータが得られた。今後、これらを各学校にフィードバックして、今後の学校運営に活用してもらいたい。また、朝地小中学校では予防的心理教育プログラムの効果が徐々に表れ始めている。2 年目の段階で中学生でもコミュニケーションスキルの向上が見られる。3 年目の高加速的はこれからであるが、3 年間を通じての効果を検証していきたい。

中学生の社会的スキルの比較		
仲間関係の開始	1年男子　3年女子	大規模＞小規模
仲間関係の維持	2年男女　3年男女	大規模＞小規模
仲間への援助	2年女子　3年男子	大規模＞小規模

小学生の社会的スキルの比較		
関係維持行動	2年男子　3年女子	大規模＞小規模
関係向上行動	2年男女　5年女子　6年男女	大規模＞小規模
	3年女子　4年男子	大規模＜小規模
関係参加行動	6年女子	大規模＞小規模

地域での成果と今後の展開

調査研究の結果、小学生は高学年になるほど大規模校の児童の方が社会的スキルが高いことが明らかになった。また、中学校でも全体的に大規模校の生徒の社会的スキルが高いことが明らかになった。この調査でも明らかなように、小規模校では社会的スキルが育ちにくいことが想定される。朝地小中学校においてもそのような懸念から、2015 年度より児童生徒の社会性育成と適応力向上を目的に「対人関係ゲーム」を用いた予防的心理教育プログラムを実施している。2017 年度で 3 年目となり、その効果について検証をおこなっている。

学生の学び

予防的心理教育プログラムの運営は、2 年目より学生が主体となることが増えている。その中で、子どもたちをまとめ、子どもたちにわかりやすく説明するためにはどうしたらいいか、また、子どもたちの様子を見ながら子どもたちが効果的な体験を積み重ねていくためにはどのような援助が必要か、といったことを、学生も体験的に学ぶことができている。さらに、今回は規模の大きなデータを取らせてもらった。そのデータから何が読み取れるのか、学生自らが、これまで大学で学んだことを振り返りながら解析していくことで論理的な思考を磨くことにもつながっている。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけではははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 5

健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化

総合型地域スポーツクラブの教室・イベントを通した教育実践活動

実 施 体 制 ：堀仁史、竹田隆行、鈴木照夫、永松昌樹、武田正芳、堀ゼミナール（経営経済学科）

実施フィールド：大分市大在地区

連 携 機 関 ：OZAI元気クラブ

概 要

大在地区は新興住宅地として急速に発展しており、人口が著しく増加している地区である。同地区の総合型地域スポーツクラブ（以下、OZAI 元気クラブ）は設立から、2017 年度で 7 年目を迎えるが、会員数が人口の 0.1% 未満と伸び悩んでおり、その活動が活発であるとは言い難い状況である。そこで本ゼミナールでは 2015 年度より COC 事業を活用して、マーケティング戦略の 4P を軸に OZAI 元気クラブの会員数増加の糸口を探る活動を続けており、2015 ～ 16 年度は Product に着目し、「認知度を高めるイベント」を実施したが、2016 年度に実施したアンケート調査ではクラブの認知度は 81％と高く、認知度が会員数に及ぼす影響は少ないことが示唆された。一方でクラブの活動内容を知らないとの回答が 54％にものぼり、活動内容を知ってもらいクラブをより深く理解してもらうことが重要であることが改めて示唆された。2017 年度はこれまでの活動を継続しつつ、新たに Place に着目し、クラブの活動拠点が会員数に及ぼす影響について検証を行い、その結果、活動拠点が地域住民のクラブ参加意向に影響を及ぼしていることが示唆された。現在クラブの活動拠点は大分県や市の無料で使用できる公共施設が中心のため、今後は各自治区公民館の活用が重要であること、またその管理を行うとともに地域住民のニーズを熟知する各自治区区長に総合型地域スポーツクラブの理念の深い理解を求め、活動に協力を得ることが重要であることを提案した。

取組内容

NBU50 周年記念式典　ポスター発表（2017.5.14）
第 3 回 かけっこ教室（2017.8.19）
大在西小学校 サンサンカーニバル スタッフ参加（2017.11.3）
OZAI 元気クラブ 元気祭り スタッフ参加（2017.12.3）
ちいさな旅 2018（2018.3.3）
研究発表：
　マーケティング戦略における「Place」がクラブ会員数に及ぼす影響についての一考察
　～ クラブ活動拠点と大在地区の物理的距離による分類から ～

地域での成果

参加する教室やイベントにおいて、学生の活動は非常に高く評価されており、またイベント等の満足度においても非常に高い。一方で参加者の少ないイベントもあり、より地域のニーズを理解した活動が重要であることが考えられる。

学生の学び

「かけっこ教室」では、過去 2 年間は陸上競技部の指導者および部員が指導を担当し、本ゼミナール生は補助スタッフとして活動してきたが、2017 年度は NSCA 認定校カリキュラム（スポーツトレーナー）の知識と技術を活用して、新たにプログラムを開発し、非常に高い評価を得た。

今後の展開

2018 年度はマーケティング戦略として Promotion を掲げ、ホームページ作成などに協力する予定である。これまでは Product として、年数回の「イベント」を実施してきたが、クラブが行っている「教室」との関連性が低く、会員獲得に大きな効果は得られなかった。今後は「教室」展開における本学ゼミナール生の関わりも重要になると考えられる。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 5

健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化

地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働研究

実 施 体 制 ：鍋田耕作、河村裕次、坂口昌宏、美濃祐子（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連 携 機 関 ：豊後大野市高齢者福祉課、千歳町市民交流の場「楽らく広場ひょうたん」

概 要

豊後大野市の実施する住民主体の介護予防に向けた地域づくりは、地域全体に一定の効果を与えているが、地域での実践を通して、新たなニーズの充足や課題解決に向けた取り組みへと展開できる可能性がある。そこで、本研究では、「地域づくりによる介護予防」を「地域における住民間での互助や交流を通して、高齢者が地域の中で生きがいや役割をもって生活できるようにすることで、介護を予防する効果をあげる取組」と位置付けた。このような取り組みを実践するために、まず、これまでの地域づくりを基盤に、域学協働で、①住民間での互助（助け合い、支え合い）や交流ができるように下地を作る、②参加者が地域の中での生きがいや役割を持つために、何ができるのかを考える機会を提供することにした。具体的には、大学から新たなニーズに対応した介護予防活動の提案・実践を行い、地域の有機的な連携の関係づくり（住民間のよりよいつながりを促し、地域内の互助関係の構築）ができるよう地域住民とともに実践し、今後の住民主体の地域づくりによる介護予防の方向性を模索する。それから、この取り組みが及ぼす地域への効果を検証するとともに、この活動を本学の教育プログラムの一環として実施することで、社会福祉専門職育成の視点から本学学生に対する効果についても検証を行う。

時代カルタ（一昨年行った内容を改善）

取組内容

2017 年度は、前年度に引き続き「域学共創」（地域住民と大学が共に地域（地域づくり）を創造していくこと）を目指し、参加者とともに活動を行ってきた。また、これに加えて、地域住民主体の活動を支える社会福祉専門職育成の視点から、この活動を運営、企画するだけではなく、地域住民の方々が、より活動を効果的・効率的に実践するための「支援（サポート）」をどのようにしていくべきかなど、専門職に求められる知識や技術について検討を行った。

地域での成果

このような取り組みを通して、地域住民の方々と学生が地域の課題を他人事とするのではなく、自分事として捉えるようになった。また、この活動も 3 年目を迎え、どのように継続していくのかということが課題となり、この視点から、地域住民と学生が検討した。そこで、まず、スタッフに出来るだけ負担がかからないようにすることが必要ではないかと考えられた。そのために、具体的には、これまでの活動を振り返りながら、季節のイベントなどは、これまでの反省点を活かし、無理のない範囲で変更していくこと、イベント以外の活動日については、健康体操、振り込め詐欺の対策などの参加者に関わる身近なことに関する外部講師を招待するなどが考案された。

七夕会（昨年の活動にプラスアルファの取組み）

学生の学び

この活動を通して、学生は大学の講義で学んだ「地域」を拠点とする社会福祉専門職の視点や役割を、地域活動の実践を通して、その必要性を理解することができた。また、その視点から、地域の実情に合わせて、どのような活動が必要なのか、専門職としてどのような支援が必要なのかを考える機会にもなった。

今後の展開

これからは、これまでの学びを活かして、地域のニーズに合わせた地域活動を、地域住民の方々と実践し、将来的には、このような活動の支援者（支援関係機関の社会福祉専門職）としての視点で活動に関わっていく必要がある。

世代間交流
（地域を拠点とする社会福祉専門職の視点）

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりぴと

『おおいた、つくりぴと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりぴと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりぴと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 5

健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化

地域住民主体の地域づくり支援

『サービスラーニングII』『フィールドスタディI』を通して

実 施 体 制 ：鍋田耕作、河村裕次、坂口昌宏、美濃祐子（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連 携 機 関 ：豊後大野市高齢者福祉課、楽らく広場ひょうたん参加者

概 要

こども・福祉マネジメントコースでは、豊後大野市千歳町で行われている市民交流の場「楽らく広場ひょうたん」の活動サポートを 2015 年度から実施している。この取り組みを通して、学生は、本学の学修サイクルである①体験交流活動、②住民のニーズに応じた課題解決に必要な知識の習得、③ステークホルダーとの協働による課題解決型学習を実施している。また参加者には、地域での**「居場所づくり」**として活動が展開できるよう、域学協働で機能訓練や認知症予防等の取り組みとともに、参加者の生きがいづくりや地域貢献・役割の創出につながるような取り組みを検討しながら実践している。

楽らく広場ひょうたん二周年記念

取組内容

この活動の目的は「ちょっと寄り道…こころとからだが軽くなる場所」であり、主な内容は、週 1 回（月曜日の午前中・2 時間 30 分程度）千歳町の住民が集まり（現在の参加者は、高齢者が中心）、体操をしたり、お茶を飲んだり、レクリエーション等を行っている。この活動を中心に、今年度は、楽らく広場ひょうたんの活動の継続に向けた支援や活動の中での世代間交流、千歳町の他の地域活動（例えば、スキップクラブなど）への活動サポートなどを行い、千歳町で実施されている地域住民主体の活動のつながりを意識した取り組みを行ってきた。

楽らく広場「ひょうたん」運動会

地域での成果

【地域内での顔の見える関係づくり】この活動の中で他世代との交流を図ることで、これまで交流のなかった世代との「顔の見える関係づくり」を行い、それぞれの活動への関心やつながりが生まれるきっかけづくりを行った。

【出番作り・協働意識】この活動を通して参加者が、一方的に支援を受けるだけでなく、出し物を披露したり、体操の手本になってみたりとそれぞれの出番が準備されるようになった。また、レクリエーションなどをチームで実施することで、チームで協力して何かをやり遂げるという協働意識が生まれている。

学生の学び

【参加者に合わせた対応】イベントの企画や運営を行うだけでなく、参加者の年齢、性別、状況に合わせた対応を学修することができる。

【世代間交流におけるマネジメント】世代が異なる場合でも楽しめる・交流を図れる活動の方法を学修するとともに、その世代の特徴等を踏まえた運営や対応を実践を通して理解することができる。

今後の展開

これまで行ってきた活動を継続し、今後、地域内での活動等にも活かしていき、地域内での互助や交流にも貢献できればと考えている。

千歳幼稚園との合同しめ縄作り

スキップクラブでの活動サポート

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 5

健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化

住民主体の地域活動について

実 施 体 制 ：岡﨑光里（経営経済学科･4年）

実施フィールド：豊後大野市

連 携 機 関 ：千歳町楽らく広場ひょうたん参加者

概 要

わが国の地域福祉は、これまでの近隣同士が助け合う互助では成り立たなくなっている。これは、1960 年代から起こった高度経済成長に伴い、雇用形態の変化、核家族化の増加などから、中山間地域などでは過疎化がすすみ、一方、晩婚化・女性の社会進出・医療の発達が原因により、少子高齢化が進行が影響していると考える。このような中、住民同士のつながりが減少していることが地域福祉においての課題としてあげられる。

本研究では、住民主体の地域活動がどのように運営されているのか、そして今後どのような活動していけば" 地域コミュニティ "を作ることにつながっていくのかについて検討していく。そこで、本研究では、住民主体の地域活動とは何かを明らかにするため、このような活動ができた背景、歴史について述べる。それから、住民主体の地域活動と地域福祉のコミュニティとの関係を整理し、2 つの地域にある活動に限定してアンケート調査を行い、地域活動の現状について若干の考察を行う。最後に、現在の地域活動の課題を整理し、これからの住民主体の地域活動をより効果的にするための提案を行う。

課題･提案

1．活動の担い手について

【課題】

60 代の参加率が低い、仲の良い人の集まりになりやすい、狭い空間、私的空間に陥りがちである。

【提案】

活動を継続するためには、社会資源でもある**ボランティア**の利用が有効なのではないかと考える。ボランティアを育成し、講座や登録、定期的に活動スタッフ同士の情報交換をすることで活動の相乗効果が臨めると思われる。ボランティアはあくまでお手伝いではあるが、同じ地域住民として**みんなで地域活動を作り上げる**という意識が大切になってくるのではないかと考える。

2．健康寿命を延ばすことが目的となっていること

【課題】

このような地域活動は他の目的についても**様々な効果**が期待できる。例えば、生きがいを見つける場･多世代交流の場、高齢者だけではなく障がい者・子育て家庭・地域住民の交流の場などが考えられる。

【提案】

この改善策として、まず、活動の効果を**運営側**が理解することがあげられる。確かに、健康寿命を延ばすことは大前提として必要ではあるが、それに加えて、**高齢者の孤立防止**や地域で生きていくうえでの**居場所作り**、**ボランティアの活躍の場**として活用できることも効果として運営する側が理解をし、活動を行う上でプログラム等をより計画的に作成し、**一人一人が主役**になれるように考えていかなければならないと考える。

3．活動を持続可能なものにすること

【課題】

活動は地域のより所でもあるため、今だけの限定的なものではなく、**継続**していくことが必要である。スタッフの役割や地域住民への広報の見直し、活動自体の形態もこれから変容していかなければならないことが課題にも挙がってくると考える。

【提案】

これには、**ネットワーク**や**連携**が必要である。このような活動は独自で行うこともあるが、多様な視点を入れることも、活動を維持していくには必要になってくる。活動運営者やボランティアとの**連携**を結び、地域活動を支援していくことで、全体の意欲も湧き、積極的に活動ができるようになっていく。**ネットワーク**を構築することで、これからの**社会の中で人と人とがつながる場所**の提供としてこれからの大きな役割が期待されると考えている。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた､つくりびと

『おおいた､つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 6

NPO法人の活動・経営支援

地域活性化プロジェクト「楽・楽マルシェ」での取り組み

実 施 体 制 ：吉村充功（建築学科）、吉本圭一郎（経営経済学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連 携 機 関 ：ＮＰＯ法人さがのせき・彩彩カフェ

概 要

少子高齢化が急速に進んでいる大分市佐賀関地区（4,443 世帯、人口 8,789 人、65 歳以上の割合を示す高齢化率 53.2%（2018 年 1 月末現在））。2040 年の人口は、0.6 万人まで減少する見込みもあり、地域コミュニティの維持がおおきな課題となっている。現在、佐賀関地区のＮＰＯ法人さがのせき・彩彩カフェは、地域住民の生活支援活動や住民のふれあいの場を設け、地元の食材を使った料理や小規模多機能施設を運営するなど、地域コミュニティの維持を目的とした活動に精力的に取り組んでいる。
本活動では、当該ＮＰＯ法人と協働して地域の課題を考え、その解決を目指して取り組んでいく。学生は、地域の課題を考えるとともにＮＰＯ法人や地域住民の人々との交流を通じて、チームで働く力や考え抜く力、前に踏み出す力を養う。またこの活動が、理論と実践の融合をはかる場や機会のひとつとなることも期待している。

取組内容

毎月第４土曜日実施されている地域交流イベント「楽･楽マルシェ」に参加し、学生主体で模擬店を運営した。模擬店では地元野菜の販売をおこなったり、学生自身で考案した商品を販売したりした。

地域での成果

高齢者が多いこの地区の交流イベントに域外の若い学生達が参加し活動することは、地域に活気をもたらし、にぎわい創出の一助にもなっている。

学生の学び

「楽・楽マルシェ」では現金管理を複式簿記で記帳しておこない、事後、ＮＰＯ法人の代表者に報告している。模擬店運営をするにあたり、事前にマーケッティングの ４Ｐ分析や予算設定、損益分岐点計算などの原価計算をおこなったうえで臨んだ。そして事後、結果分析をおこなった。学生からは「授業で学んだことを実際に使うことで意味がよくわかった」、「利益をあげることの大変さがわかった」などの意見がきかれた。

今後の展開

今後は引き続き「楽・楽マルシェ」の活動を継続し、さらにＮＰＯ法人の経営分析や決算支援業務などの活動にも取り組んでいく予定である。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 7

地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）

動画ニュース制作
「地域の芽、学生の目 NBUビデオ通信」

実 施 体 制 ：小島康史、星芝貴行、足立元、高文局（情報メディア学科）

実施フィールド：大分県内各地

連 携 機 関 ：大分合同新聞社、大分市

概 要

情報メディア学科のデザインコースにおける動画コンテンツの発表の場として、大分合同新聞社と連携し、Web サイト「ゲートチャンネル」内に「地域の芽、学生の目 NBU ビデオ通信」を設け、学生が月に１度、動画ニュースを制作し配信している。学生の目線で、地域の課題や取り組みについて取材を行い、地域の活動を広報する役割を担う。

取組内容

1.「ゆふいん温泉まつり　献湯祭」献湯祭は、温泉に恩恵を受けるこの地域にとって大切な祭りで、湯布院の人々の温泉への思いが継承されている。

2.「醸造の町臼杵四社合同蔵開き 2017」臼杵市内の酒造会社による蔵開きでは、蔵元のスタッフから酒の香りや味の説明を受けながら飲める “角打ち” が好評で、新酒への喜びと地酒への愛情が伝わるイベントである。

3.「番匠川鮎友釣り大会　漁法に驚きと刺激受ける」「第２回番匠川鮎（あゆ）友釣り大会」が佐伯市の番匠川であった。競技はアユの習性を利用したおとりアユ漁法の「友釣り」で行われたが、それは乱獲への配慮でもあった。

4.「「竜門の滝・滝開き」 映像に工夫を凝らす」安全祈願を目的とした「竜門の滝・滝開き」が行われた。普段、人が見ることができない滝の上からの全体風景や、滑ったことのない人にも伝わるよう映像に工夫を凝らした。

5.「「親子ふれあい消防パーク」 非常時の心構え学ぶ」大分銀行ドーム前の広場で「親子ふれあい消防パーク」があった。各ブースでは煙の中での視界や地震、救急救命などを親子で一緒に体験でき、家族の絆も深まっていく姿が印象的。

6.「七夕ブロードウェイ　幻想的なクライマックス」「大分七夕まつり」２日目のイベント「七夕ブロードウェイ」。この日のフィナーレを飾るべく、２万個もの七色の風船が夜空にリリースされ幻想的なクライマックスを迎えた。

7.「「賀来の市」見せ場の妙技に拍手」賀来神社の秋季大祭「賀来の市」、今年は６年に１度の「卯酉の大名行列」の開催となった。伝統の衣装を身にまとい古式の所作や掛け声で練り歩く様は勇壮で圧巻である。

8.「「親子で体験　身近な土木」 子どもたちの姿、印象的」「親子と土木のふれあい見学会」が、大分市の大分川に架かる宗麟大橋の建設現場周辺であった。体験型のイベントを通じ、子どもたちが興味深げに土木にふれる姿が印象的だった。

9.「「トリニータボランティア」参加者、もっと増えれば」」２大分トリニータのホームゲームでは、サポータの応援やボランティアスタッフの活動がチームを支える。今回は、このボランティアスタッフに焦点を当てた。

学生の学び

最初の企画から構成案、撮影、インタビュー、編集など１つの動画ニュースを制作する過程を全て学習することができ、企画力・発想力・コミュニケーション能力など様々な力が身に付いた。さらには、地域に対する興味や関心などが深まり、郷土における就職意欲も高まった。

今後の展開

2016 年度から開始し、２年目となった。2018 年度以降についても、大分合同新聞と連携し、より多くの学生による地域広報の役割を担う動画ニュースの制作を行っていく。

大分合同新聞の Web ページ
(http://www.oita-press.co.jp/movie/nbu)

大分合同新聞との打ち合わせ

「身近な土木」撮影の様子

「トリニータボランティア」編集の様子

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 7

地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）

交流人口拡大による佐賀関半島の活性化に関する研究

実 施 体 制 ：石橋光（建築学科･4年）　（担当教員：吉村充功）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連 携 機 関 ：NPO法人さがのせき・彩彩カフェ、国道九四フェリー(株) 他

概 要

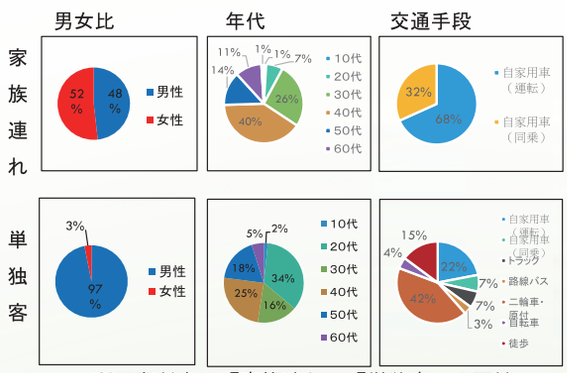
国勢調査によると、大分市佐賀関地区の人口は 2015 年時点で 8,946 人とピーク時の 1/3 程度となっている。また、大分市人口ビジョンによると、今後 30 年間で人口が 4,450 人、43.0%減少すると推計されている。その原因として、地域の雇用を担っている日本鉱業（現パンパシフィック・カッパー）佐賀関製錬所の雇用縮小や、関あじ関さばに代表される漁業環境の環境悪化、鉄道が佐賀関の中心部には通っておらず不便であることなどがあげられる。

予想を遥かに超える急激な人口減少、超高齢化の中にあって、我々が着目したのは、九州と四国を結ぶ「国道九四フェリー」である。本フェリーは、佐賀関中心部の佐賀関港から四国側の愛媛県三崎港まで片道約 70 分で、一日 16 便（往復で32便）が運航されている。現在の佐賀関港の乗降客は年間約50万人にのぼり、県内の旅客取り扱い港で1位を誇る。県内のフェリー使用者が全体的に減少傾向にある中、佐賀関港の利用者は大きなターゲットになり得る。また、佐賀関には、海産物をはじめ、海や歴史、文化遺跡、海星館などの資源があり、観光地としての資質はある。そこで本研究では、フェリー待ち客をターゲットに、待ち時間を佐賀関で有効に使ったり、1 便遅らせても佐賀関観光しようと思ってもらえるような要素を明らかにし、佐賀関活性化に貢献することを目的に実施した。

取組内容

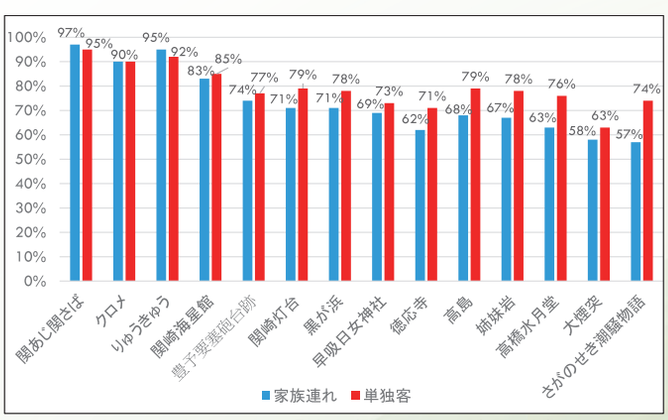
フェリー待ち客を対象に佐賀関に対する意識・嗜好・企画に対する需要を調査するアンケートを下記の内容で実施し、分析を行った。

対象者	佐賀関港発のフェリー待ち客	
目的	佐賀関に対する意識・意向を把握するため	
調査方法	直接配布・回収	
場所	佐賀関港フェリー受付前	
時間	９時～１５時３０分	
調査日	平成29年12月28日(木)	12月29日(金)
回答数	８７名	１１８名

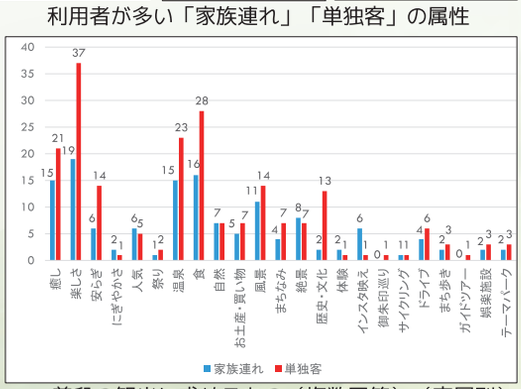


利用者が多い「家族連れ」「単独客」の属性

研究成果

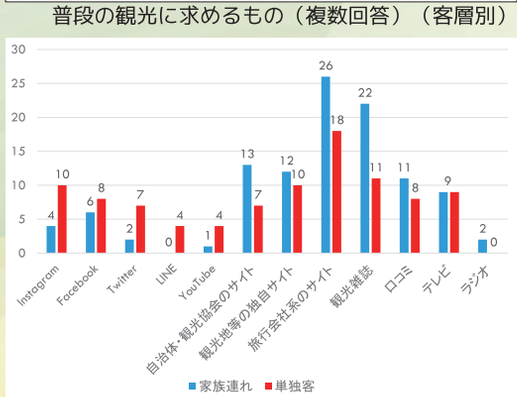


佐賀関の各資源への「訪問意向あり」の割合（客層別）



普段の観光に求めるもの（複数回答）（客層別）

佐賀関半島の地域資源について、認知度は低かったが、訪問意向は十分にあり、また観光に求めるものにも合致することから、フェリーの待ち時間を佐賀関観光に活用してもらえる可能性があることが分かった。ターゲットはその多さから家族連れと単独客である。観光の情報源については、ウェブサイトが上位であり、九四フェリーとの連携が重要と考えられる。



観光の情報源・収集方法（複数回答）（客層別）

今後の展開

国道九四フェリーの利用者を主なターゲットにした交流人口拡大のキックオフ社会実験を、ゴールデンウィーク前半の 3 連休を活用して実施する予定で、各方面との調整を行っていく。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト 7

地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）

大分市佐賀関・関地区の地域課題解決を目指す「さがのせきローカルデザイン会議」の取り組み

実 施 体 制 ：吉村充功（建築学科）、吉本圭一郎（経営経済学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連 携 機 関 ：NPO法人さがのせき・彩彩カフェ、大分県建築士会佐賀関支部 他

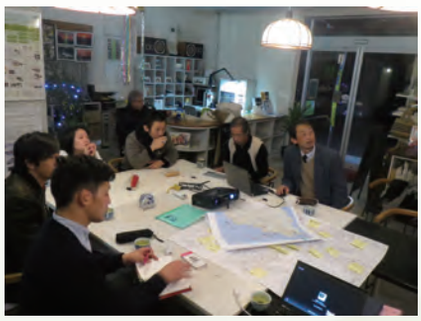
概 要

比較的人口が多く、人口減少がまだ深刻化していない大分市にあって、周辺部にあたる佐賀関地区の人口減少、高齢化は深刻であり、中でも旧佐賀関町の中心部であった佐賀関校区は人口 4,828 人に対し、高齢化率が 55.7%となっている（2015 年国勢調査）。そのため、経済活動も活気をなくし、かつて栄えた商店街はシャッター街になっており、今の佐賀関は「まち」としての元気がない。しかしながら、佐賀関にはたくさんの魅力がある。別府湾を望む港町であり、漁業が盛んである。「関あじ・関さば」は、全国的なブランドとして有名である。他にも坂本龍馬らが九州初上陸した際に立ち寄った徳応寺といった歴史的建造物や、関崎海星館・関崎灯台周辺の佐賀関半島の自然といった地域資源がある。そこで、関地区の地域課題解決を目指すための、学生と地域の NPO や団体との協働コミュニティである「さがのせきローカルデザイン会議（LDM）」を 2011 年に結成し、様々な活動を続けている。2017 年度からは取り組みを拡大し、人口減少・高齢化問題への対処、経済活動衰退の悪循環からの脱却、地域コミュニティの維持への取り組みのキッカケにつなげる佐賀関半島の地域資源を活かした交流人口拡大への取り組みを開始した。

取組内容

さがのせき LDM には、本学から建築学科 吉村研究室を中心とした環境・地域創生コースの学生、経営経済学科 吉本ゼミの学生が参加している。主な活動は以下の通りである。

- 地域交流市場「楽・楽マルシェ」の開催 （毎月第 4 土曜日に旧佐賀関町役場跡地広場を会場に関あじ関さば通りの活性化、住民との交流を促す定期イベント。年により 7 月に夜市、11 月に商店街大運動会、12 月にクリスマス会を併催）
- LDM の会合の定期開催 （毎月第 3 火曜日 18 時半より「まちの駅よらんせえ～」にて開催。各種団体・個人が参加し課題解決に向けた議論を行う。）
- 建築学科 1 年『プロジェクト 1』での佐賀関半島の環境整備・維持活動のプロデュース
- 国道九四フェリーの利用者を主なターゲットにした交流人口拡大社会実験の調査・企画



地域での成果

「楽・楽マルシェ」の取り組みは 2012 年 7 月の開始から欠かさず実施し、2017 年度で 5 周年を迎えた。地区の高齢者らにとって、若者との交流の場としての認知が進み、楽しみにされている住民が増えている。また、LDM の毎月の会合を 2017 年度より本格的に開始し、参画団体が回を重ねる毎に増加しており、国道九四フェリーの利用者を対象に地域資源を知ってもらい、観光促進、地産地消の推進を行う交流人口拡大に向けた社会実験開催に向けた取り組みが進んでいる。

学生の学び

佐賀関半島の観光活性化や交流人口の拡大について協議を重ねていくなかで、普段、何気なく触れているモノや、目にしているモノが地域資源になるということの経験ができた。また、関地区での活動を行っていくうえで、地域の現状について再認識させられた。様々なイベントやプロジェクトを企画・実施していくなかで、発想力や行動力なども養われた。

今後の展開

国道九四フェリーの利用者を主なターゲットにした交流人口拡大のキックオフ社会実験を、ゴールデンウィーク前半の 3 連休を活用して実施する予定で、各方面との調整を行っていく。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけではははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト L

「おおいた、つくりびと」育成のための地域志向科目・正課外活動

教養基礎教育における地域志向科目の全学必修化 ～『大分学・大分楽』『産学一致の勧め』ほか～

実 施 体 制 ：各科目担当教員、人間力育成センター

実施フィールド：大分県

連 携 機 関 ：大分県、大分市、豊後大野市、国東市、大分商工会議所、大分合同新聞社、
大分県中小企業家同友会、県内NPO法人、一般社団法人大分青年会議所、県内企業各社

概 要

「地域創生人材」育成のための学部・学科によらず根幹となる科目の全学必修化により、すべての学生が地域に関する科目を卒業までに12単位以上履修することとした。地域学の導入科目である１年前期『大分学・大分楽』（２単位）を2015年度入学生より全学必修としている。また、全学共通の教養基礎科目の必修科目のうち、６科目10単位の教育内容を見直し、地域志向科目として設定している。

取組内容

2017 年度開講の教養基礎教育（全学共通）における「地域志向科目」の開設状況は、下表の通りである。

学年	1		2	
	前期	後期	前期	後期
教養基礎科目				
大分を知り、地域に貢献できる素養を身につける	【必】大分学・大分楽（2）	森里海連環学と地球的課題（2）		
人間力コア科目／コア科目	【必】社会参画入門（2）	【必】社会参画実習１（1）	【必】社会参画応用（2）	【必】社会参画実習２（1）
	【必】人間力概論（2）	現代社会要論（2）	【必】産学一致の勧め（2）	起業学（2）
自分を取り囲む世界と交流するための知識とスキルを身につける		ヒューマンアート（2）	第二外国語１（中国語）（2）	第二外国語２（中国語）（2）
汎用力科目	ジェネリック養成１（1）	ジェネリック養成２（1）		
		大分の地域ブランド創造体験（2）		
特別科目	提携講座（ボランティア概論）（2）			

【必】は必修科目。
それ以外は選択科目。科目名の後ろの（　）は、単位数。

カテゴリーⅠ：地域での体験交流活動を教育内容に含む科目
カテゴリーⅡ：地域における課題解決に必要な知識を修得する科目
カテゴリーⅢ：ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目

【大分学・大分楽】（学部毎に開講）
多様な講師陣より講話を受け、大分の魅力を多面的に学び、楽しみ、魅力的に育む（穫）導入とした。学内教員の他、大分商工会議所 姫野清高会頭、大分合同新聞社 編集局次長（報道統括）佐々木稔氏に講演していただいた。

【産学一致の勧め】（学部毎に開講）
大学と産業界、社会、地域をつなぐことを意識し、良き社会人として活躍するキッカケとする。

① 大分県中小企業家同友会の講演（学部毎３名）：㈱大有設計、㈱中津レンタリース、㈱光建エンジニアリング、㈱美装管理、AIDA LINK ㈱、アークホーム㈱
② 青年指導者講演：(一社) 大分青年会議所
③ 県内で活躍する NPO 等の講演（学部毎２名）：NPO おおいたの水と生活を考える会、ハートフルウェーブ、チーム２℃おおいた協議会、NPO 法人おおいた子ども支援ネット

【社会参画入門】（担任毎に開講）
ｱｶﾃﾞﾐｯｸｽｷﾙ習得の他、早期に社会との関わり方を体感するため、県内企業等の取材を行う。
［取材先］㈱ﾃﾞﾝｿｳ、大分県、㈱ｴﾌ･ｼﾞｪｲ ｴﾝﾀｰﾃｲﾝﾒﾝﾄﾜｰｸｽ、大分航空ﾀｰﾐﾅﾙ㈱、菅原工業㈱、㈱ｵｰｲｰｼｰ、ﾓﾊﾞｲﾙｸﾘｴｲﾄ㈱、㈱豊和銀行、大分県信用組合、ﾌﾝﾄﾞｰｷﾝ醤油㈱、㈱菊家、大分県農業協同組合、㈱山忠、鶴崎海陸運輸㈱、杉乃井ﾎﾃﾙ&ﾘｿﾞｰﾄ㈱、㈱ﾅﾌｺ、㈱ﾄｷﾊｲﾝﾀﾞｽﾄﾘｰ、㈱ﾃﾞﾝｻﾞｲ東亜

【社会参画実習２】（学科ｸﾗｽ毎に開講）
キャリア開発プログラムとして、業界研究等を行う。大企業と中小企業、全国企業と地域企業の違いを理解する。
[取材先例] 佐伯重工業㈱、河野電気㈱、梅林建設㈱、西日本高速道路ｴﾝｼﾞﾆｱﾘﾝｸﾞ九州㈱、㈱江藤製作所、㈱三浦造船所、九州電力㈱、㈱ｵｰｶﾞｽ、ｵｰｶﾞｽｱﾘｰﾅ㈱、西日本電信電話㈱、NTTﾋﾞｼﾞﾈｽｿﾘｭｰｼｮﾝｽﾞ㈱、㈱豊和銀行、大分信用金庫、大分日産自動車㈱、大分ﾄﾖﾀ自動車㈱、㈱ﾒｶﾞｽﾎﾟｰﾂ、ｽﾎﾟｰﾂｸﾗﾌﾞNAS ㈱、㈱ﾅﾌｺ、生活協同組合ｺｰﾌﾟおおいた、㈱九州ｹｰｽﾞﾃﾞﾝｷ

地域での成果

本地域志向科目で「おおいた」に関する知識を習得し、関心を持った多くの学生が、専門教育科目や正課外活動において地域で実践活動を行うことにつながった。

学生の学び

県内各団体の指導者等から大分の地域や企業の魅力を講話いただいたり、企業取材で実際に会社を訪問させていただくことで、県内地域や企業について正しく理解するきっかけとなった。

今後の展開

各種団体、企業、地域等との連携を強化しながら、学生の地域への興味、関心、理解の向上を図っていく。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。
私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト L

「おおいた、つくりびと」育成のための地域志向科目・正課外活動

身近な政策課題を題材とした課題解決型学修
～『社会参画実習1』における学部混成ワークショップ

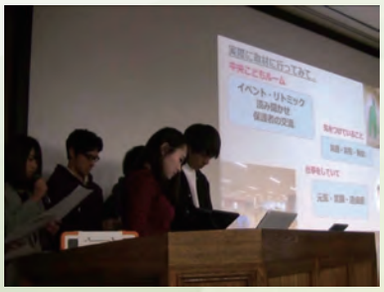
実 施 体 制 ：人間力育成センター（統括）、各学科１年担任

実施フィールド：大分県、大分市

連 携 機 関 ：大分県、大分県警察本部、大分市

概 要

1 年教養基礎科目『社会参画実習 1』（必修）では、学科の異なる学生でチーム活動を行い、社会で必要な人間力、社会人基礎力（特にチームで働く力の基礎）＝ジェネリックスキルの向上を図った。授業では、大分県・大分市の身近な政策課題に対して、チームで課題の整理や根拠のある提案を行う活動を行い、成果を企画書としてまとめ、プレゼンテーションを行った。また、代表チームは、自治体担当課へ直接発表を行った。



取組内容

原則として工学部と経営経済学部からなる 14 クラスを編成し（担当教員はそれぞれの学科の担任がチームティーチングで行う）、全 109 チーム、663 名の学生が下記の６つのテーマのうち、いずれか 1 つを選択し、下表の授業スケジュールで活動を行った。

【設定したテーマ（大分県・大分市が進める施策）】

① ゴミ捨てに関するマナーと減量・リサイクル（大分市 環境部 清掃管理課）
② 自転車のルール・マナー（大分市 都市計画部 都市交通対策課）
③ 子育て支援（学童保育問題）（大分市 子どもすこやか部 子育て支援課）
④ 若年者の就業問題－地域への就職（大分県 商工労働部 雇用労働政策課）
⑤ 薬物犯罪の防止・撲滅（大分県警察本部 刑事部 組織犯罪対策課）
⑥ 地域消防力の維持強化（消防応援隊等）（大分県 生活環境部 防災局 消防保安室）

主な授業日時	授業内容
10月30日～	ワークショップクラスで活動を開始
11月6日	①②担当者 出張教室
11月13日	③⑤⑥担当者 出張教室
11月27日	④担当者 出張教室
～12月11日	混成チームによるWS（情報収集・分析・課題発・アイデア整理・企画書作成・プレゼン準備）
12月18日	全チームの成果発表会 ⇒ 各教室で優秀チームを選出
1月15日	優秀11チームによる県・市への成果発表会（県・市の担当者が来学）

地域での成果

全 109 チームが、政策テーマに対して、より促進したり、若者が参画する具体的な取り組み提案を企画書としてまとめた。また、代表 11 チームは提案内容を自治体担当者に対して直接発表し、政策推進の参考にしていただくことができた。

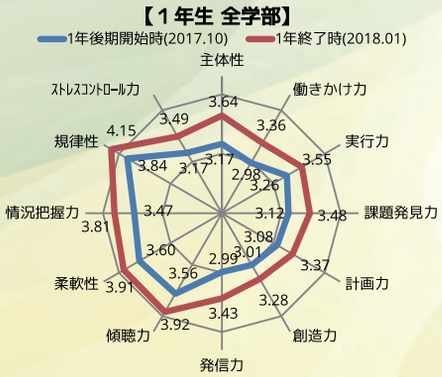
学生の学び

1 年生の全学生が基礎となる学修サイクルを経験できたことから、2 年次以降の専門教育科目で各学科の特徴に応じた地域志向科目の受講に展開していく。

今後の展開

本科目内で学修サイクルを回した結果、チーム活動を通じて、学生の社会人基礎力の自己評価が全体的に向上した。右図は事前と事後の学生自己評価の全体平均値である（５段階評価）。社会人基礎力の 12 の要素すべて統計的に有意な自己評価の伸びが確認できた。特に「主体性」「発信力」「働きかけ力」「課題発見力」「傾聴力」の伸びが大きく、本科目の目的を達成できた。なお､「傾聴力」～「規律性」が要素に含まれる「チームで働く力」のスコアが全体的に高くなっている。

【１年生 全学部】



NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた､つくりびと

『おおいた､つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト L

「おおいた、つくりびと」育成のための地域志向科目・正課外活動

地方創生のための学生目線による 地域企業リクルートビデオ制作プロジェクト

実 施 体 制 ：小島康史、星芝貴行（情報メディア学科）

実施フィールド：大分市、臼杵市

連 携 機 関 ：株式会社 地域経済情報センター（求人ナビおおいた）

概 要

現在、新入社員の 3 年以内の高い離職率（大卒 30% 以上、高卒・短大等卒 40% 以上、中卒 60% 以上：厚生労働省サイトより）と、多くの学生の地元を離れ都心部への就職を希望する問題点が挙げられる。本プロジェクトでは、「雇用のミスマッチの軽減」、「若者の地元の定着率の向上」、「地元大学等から地元企業への就職率の向上」を目標とし、地元企業の魅力を発信する学生目線によるプロモーション動画「リクルートビデオ」（3 分程度、前後期計 4 社）の制作を行った。

取組内容

対象企業は、「(株) 臼杵鋼板工業所」、「(株) 熊野建設」、「(株) 双葉タクシー」、「(株) トキハインダストリー」として、以下の流れでプロモーション動画「リクルートビデオ」の制作を行った。

① オリエンテーション、スタッフ・チーム編成
② 企業取材・打合せ、ロケーションハンティング
③ 企画書作成、構成・シナリオ作成
④ 絵コンテ作成
⑤ 企業訪問、企画提案、シナリオ修正
⑥ 企業訪問、撮影・素材受取、素材制作
⑦ 編集、ナレーター選定、録音、試写映像完成
⑧ 企業プレビュー
⑨ 修正、エンコード、DVD・BD・動画データ完成
⑩ 納品・最終プレゼンテーション

学生の学び

各企業側は、本プロジェクト事業で制作したリクルートビデオを活用し、企業説明会での再生や、求人 Web ページへの掲載等を行い、主に就職活動中の学生等に対して PR を行う。制作したリクルートビデオは学生目線で作成されているため、専門業者等のプロフェッショナル制作のビデオより、好感が持たれると考えられる。目的とした、「雇用のミスマッチの軽減」、「若者の地元の定着率の向上」、「地元大学等から地元企業への就職率の向上」に対する成果の計測には長期にわたる調査が必要となるが、制作したビデオの視聴により制作対象とした各企業に対する「認知度の向上」と「好感度の向上」等の調査を行う。大学側は、対象企業毎に 1 ～ 4 年生がバランスよくチームを編成し、2016 年度までの動画の制作経験を持つ学生が、これまで経験の無い学生に対して「動画制作スキル」、「ビジネススキル」、「ビジネスマナー」を継承していくという成果が期待される。学内の授業での課題制作では経験できない、実際の企業をクライアントとした、制作活動に携わるという、大変貴重な経験となり、就職活動にも大いに役立つと期待される。携わった学生および視聴した学生の、対象とした地元企業への就職率の向上なども期待される。

今後の展開

制作したリクルートビデオが企業側がどのように活用し、どのような効果が得られたかなどを調査し、2018 年度以降についても、制作を続けることを期待したい。

(株)臼杵鋼鈑工業所

(株)熊野建設

(株)双葉タクシー

(株)トキハインダストリー

若者が作る企業PR動画

大分市一本の日本文理大学の学生が地元企業のプロモーション動画を制作した。就職活動は売り手市場が続く中、どうすれば若者に響くPRをできるか、採用される側の視点を生かした。おもてなしを追求する姿勢や社員同士の仲の良さに注目した内容に、依頼した企業関係者は「自社の特色がよく出ている。思った以上の出来栄え」などと喜んだ。

地元４社の特色に注目

文理大生

「採用される側」の視点で

大分合同新聞掲載記事
(2018年1月9日付)

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト L

「おおいた、つくりびと」育成のための地域志向科目・正課外活動

小学生のお仕事発見ランドin佐賀関

実 施 体 制 ：人間力育成センター、各学科教職員
実施フィールド：佐賀関市民センター（大分市）
連 携 機 関 ：大分信用金庫、 ノットファクトリー　(後援) 大分市、 大分市教育委員会

概 要

大分市佐賀関地区において､小学生にリアルなお仕事体験を通して｢お仕事とはなんだろう？｣｢はたらくことの大切さ｣など、楽しみながら社会の仕組みが学べる機会を提供するために、2018 年 2 月 17 日に「小学生のお仕事発見ランド」を佐賀関市民センターにおいて開催した。当日は、本学の学科構成に関係する職業や、地元企業である大分信用金庫やノットファクトリーの協力を得て、地域の職業についての体験企画を催した。本学の教職員だけでなく、学生が運営に関わることで、地域住民に本学の活動に対する理解を深めていただく機会とした。

取組内容

小学生述べ 80 名を受入対象とし、下記 7 つのお仕事ブースを開設･運営した。1 回 30 分を基本として各ブースを同時進行し、2 クール 60 分、1 人あたり最大 2 回のお仕事を体験できるようにした。
13：00 ～と 15：00 ～の 2 クールを事前申込みで受付け、実施した。

① ロボットを動かすしごと：機械電気工学科（研修室 1,2）
② 情報技術のしごと：情報メディア学科（研修室 1,2）
③ 飛行機のしごと：航空宇宙工学科（研修室 1,2）
④ インテリアのしごと：建築学科（研修室 1,2）
⑤ スポーツトレーナーのしごと：経営経済学科（技術工作室）
⑥ 信用金庫のしごと：大分信用金庫（研修室 1,2）
⑦ イベント企画のしごと：ノットファクトリー（技術工作室）

地域での成果

本企画に対し、定員 80 名を超える応募があった。当日は、市内の小学生が 1 部に 37 名、2 部に 31 名参加した。保護者のアンケート結果より、全体評価として「大変よかった」71%、「良かった」29%となった。また、本学の地域貢献度として、51%が「とても貢献している」32%が「やや貢献している」と回答した。

学生の学び

32 名の本学教職員・学生スタッフが 7 つの体験ブースにわかれて運営を行った。学生は小学生への説明、指導を通じて習った専門の知識を分かりやすく説明するコミュニケーション力の向上につながった。

今後の展開

地域のニーズを確認しながら、今後も県内での定期開催を検討する。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた､つくりびと

『おおいた､つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト L

「おおいた、つくりびと」育成のための地域志向科目・正課外活動

Kids Smile Project

実 施 体 制 ：人間力育成センター

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連 携 機 関 ：ウミネコの会

概 要

佐賀関地区で子どもたちの健全育成を目的に設立されたウミネコの会は、様々な自然体験や農業体験を提供・運営しているボランティア団体である。長きにわたり地域で活動しているウミネコの会だが、スタッフの高齢化が深刻な課題となっていた。当該団体より、本学に対して協力依頼があり、話し合いを重ねた結果、豊富な知識や経験、豊かなフィールドを持つウミネコの会と体力や行動力に長けた大学生のポテンシャルを融合させることでウミネコの会が抱える課題を解消するだけでなく、より充実した活動内容を子供たちに提供できるのでなはいかと考え協働する運びとなった。子供たちに笑顔になってほしいという想いから Kids Smile Project として、本格的に活動をスタートすることになった。

取組内容

大きく 3 つのカテゴリーに分けた活動になっており、お米作りや野菜作りなどの【自然体験】、夏のキャンプやアサギマダラの観察会などの【生活文化体験】、Kids Smile Project メンバーによる【学生企画】として、佐賀関の自然を活かした活動を行っている。自然体験では地域の名人と野菜作りやお米作りを行っている。一過性の体験活動ではなく生産から消費まで行うことで第一次産業の大変さや尊さ学ぶ。生活文化体験では佐賀関の自然を活かした活動を行っており 5 月に飛来するアサギマダラの観察会や 3 泊 4 日の夏キャンプで野外炊飯やドラム缶風呂、佐賀関半島一周のナイトウォーキングなど特徴のあるプログラムを行っている。学生企画では実験モノづくり教室を行い大学生が考える学びの要素を入れたプログラムを実施した。プロジェクトメンバーの特徴を活かしたプログラムが最大の魅力である。2017 年度は沖縄県出身者が多く在籍しており、沖縄文化であるエイサー体験を提案した。手作りした小太鼓や演舞は反響が大きく佐賀関にある老人ホームより演舞依頼があるなど地域での活動の幅を広げている。

自然体験

生活文化体験

学生企画

学生の学び

ウミネコの会のスタッフと子どもたちをつなぐパイプ役から企画を任されるようになり、自分たちにしか出来ない企画を考え、何度も話し合った。次第に主体的に活動できるようになり、少しづつやりがいを感じるようになった。ウミネコの会のお手伝いをしているという気持ちから自分たちもスタッフの一員なんだという自覚が芽生えた。また、スタッフのみなさんは子供たちの成長はもちろん、大学生の成長のためにいつも温かく見守り支えて下さっており、学生たちは世代ごとに地域での役割があることや地域コミュニティーの重要性を実感した。

今後の展開

それぞれの得意分野を活かした一人ひとりが活躍できるプロジェクトにしていくと共に、Kids Smile Project メンバーにしかできないカタチで子どもたちを笑顔にしていきたい。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

2017 年度

プロジェクト L

「おおいた、つくりびと」育成のための地域志向科目・正課外活動

ジェネリックスキル養成研修
～COC+事業における汎用力の向上～

実 施 体 制 :吉村充功（建築学科）、鈴木照夫（経営経済学科）、市田秀樹（COC事業担当）

実施フィールド :杵築市、由布市

連 携 機 関 :NPO法人ABC野外教育センター、国立大学法人大分大学

概 要

大分県における文科省 COC+ 事業（地（知）の拠点大学による地方創生推進事業）では、大分県内の大学・自治体・経済団体・企業等が連携して地域の雇用創出及び学卒者の地元定着の向上等を図ることを目的に人材育成・就職支援等の取り組みを行っている。人材育成においては、「大分を創る人材を育成する科目」を大学間の単位互換科目として実施しており、社会人として活躍するために必要なジェネリックスキル（汎用的技能）を高めることを目的に、本学主幹で 2 つの合宿を実施した。

取組内容

『ジェネリックスキル養成１』（教養基礎科目、１年前期、選択、１単位）

【目的・内容】本科目では、1 泊 2 日の野外活動研修を通じて、経験から学ぶ力であるコンピテンシーを養成することを目的に実施した。県内大学の学生が合同で合宿研修を行い、野外活動研修であるプロジェクトアドベンチャーをベースとした体系的な活動を通じて、自己の理解と挑戦、他者の理解や役割、さらにはチームとして課題に立ち向かうことの重要性を理解し、ふり返りを通じてコンピテンシー能力を高めていった。

【実施場所／日程】 杵築市 住吉浜リゾートパーク／ 9 月 12 日（火）～ 13 日 (水)

【主なスケジュール】

1 日目 11:00~　オリエンテーション、チーム編成、アイスブレイク
　　13:00~　ABC プログラム（ローエレメント 3 プログラム）
　　19:30~　今日のふり返り（フリップトーク・ビーイング）
2 日目 9:00~　ABC プログラム（ローエレメント 3 プログラム）
　　13:45~　ふり返り（フリップトーク・ビーイング等）

【参加者数】 NBU14 名、大分大 12 名、芸短大 1 名（1 年生、男 20 名、女 7 名）
　　合計 27 名（9 人 ×3 チームで活動）

【指導協力】 NPO 法人 ABC 野外教育センター

『ジェネリックスキル養成１』の様子

『ジェネリックスキル養成２』（教養基礎科目、１年後期、選択、１単位）

【目的・内容】本科目では、1 泊 2 日のワークショップ研修を通じて、知識を活用して問題解決する力であるリテラシーを養成することを主目的として実施した。提供された大分・福岡・東京についての資料をもとに、メンバーが異なる資料を読み解き、それを統合して地方創生についての課題を発見し、そのような状況の中で、今後自分たちがどのように生きていくかをプレゼンテーションにまとめた。

【実施場所／日程】 由布市 NBU 湯布院研修所／ 2 月 18 日（日）～ 19 日 (月)

【主なスケジュール】

1 日目 10:30~　オリエンテーション、チーム編成、アイスブレイク
　　12:30~　ジグソー学習による資料の読解、共有、議論
　　19:00~　プレゼンテーション準備
2 日目 9:30~　プレゼンテーション
　　13:00~　ふり返り（結果発表、講評、フリップトーク、自己評価）

【参加者数】 NBU 44 名、大分大 7 名（全員 1 年生、男 39 名、女 12 名）
　　合計 51 名（5or6 人 ×10 チームで活動）

『ジェネリックスキル養成２』の様子

学生の学び

それぞれの合宿での大学を超えた主体的な活動によりジェネリックスキルを伸ばすことができた。適切なふり返りの実施により、自己評価スキルも身につけることができた。

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097 - 592 - 1600(大代表)
Web : http://www.nbu.ac.jp
【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通)
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

おおいた、つくりびと

3. 地域志向プロジェクト研究
卒業研究・論文 地域志向関連リスト

平成 29 年度 地域志向プロジェクト研究 実施報告書

・地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける
　需要予測に関する研究

・高齢者向けものづくり教材の開発

・地域経済を考慮した地域課題取組みに向けた
　プラットフォーム構築

平成 29 年度 卒業研究・論文 地域志向関連リスト

地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究

今西衞[†]、本村裕之[†]、工藤順一[‡]、舛田佳弘[†]、山城興介[†]

[†]経営経済学科地域マネジメントコース、[‡]経営経済学科会計ファイナンスコース

本学学生が提案している観光ツアーなどが実現可能であるかを判断するため、アンケートデータに基づいた需要予測分析を行った。本年度は、東京都、大阪府の大都市、大分県から近い中核都市である福岡県、そして、大分県を対象に、観光地の認知度、学生が考えた観光促進プログラムの需要予測を行い、実現可能性を検証した。学生の考えた観光促進プログラムは、東京都、福岡県からの観光客誘客に有効であることが分かった。関係機関と連携し、観光誘客につなげていきたい。また、これまで認知度が高かったと思われていた観光地も近年は認知度が低いことも分かった。これらについてはPRとともに今後の課題としたい。

1．研究の目的

大分県は「日本一のおんせん県おおいた」を標榜するなど、日本でも有数の温泉地であり観光資源には恵まれている。しかし、豊後大野市は県内で温泉がない自治体の一つである。産業も第1次産業が中心で、高齢化率も38%（県内3位）と高い。一方で、豊後大野市には、ジオパークなどの地域資源が数多く存在するが、これらが顕在化されておらず有効な地域観光資源となっていない。

経営経済学科では、平成27年度よりサービスラーニングなどの講義を通じて、豊後大野の観光における地域資源の魅力の発見や現状、課題を議論し、ＮＢＵチャレンジＯＩＴＡ地域創生活動報告会　2016 および 2017（2016年、豊後大野市）、2016年ものがたり観光行動学会第6回年次大会九州広域観光シンポジウム「普段使いのローカル線『沿線の日常』が注目される観光の時代」(2016年、大分市)、などにおいて、学生おすすめのツアープランを提案し豊後大野のPR動画、ポスターなどを製作した。

本年度も学生自身による豊後大野のプロモーション活動を行った。PR動画プロジェクト、VR プロジェクト、酒蔵ツアープロジェクト、ポストカード・あそぼーいプロジェクトなど多岐にわたった。これらの活動の中で、学生が一生懸命活動を行っているにもかかわらず、その成果が、広く一般に浸透していない結果を踏まえ、学生らは発想を転換し、みんなに動画や写真を撮影し、SNS に投稿してもらう仕組みにいきついた(図1)。

研究代表者らは、こうした学生の提案にエビデンスに基づく提案の補強を行うことで、学生の提案が実現可能であるか判断することことを目的とする。

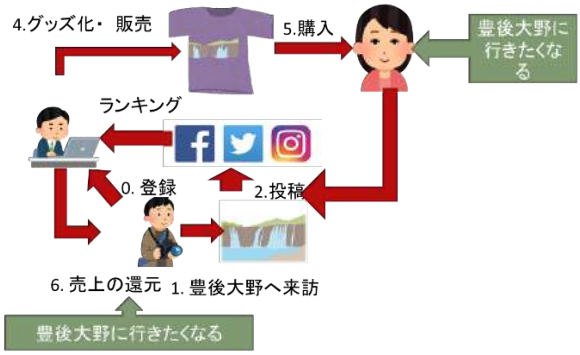


図 1　学生が提案した

フォトコンテストプログラム

まず、学生が提案したフォトコンテストプログラムを簡単に紹介しよう。これまでのフォトコンテストは、開催期間が短く、写真家などが審査員となり、芸術的な写真を選んでいるが、そもそもフォトコンテストが開催されていることを、海外を含め、広く多くの人が知っていない現実がある。結果として、市民中心の参加型となり、情報発信としては弱い傾向がある。近年、バズやインフルエンサーと言う言葉に代表されるように、SNS に利活用によって、爆発的に情報が普及することがある。そこで、学生らは、SNS に投稿してもらう仕組みに着目した。

まず、観光客が観光地に訪れ、写真や動画を撮影し、SNS に投稿する。投稿された内容は、フォロワーなどから「いいね」などの評価を受ける。その評価数を、点数化し、評価の高いものを抽出し、写真などを使ってグッズ化する。もちろん、使用許可を事前にとっておく。グッズ販売の売上の一部を投稿者に還元することで、いつの間にか、臨時収入となり、YouTuber のように、広告収入目的に PR してくれる観光客を呼び込もうと言う戦略である。同時に、

「いいね」の評価が高い写真は、それをみた人にも観光に行きたいと思わせる誘因を持つ。これらの効果もねらっている。

2．研究の方法

学生の提案を補強するために、アンケート調査を行った。東京都、大阪府、福岡県、大分県居住者を対象としたインターネット調査で実施日は 2017 年 12 月 22 日(金)-25 日(月)の期間、対象年齢は 20 代から 60 代、サンプル数は各都府県　125 名である(図 2)。

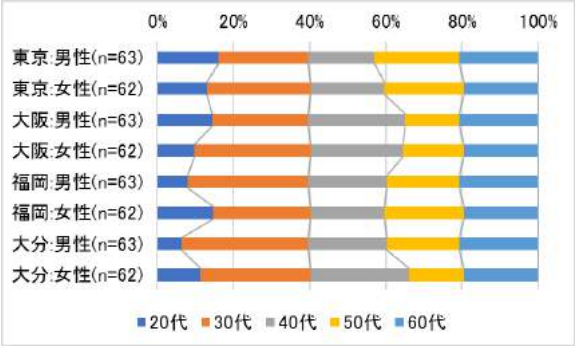


図 2　サンプルプロフィール

3．研究成果

3-1 現状分析

普段、SNS を利用しているかたずねたところ、以下のような結果となった。

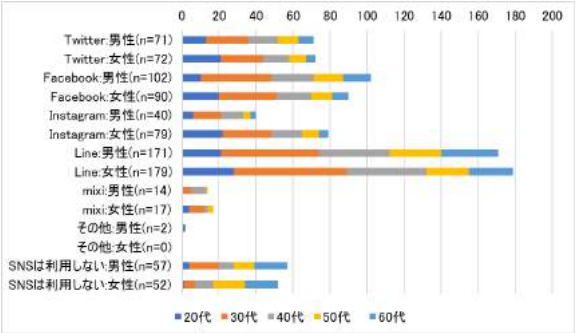


図 3　SNS の利用状況

LINE は、30 代 40 代を中心に多く、Facebook は 30 代が中心、Twitter は、30 代が中心、Instagram は女性の利用が多いことが分かった。また、30 代男性で SNS を利用しないが多かった。

次に、観光に行った際、その内容を SNS に投稿するかたずねた。旅行については SNS に投稿しない人が多いことが分かる。LINE や Facebook など閉鎖的な SNS に投稿する傾向がある。Twitter や Instagram は女性の投稿が多いことが分かった。

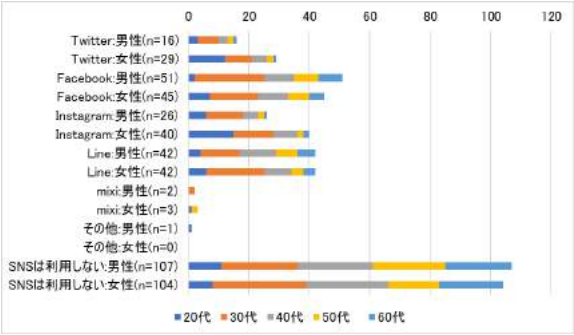


図 4　旅行での SNS 利用状況

次に、過去 5 年間での観光の目的についてたずねた。各都府県の傾向として東京は自然を求め、大阪は食を求め、福岡は、くつろぎを求め、大分は体験を求めていることが分かった。

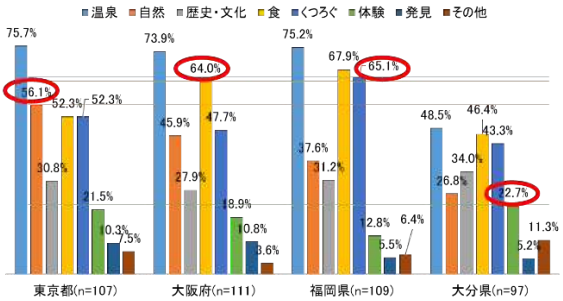


図 5　過去 5 年間の観光の目的

同様に、過去 5 年間での大分への観光の目的についてたずねた。温泉は所与として、東京は自然や歴史を求め、それ以外は、食やくつろぎを求めていることが分かった。

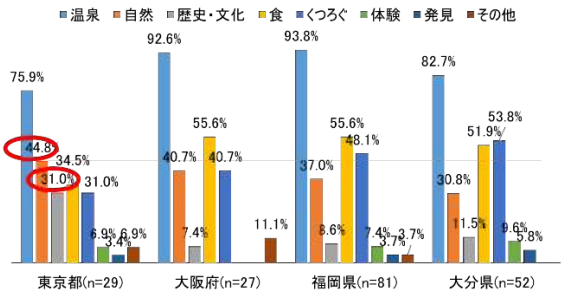


図 6　過去 5 年間の大分への観光の目的

次に、豊後大野市の観光地の認知度について調べた。比較的認知度が高いと思われる「東洋のナイアガラ」と呼ばれる原尻の滝と、「雪舟も描いた」沈堕の滝についてたずねた。いずれも大分を除いて認知度は非常に低かった。

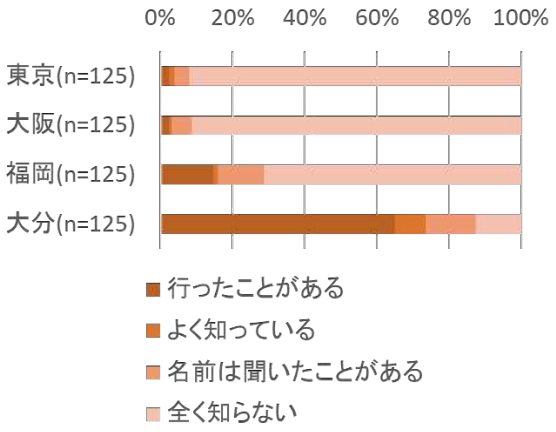


図 7　原尻の滝の認知度

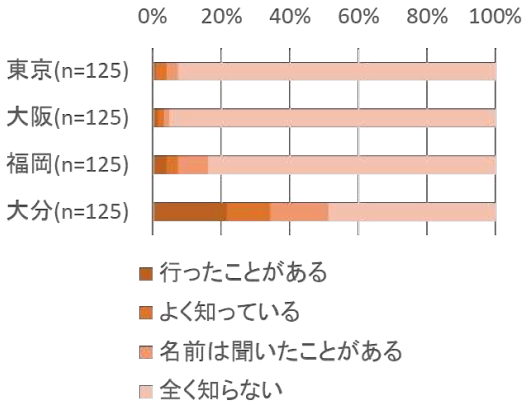


図 8　沈堕の滝の認知度

認知度の比較対象のために、豊後大野市近隣の観光地の認知度をたずねた。竹田市は湯治として有名であり、観光に力を入れており、街並みの整備されている。滝廉太郎の「荒城の月」の舞台となった岡城址と、最近まで歩行者用吊橋日本一であった九重“夢”大吊橋について認知度をたずねた。

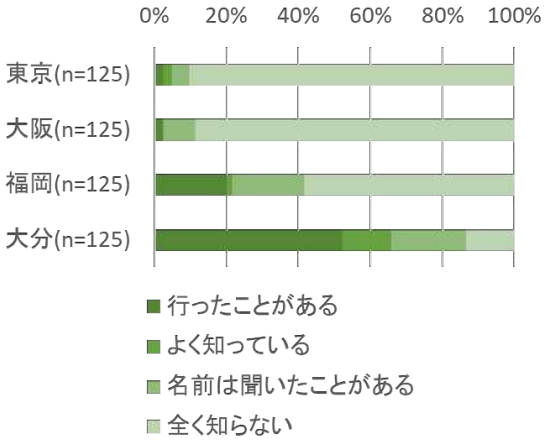


図 9　岡城趾の認知度

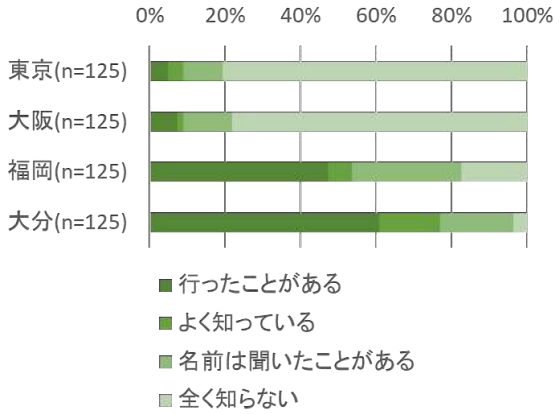


図 10　九重“夢”大吊橋の認知度

次に、大分県で比較的有名と思われる、磨崖仏としては日本初、彫刻として九州初の国宝となった臼杵石仏の認知度をたずねた。やはり、認知度が低いことが分かった。

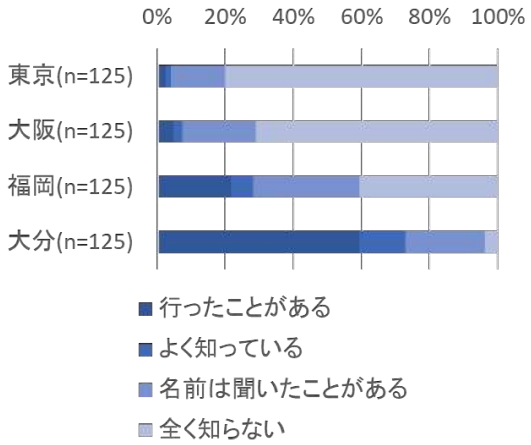


図 11　臼杵石仏の認知度

これらの結果は非常にショッキングである。大分県は温泉の再ブランド化には成功しているが、観光地としての認知度がないことを意味している。観光地の認知度向上として、東京、大阪をターゲットとするならば、九州広域観光を真剣に考えなければならないことを意味している。

さて、本研究は、COC 事業の一環であるが、COC 中間報告会にて、これらの研究活動報告を行ったところ、大分県から、ユネスコエコパーク(BR)についても調べて欲しいとの要望が出てきた。アンケート調査前のため、調査分析をすることができた。このように、プロジェクトの途中で、新たなステイクホルダーと協働で活動できたことは、本研究活動の意義が認められたと思われる。

以下、BR についての集計結果である。

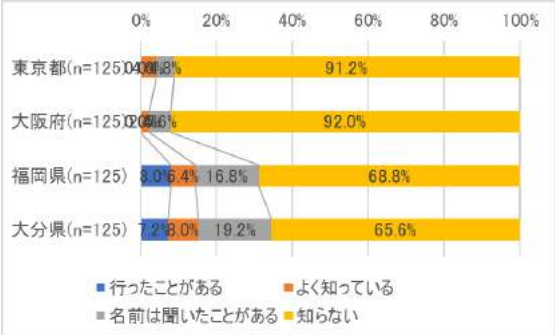


図 12　綾の認知度

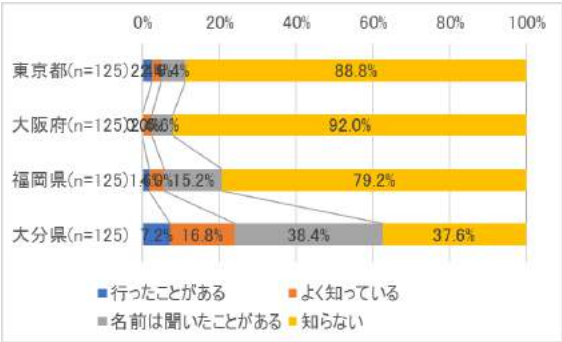


図 13　祖母・傾・大崩の認知度

紙面の都合上、すべては掲載しないが、総じて認知度は低い傾向にあるが、大分県は他地域の BR に対しても関心がある傾向があり、啓蒙活動が功を奏していると思われる。

3-2 需要予測

プログラムを行うことでの来訪意向、支払意思額、返礼品などについてたずねた。

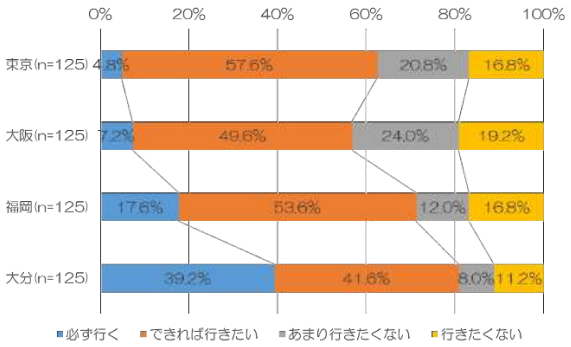


図 14　フォトコンテストプログラムへの来訪意向

この結果、来訪意向が高いことが分かった。また支払意思額も東京都は交通費を除いて 2 万円と高額であることが分かった。学生が考えた返礼品は、T シャツを想定していたが、アンケートによると、ふるさとの食材が圧倒的であった。

表 1　豊後大野市への観光での支払意思額

N	平均	標準偏差	最小値	最大値
東京(n=125)	20358.3	52432.99	0	500000
大阪(n=125)	13229.6	11068.55	0	50000
福岡(n=125)	11249.21	12388.02	0	100000
大分(n=125)	11819.7	44368.14	0	500000

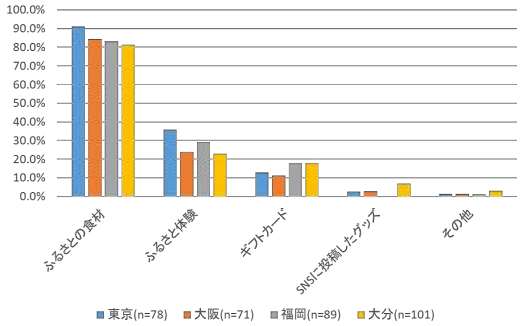


図 15　返礼品は何がよいか

4．今後の展開

学生提案のプログラムは非常に有用であることが分かった。また、返礼品はふるさとの食材が圧倒的であることから、豊後大野の 6 次化は必須である。また、本研究は、豊肥本線沿線の地域活性化も目論んでいるので、これらについてもステイクホルダーとともに研究および事業化に結びつけていきたい。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

1. 本村裕之、今西衞，“地域魅力資源に対する需要予測に関する基礎的研究”，不動産学会論文集 33, pp120-125, 2017, 査読無.

2. 本村裕之、今西衞、工藤順一、舛田佳弘，“地域資源を活用した観光ツアープランの需要予測に関する研究”，日本文理大学紀要, Vol.45-46, pp.239-pp.245

〔学会発表〕（計２件）

1. 今西衞、本村裕之，“地域魅力資源に対する需要予測に関する基礎的研究”，日本不動産学会(2017 年 11 月 16 日 大阪産業大学)

2. 今西衞、本村裕之、工藤順一、舛田佳弘、山城興介，地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究”，チャレンジ OITA 地域創生活動報告会(2018 年 2 月 21 日豊後大野市役所)

高齢者向けものづくり教材の開発

鈴木秀男[*1]、松永多苗子[*1]、足立元[*1]、星芝貴行[*1]、稲川直裕[*2]
平居孝之[*3]、濵永康仁[*3]
[*1]情報メディア学科　[*2]機械電気工学科　[*3]建築学科

昨年度から高齢者向けのものづくり教材の開発に取り組んでいる。昨年度は、高齢者を対象としたものづくり教室、高齢者と子供たちとの合同ものづくり教室を展開してきた。この中で、多くの有意義な意見や実施者としても多くの気付きがあった。本年度は、頂いた意見や気付きに基づき、昨年度に開発した教材の改良と新規教材の開発、情報端末における開発環境の構築に取り組んでいる。本報告では、本年度取り組んでいる教材開発について、その成果についてまとめる。

１．はじめに

昨年度から高齢者向けのものづくり教材の開発に取り組んでいる。昨年度は、高齢者の反応を確かめるとともに、高齢者からの意見、施設担当者からの意見、実施者としての気付きをもとに教材を改良してきた。高齢者のみのものづくり教室、高齢者と子供たちとの合同ものづくり教室を実施する中で、高齢者や子供たち、地域との連携を通して、ものづくり教室が高齢者支援に有効であるという手ごたえを感じている。このようなものづくりを通して、健全な高齢者を維持でき、子供たちと高齢者との懸け橋となり、地域の活性化に貢献できればと考えている。

本報告では、昨年度に完成した教材の改良と、新規教材の開発に取り組んだ成果についてまとめる。

２．研究の目的

本研究では、ものづくりを通して健全な高齢者を維持することを目的としている。ものづくりは、指先を動かし、形や色を判断する作業である。作業は高齢者や子供たちを対象とするため、簡単にできるように工夫している。この作業を通して、脳の活性化が期待できるとともに、コミュニケーションの促進や生きがいの認識につながることも期待できる。

ものづくりを通して、高齢者の機能回復あるいは機能維持につながり、認知症の予防に効果があれば、徘徊高齢者自体を減少できるものと考えている。

教育への還元では、高齢者や子供たちの意見をもとに、どのような教材開発、どのような改良が最適なのかを考えることで、地域の抱えている問題を認識し、自らの手で開発した教材が地域に役立っていることを認識することで地域に根差した人材を育成することができる。また、高齢者や子供たちに教えることで、学生自身の人間力の向上にもつながるものと考えている。

３．研究の方法

本研究では、マイコンを用いた電子工作を主に扱う。通常、電子工作では、プリント基板に部品を実装するために、はんだ付け等の作業が必要となる。しかし、高齢者を対象とするため、やけど等のリスクを避け、安全で安心、時短で修正も容易なブレッドボードを使用する。ブレッドボードの使用においては、高齢者を意識して、以下の点を工夫している。

・認識しやすいようにジャンパ線は平面配線とし、立体交差や斜め線は使用しない
・取り扱いが容易になるように部品はボードから浮かないようにする

本年度は、以下の 3 点について検討してきた。

I. 昨年完成した教材の改良
　昨年は 3 つの試作教材からはじまり、高齢者や施設担当者、気付き等を踏まえて、何度か改良を重ねてきた。しかし、細かい点で、まだ改良の余地はあり、さらなる改良を実施している。

II. 新規教材の開発
　ものづくり教室を通して、多くの要望を頂いている。これらの要望に基づいた新規の教材を開発している。

III. 情報端末による開発環境の構築
　ものづくり教室を開催する中で、プログラミングに興味を持つ高齢者や子供たちも多く、簡単に操作できる情報端末を構築している。

４．研究の成果

４．１　昨年完成した教材の改良

昨年度は、電子オルゴール、電子サイコロ（アナログ表示）、電子サイコロ（デジタル表示）の 3 種類の試作教材から改良を重ねてきた。電子サイコロは工作の難易度として、適当であることが分かり、高齢者の評判も良かった。試作教材は図１のようなものであったが、色々な意見や指摘を頂く中で、最終的に図２のように変化した。

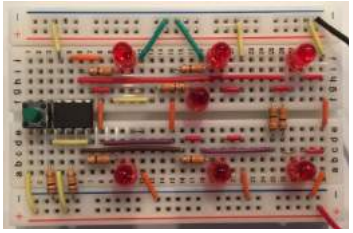


図１ 電子サイコロ（試作版）

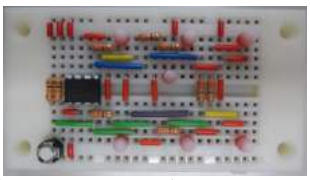


図２ 電子サイコロ（昨年度の完成形）

図２において、サイコロの目の１や５の時に点灯する中心の LED がボードの性質上、どうしても中心位置に来ない。リード線部を広げて、全体の目の中心となるように配置を変更することもできるが、部品も取り付け難くなることから、LED のレイアウト自体を変更することにした。案としては、図 3 のようなパターンが考えられる。

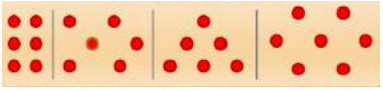


図３ アナログ表示のレイアウト

この中で、右端のパターンを使うことにした。このパターンは左右と上下が対象となっており、完成したボードで縦でも横でも使えることから、このパターンに決定した。

実際の実装において、抵抗は図 4 のような２種類を使っているが、全体の形や大きさは同じであり、色合いも似ており、カラーコードで識別している。ものづくり教室では、図 5 のようなトレイに入れて渡しているので、区切り場所と個数を確認することで区別はできている。ただ、作成中に混在してしまうこともあるため、より識別しやすい部品に交換することとした。当初は、図６のように、大きさの異なる抵抗を使うこととしたが、実際に作成していただいたところ、部品が小さくなっている分、リード線も細くなり、取り付け難いとの意見を頂いた。そこで、大きさの違いから、色合いの違いへと変更をした。ただし、色違いの抵抗は多少高価なため、使用本数の少ない方に使用することとした。色違いの抵抗を実装したものが、図７である。

図４ 使用抵抗の違い

図５ トレイに乗せた部品

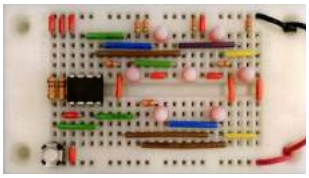


図６ 抵抗を大きさの違いで識別

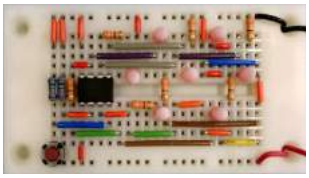


図７ 色違いの抵抗で識別

その後部品の見直しをする中で、マイコンの入力と出力を同一ピンで実装できるものがあることが判明した。入出力ピンの切り替えは、プログラム上で実装することとし、部品点数を減らし、最終的に完成したものが図 8 である。スイッチが一つであるが、長押しなどを組み合わせることで、カウントアップタイマー、カウントダウンタイマー、ルーレット表示などの隠しコマンドも組み込んでいる。

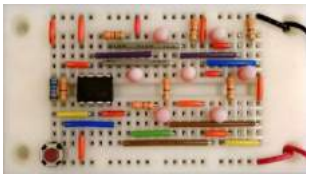


図８ 最終的な完成形

電子サイコロ（デジタル表示）についての試作教材は図 9 のようになり、昨年度の最終的な教材は図 10 のようになる。本年度は、表示

部の大型化、未使用ピンを使ったフル機能対応、音圧のレベル向上、コスト減を図った。抵抗に関しては、電子サイコロ（アナログ表示）と同様に色違いとしている。最終的な完成形は、図 11 のようになる。通常のスイッチの他にフル機能に対応するためのスイッチも実装している。これらを組み合わせることで、大学のロゴ表示、カウントアップタイマー、カウントダウンタイマー、ルーレット表示、最大 9 までのサイコロなどの隠しコマンドも組み込んでいる。

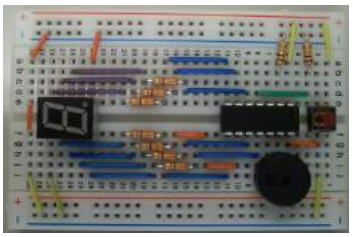


図 9 電子サイコロ（試作版）

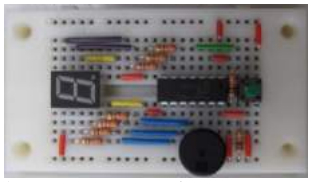


図 10 電子サイコロ（昨年度の完成形）

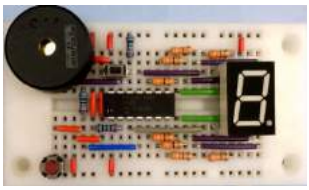


図 11 最終的な完成形

４．２　新規教材

新たに、脳トレ用のシンプルゲーム、電子楽器を開発した。

脳トレ用のシンプルゲームは、3 色の LED が音とともに、ランダムに点灯し、その順番を覚え、同じ順番でスイッチを押すというものである。乱数を使っているため、毎回異なるパターンを生成することができる。途中で間違えた場合でもパターンは更新される。難易度は、簡単（緑）、やや難しい（黄）、難しい（赤）の 3 レベルとしている。各レベルでクリアすると、ご褒美メロディが流れるようにしている。試作版は、図 12 のようになり、半固定抵抗でタイミングを調整している。高齢者でも無理なく実行できるタイミングを見つけたのち、この部分を固定抵抗にし、ボードを変更したものが図 13 である。さらに、部品の点数を減らすために、これらの抵抗をソフトウェアで実現することとした。最終的に完成した教材が図 14 である。スピーカはリード線タイプ、ボード実装タイプどちらにも対応している。

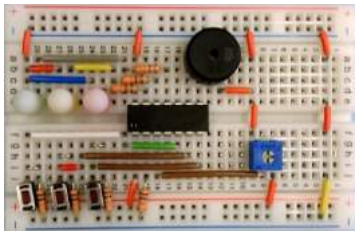


図 12 シンプルゲーム（試作版）

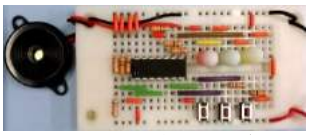


図 13 シンプルゲーム（改良版）

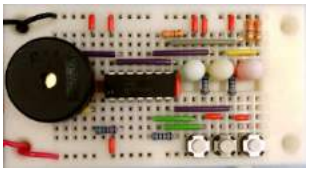


図 14 シンプルゲーム（最終版）

電子楽器については、ボタンを押している間、電子音で音階を奏でるものである。ボタンは、LED と連動するようにしている。図 15 は、5 個のボタンがあるが、右側 4 個のボタンで、ドレミファを奏で、左端のボタンを押した状態で右側 4 個のボタンを押すと、ソラシドを奏でるものである。構成がシンプルであり、組み立ても簡単であるが、1 オクターブは直接ボタンを押したい、半音変化が欲しい、との意見を頂き、図 16 のように大きなボードで実装することとした。図 16 の赤色の右側 8 個のボタンで、ドレミファソラシドを奏でるようにしている。左端の白いボタン（緑の LED）を押しながら右側 8 個のボタンを押すと 1 オクターブ高い音階が奏でられ、2 オクターブの楽器となる。また、左から 2 番目の白いボタン（黄の LED）を押しながら他のボタンを押せば、半音上がる設定となっている。

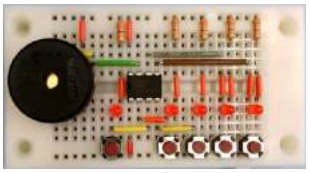


図 15 電子楽器（小さいボード）

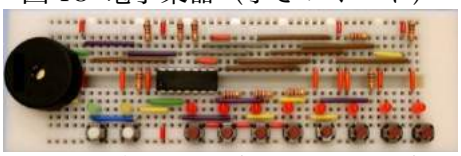


図 16 電子楽器（大きいボード）

４．３　情報端末による開発環境の構築

ものづくり教室を開催する際に、手軽に動作原理を体験できるような情報端末を構築している。デスクトップ PC やノート PC ではなく、図 17 のように液晶画面にマイコンを取り付けた簡易的な情報端末を構築している。OS としては、Linux と Windows に対応している。この情報端末でプログラミング体験や動作シミュレーションができるような環境を構築する。

図 17 マイコンを使った情報端末

５．研究成果

実際のものづくり教室では、部品を図 5 のようなトレイに乗せて配布している。トレイの区切りごとに部品をボードに実装する手順で制作している。また、部品の実装では、図 18 のようなにイラストを使用した手順書を見ながら進める。手順書は当初写真を用いていたが、部品の実装が分かり難いとの指摘を頂き、図 18 のようにイラストで、実装部分を強調して表すようにしている。

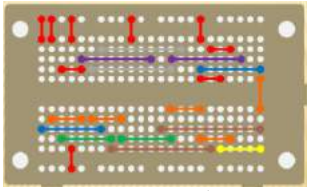


図 18 手順書の一部（ジャンパ線）

初めての人などには、最初のステップであるジャンパ線の実装に関して、戸惑うこともあった。「どこから挿してよいのか」、「どこを基準に挿すのか」が分かり難いとの指摘があり、ジャンパ線の実装に関しては、図 19 のように、あらかじめ何本かを挿しておき、それを基準に挿せるように工夫している。

実際のものづくり教室の風景は、図 20 のように、手順書に沿って工作を行う。また、高齢者と子供たちとの合同ものづくり教室では、事前に高齢者にレクチャーをしたうえで、高齢者と子供たちをペアにして、高齢者が子供たちとコミュニケーションを取りながら教える形式としている。

完成後は、制作したものを使ってゲームなどをして楽しむことにしている。すごろくやじゃんけんゲーム、簡単な足し算や記憶力ゲームなどをしている。

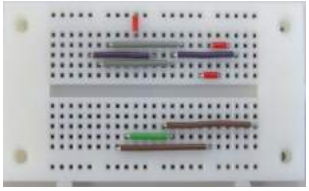


図 19 配布用ボードの一例

図 20 ものづくり教室の実施風景

６．今後の展開

本年度は開発教材の種類を増やすことに取り組んできた。ものづくり教材に関しては、まだ多くのアイデアがあり、今後も開発を重ねたいと考えている。また、本年度は教材開発を主に実施してきたため、実際に開催したものづくり教室の回数は少なくなってしまった。今後は、開発した教材を使用して、ものづくり教室を積極的に展開したいと考えている。

（謝辞）養護老人ホーム常楽荘の皆様、おがた子供チャレンジに参加された皆様、その他協力いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

１. 鈴木秀男 他、高齢者向けものづくり教材の開発、日本文理大学紀要、Vol.45 No.2 pp.41-46

〔学会発表〕（計２件）

2. 鈴木秀男 他、高齢者向けものづくり教材の開発、チャレンジ OITA 地域創生活動報告会、平成 28 年 3 月 3 日、豊後大野市
3. 鈴木秀男 他、高齢者向けものづくり教材の開発、チャレンジ OITA 地域創生活動報告会、平成 29 年 2 月 21 日、豊後大野市

地域経済を考慮した地域課題取組みに向けた プラットフォーム構築

福島学[1]，松永多苗子[1]，筑紫彰太[2]，市田秀樹[3]， 今西衛[4]， 本村裕之[4]， 山城興介[4]

[1]情報メディア学科,[2]機械電気工学科,[3]COC 事業担当,[4]情報メディア学科

工学的研究成果（工学的「知」）を統合するプラットフォーム開発を発展させるため「地域経済」を視野に入れた取組みを行った．課題解決を「シカケ」という概念を用いて，工学的な観点と経済的な観点を組み合わせ，地域経済を含む活性化に向けて進めるための「知」のプラットフォームに昇華することを目標とした．地域課題への取組みとして，１）木佐上地区での活動，２）大分地域での活動，３）生活の質（QoL）向上，に取り組み，それぞれの成果から，地域課題の解決は「1 つの技術」だけでは無理であることと維持継続には「ビジネス的視点」が重要であることを再認識すると共に継続的取組みに向けた課題が明らかとなった．

１．研究の目的

地域課題を技術課題と捉え課題解決を図ることは，技術力向上および品質向上というだけでなく，課題の本質を明らかにするために重要である．このため，平成 27 年度 28 年度に工学部で取り組まれている研究成果（工学的「知」）を統合するためのプラットフォーム開発を進めてきた．

しかし，優れた技術であっても実際の地域活性化に向けた導入を考えると，場面に応じてローカライズされた技術の導入には費用対効果等から困難な場合が多い．また研究レベルでの完成と，地域課題解決での永続的利活用に向けた工学的「知」のプラットフォームの検証が必要である．

そこで本研究では，これまでの異分野間の研究･開発成果をプラットフォームにより融合可能とし，それによる地域課題解決により地域活性化を目指す．課題解決を「シカケ」という概念を用いて，工学的な観点と経済的な観点を組み合わせ，地域経済を含む活性化に向けて進めるための「知」のプラットフォームとラピッドプロトタイプ開発環境構築を目的とする．

２．研究の方法

地域課題への取組みとして，次の項目を通してプラットフォームの検証と経済的観点の導入を行う．

１）木佐上地区での活動

a)まなび庵：LINE による地域コミュニティ（2017 年 10 月から 12 月）

装置の使い方を学ぶだけでなく，地域コミュニティ活性化を視野に入れた学びとして，地域防災への利活用への導入としての学びを実践する．

b)ロボットプロジェクト入門２（1 年生科目・2017 年 10 月から 2018 年２月）

地域の方々との交流から地域課題を発見し解決策を考えプロトタイプとしてアイデアをカタチにし，地域の方々からの評価を頂く．

c)ロボメカデザインコンペ（課外活動・2017 年 5 月から 2018 年 3 月）

ロボットプロジェクト入門 2 元受講生が，ロボットプロジェクト基礎 2 および Hallow（Happiness Long Life Open-innovation Workshop：生きがいのあるくらしを創るオープンイノベーションワークショップ）を通して工学的知を修得しつつある学生有志が改めて「木佐上地区を念頭に入れた地域課題」に挑戦し，そのプロトタイプ（機能試作モデル）をコンペティションという形で挑戦する．

２）大分地域での活動

d)OISA（大分情報産業協会・2017 年 9 月から 2018 年２月）

サウンズコンテストは OISA(大分県情報サービス産業協会)主催のイベントの 1 つで，26 年間続いている音楽系コンテストとして歴史がある．このイベントをインターネット配信する．

e)ロボットプロジェクト基礎２（2 年生科目・2017 年 10 月から 2018 年２月）

商業スペースにシカケ（人の行動に働きかける取組み）を行い，回遊性改善に挑戦する．

３）生活の質（QoL）向上

f)睡眠の質改善に向けた計測実験と結果の評価（2017 年４月から 2018 年３月）

活気ある地域の源である個々人の健康を維持向上することを目的とし，健康を保つために不可欠な睡眠の質を改善する素材に取り組んでおり，本年度は医学的エビデンス取得に取り組む．

３．研究成果

３．１　木佐上地区での活動

３．１．１　まなび庵

2016 年度 2017 年度に「IT 講習会」としてタブレットの使い方講習会を行った．しかし「地域コミュニティ活性化」という観点からもっと役立つ実施方法がないかを考え，単なる IT 講習会から「目的を持った学び」に取り組んだ．また，会場で使用した木佐上コミュニティセンタにおいて，「3.3　活の質（QoL）向上」の取組み成果をフィードバックする取組みも行った．ここでは講習会における「疲労感」を軽減することを目的とし，響きのある部屋における脳内処理軽減に効果がある調音材の設置を行った．設置位置決定のための計測の様子を図１に，効果計測結果を図２と３に，設置位置を図４に示す．

図１　疲労感軽減のための調音材設置位置決定のために実施した計測の様子

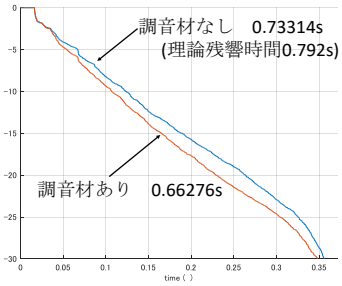


図２　調音材設置による残響時間の変化

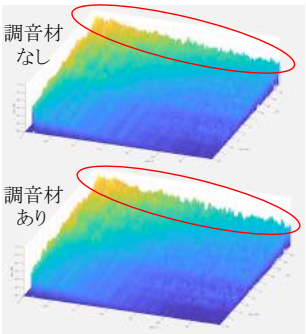


図３　調音材設置による時間・周波数の変化

図４　決定した調音材設置位置

３．１．２　ロボットプロジェクト入門２

ロボットプロジェクト入門２（1 年生・後期科目）は木佐上地区をフィールドとして，地域散策やお話をお伺いしながら地域課題を発見し，解決に向けてプロジェクトで取り組む科目である．地域の方々に御協力いただき，地域のお話を伺い，さらに地域を散策しながら課題を発見し，チームでどう解決すればいいのかを考え，それをカタチにして地域の方々に提案した．成果報告の様子を図 5 に示す．またカタチにしたプロトタイプを使ったデモンストレーションの様子を図６に示す．さらに，11 チームの中から選抜されたメンバがさらにブラッシュアップして佐賀関公民館で発表した．その様子を図７に示す．

図５　木佐上コミュニティセンタでの成果報告の様子

図６　デモンストレーションの様子

図７　佐賀関公民館での成果報告の様子

３．１．３　ロボメカデザインコンペ

「フューチャードリーム！ロボメカ・デザインコンペ 2017」は日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス部門主催のコンペティシ

ョンで，福岡県，北九州市，久留米市，福岡県産業デザイン協議会，福岡県ロボット・システム産業振興会議，北九州ロボットフォーラム，一般社団法人九州経済連合会，が後援，福岡市科学館，が共催，メカトラックス株式会社，株式会社三松，が協賛で開催された．

地域活性化の要が，高齢者，労働現役世代，未就業世代の相手を必要としあうことであると考え，図 8 に示す「互いを尊重し感謝を交わせる地域コミュニティの創生」をスローガンとしてウェルステッキを考案した．システムは単独では動作せず，主に高齢者が歩行補助具として使用する．補助具として機能する以外に，地域情報を収集し，例えば図 9 に示すように木佐上地区のどこをどう移動しているか，またその地域の現在の様子がどうかを記録することで，日常においては子供の登下校の見守りやお祭りの見守り，災害時には避難計画や避難指示を出すための基礎データを収集し，杖同士がメッシュネットワークを構成することに特徴がある．結果としてコンペティションにおいて図 10 に示す 2 つの賞を受賞した．

図 8　地域活性化のコンセプト

図 9　地域情報収集例

図 10　受賞した賞状

3．2　大分地域での活動

3．2．1　OISA（大分情報産業協会）

サウンズコンテストは OISA(大分県情報サービス産業協会)主催のコンテストであり，第 26 回サウンズコンテストが 2018 年 1 月 27 日に iichiko 総合文化センタで開催された．この公開審査の様子を図 11 に示す配信環境で Ustream を用いて情報発信した．ライブ配信中の視聴時間数の変化を図 12 に示す．また，劣化を調べるための画像解析例として，ローカル録画サーバに記録された画像と，Ustream 録画（Web 内の録画サーバ）に記録された画像を用いた解析例を図 13 に示す．

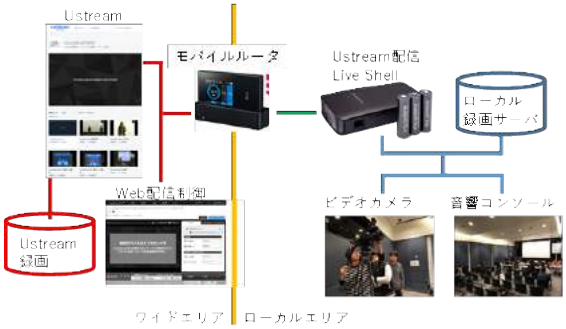


図 11　Web 動画配信のシステム構成

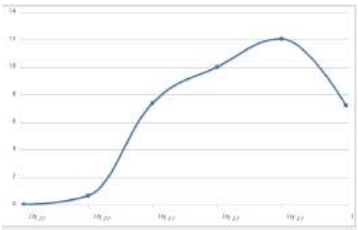


図 12　ライブ配信中の視聴時間数の変化

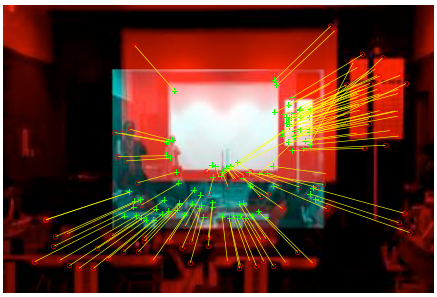


図 13　ローカル録画と Web 録画のフレーム同士の対応点解析例

3．2．2　ロボットプロジェクト基礎 2

ロボットプロジェクト入門に続いて開講されるロボットプロジェクト基礎 2 において，商業スペースの 1 つであるパークプレイスの課題解決に挑戦した．担当者から現在の課題をお伺いしたところ，回遊性が指摘された．そこで回遊性を改善するためのシカケを考案し，それにより課題解決に繋がるかの検証を行った．回遊性評価のため図 14 のようにビデオデータから，人数および移動軌跡さらには滞在時間を得るためのシステムを開発した．

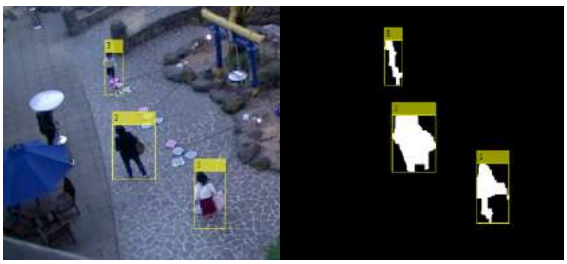


図 14　回遊性評価のためにビデオデータから移動情報を自動抽出するシステムの動作例

３．３　生活の質（QoL）向上

人は響きのある環境でも目的の音を聴き分けることが可能である．これは，脳内で目的音の選択と補完を行うことで可能としている．しかし脳内では限られたエネルギーしか使うことが出来ないため，響く部屋で話をしていたり，多くの人が話す環境で話していると疲労感を感じる．これを防ぐために調音材が開発されており，これまでに脳波計測によりその効果を検証してきた．今回この調音材を睡眠時に適用することで睡眠の質改善になるかについて調査した．ここでは睡眠中に分泌されるメラトニンに着目した．メラトニンは体内時計のリズムを司どり，免疫系を刺激し感染症にかかるリスクの低下，抗酸化作用，血中コレステロール濃度を低下させる効果がある．また，睡眠時にしか分泌されない特徴がある．睡眠実験に製作した装置を図 15 に，改善効果例を図 16 に示す．

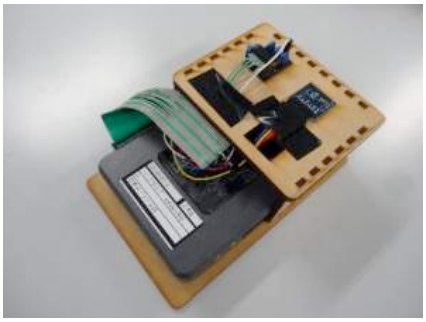


図 15　睡眠環境計測用装置

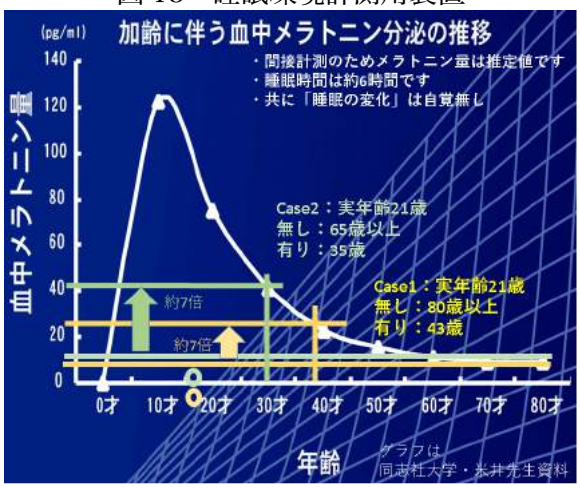


図 16　調音材使用による改善効果例

４．今後の展開

地域課題の解決は「1 つの技術」だけではなく，それが維持継続できるための「ビジネス的視点」が重要である．効果を評価するための継続的取組みが必要である．また成果の地域へのフィードバックが必要だと考えている．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1　件）

1. 福島学，松永多苗子，川崎敏之，稲川直裕，筑紫彰汰，室園晶彦，藤田浩輝，岡崎覚万，市田秀樹，長瀬翔斗，高橋瑞希，多賀絵理，大里一矢，大塚柊，""ものづくり”を通した持続可能で豊かな地域実現への取り組み"，日本文理大学紀要，第 46 巻，pp.181-190，第 1 号,2018 年，査読無

2. 福島学，長瀬翔斗，河納俊一，近藤善隆，"サイバー空間共有を目指した音場空間情報のモデル化とパラメトリック表現の一検討", 日本文理大学紀要, 第 46 巻，第 1 号，pp.101-110, 2018 年，査読無

〔学会発表〕（計　5　件）

1. 長瀬翔斗,大塚柊,大里一矢,高橋瑞希,舟橋宏樹,河納隼一,近藤善隆,福島学,松本光雄,風間道子,手島祐二,柳川博文,"位相情報に着目した高解像度周波数分析法（PLATE）の提案", 日本音響学会，日本音響学会 2018 年春季研究発表会講演論文集,1-P-40, 2018（埼玉）

2. 長瀬翔斗, 船橋宏樹, 河納隼一, 近藤善隆, 福島学, 松本光雄，風間道子，柳川博文，"ALT-W を用いた周波数スペクトル分析精度向上と時間追従性に関する一検討", 日本音響学会，日本音響学会 2017 年秋季研究発表会講演論文集，1-P-33，2017，愛媛

3. 船橋宏樹, 長瀬翔斗, 福島学, 松本光雄, 風間道子, 柳川博文, "残響音場における白色雑音の持続時間と音像幅の関係", 日本音響学会，日本音響学会 2017 年秋季研究発表会講演論文集，1-P-34，2017，愛媛

4. 長瀬翔斗, 福島学, 近藤善隆, 松本光雄, 風間道子, 柳川博文, "音源特性と両耳差に着目した音場情報のパラメトリック表現", 音学シンポジウム，情報処理学会研究報告，Vol.2017-MUS-115 No.29，2017，東京

5. 福島学,松永多苗子,筑紫彰太,市田秀樹,今西衛,本村裕之,山城興介,"地域経済を考慮した地域課題取組みに向けたプラットフォーム構築", チャレンジ OITA 地域創生活動報告会，2018,佐賀関

平成29年度　日本文理大学　卒業研究・論文・設計　地域志向関連リスト

No.	学科	研究題目	共同研究
1	機械電気工学科	グレーチング内のゴミ除去に向けた溝清掃ロボットの開発	
2	機械電気工学科	自律型水中ロボットの開発～電源ユニットの開発～	
3	機械電気工学科	自律型水中ロボットの開発～制御ユニットの開発～	6名
4	建築学科	プロジェクションマッピングを活用した空間体験に関する研究	
5	建築学科	ＵＡＶによる写真測量に関する基礎調査について―大分県におけるＵＡＶ活用の現場調査と実測じれいについー	3名
6	建築学科	蛍光X線分析による中津干潟における砂の動態の研究	
7	建築学科	台風１８号に伴う豪雨による大分県南部における水害に関する研究	
8	建築学科	大分の土木遺産の現状 について	
9	建築学科	竹材を粗骨材の代替材料として使用したコンクリートの諸特性に関する基礎的研究	
10	建築学科	中津干潟舞手川河口域における土砂動態に関する研究	
11	建築学科	Scale Skeleton　～日本文理大学　建築学科棟　改築計画　（卒業設計）	2名
12	建築学科	The Encount Architecture　一人々が集い、出会うことで、学び、賑わう建築ー	
13	建築学科	カラーユニバーサルデザインを活かしたまちづくりに関する研究 – セントポルタ中央町におけるケーススタディ –	
14	建築学科	交流人口拡大による佐賀関半島の活性化に関する研究	
15	建築学科	江戸時代の別府の町の形成と文人の見た風景	
16	建築学科	斜路の付け替え道路の計画　―大学構内の管理道路の場合―	
17	建築学科	船島　～佐伯造船を巡るサイクリング～　（卒業設計）	
18	建築学科	大分市立碩田小中一貫校における教師ステーションと交流ラウンジの利用状況	
19	建築学科	地域特性の研究　―CVSの利用実態―	
20	建築学科	中判田駅を中心としたまちづくり　その1　～利用者を対象にしたアンケート調査・分析～	
21	建築学科	中判田駅を中心としたまちづくり　その2　駅と自然の共存～地域と人が繋がるゆとりある空間～	2名
22	建築学科	鶴崎工業高等学校学科棟の設計　ーみちがある工業高校ー　（卒業設計）	
23	建築学科	保戸島の新たな拠点「NEW HARBOR HOTOJIMA」	
24	建築学科	木から家具へ、芸術を感じる日常へ	
25	航空宇宙工学科	長崎空港と大分空港の運営状況を活性化させるための施策提言	
26	情報メディア学科	大分トリニータと他のサッカークラブによるソーシャルメディア戦略比較	
27	情報メディア学科	導入教育における「シカケ」の実践的検討	2名
28	情報メディア学科	明度が個人識別に与える影響に関する研究	
29	情報メディア学科	自治体ＰＲ動画の戦略と効果的な演出プランに関する研究 -成功事例の検証とそれに基づくプロモーション映像制作-	2名
30	経営経済学科	AI導入による産業の雇用	
31	経営経済学科	JRおおいたシティの開業によって大分都心部にどのような影響を与えたか	7名
32	経営経済学科	you tubeと大分県の地域活性化	
33	経営経済学科	オリンピックによる経済効果	
34	経営経済学科	ゲームが売れない時代の任天堂の対策	
35	経営経済学科	サッカークラブの財務分析～ロアッソ熊本と大分トリニータの財務比較～	2名
36	経営経済学科	ファミリーレストラン業界の財務分析	
37	経営経済学科	ふるさと納税について	
38	経営経済学科	マーケティング戦略における「Place」がクラブ会員数に及ぼす影響についての一考察ー クラブ活動拠点と大在地区の物理的距離による分類から ー	
39	経営経済学科	ラグビーワールドカップ2019年に向けて～チケットの価格から見た経済を視点に	
40	経営経済学科	ラグビーワールドカップに向けての大分県の地域活性化活動	2名
41	経営経済学科	沖縄県と大分県の観光客の比較	
42	経営経済学科	株価予測手法を用いた大分銀行の株価予測	
43	経営経済学科	株式会社大分フットボールクラブの財務分析～アビスパ福岡株式会社との比較を通じて～	
44	経営経済学科	九州三県におけるラグビーワールドカップの経済波及効果	6名
45	経営経済学科	今治市の廃校と閉鎖商店街（活性化）	
46	経営経済学科	少子化における大分の不動産業界の展開	2名
47	経営経済学科	大在地区自治区公民館の利用状況調査とその活用法についての一考察	
48	経営経済学科	大分トリニータの経営に関する考察～　2016年（J3）、2017年（J2）の比較　～	
49	経営経済学科	大分県のスポーツによる地域活性化について（ラグビーワールドカップに向けて）	3名
50	経営経済学科	地域サロンについて	2名
51	経営経済学科	地方銀行の現状と課題～広島銀行と大分銀行の事例を中心に～	
52	経営経済学科	地方銀行の財務分析～大分銀行と十八銀行の財務分析を中心に～	
53	経営経済学科	湯平温泉地域活性化の方法	
54	経営経済学科	日本陸上長距離界が世界で活躍するために ー大分県を陸上の聖地へー	
55	経営経済学科	箱根駅伝と地方駅伝の差についての研究	
56	経営経済学科	福岡ソフトバンクフォークスの取組について	
57	経営経済学科	福岡ソフトバンクフォークスの地域貢献と経済効果	2名
58	経営経済学科	豊後大野市内の小中学生における不適応感と社会的スキルの学校規模による比較	
59	経営経済学科	野球とサッカーにおけるプロスポーツチームの経営比較	

4. 大学 COC 事業 活動報告

創立 50 周年記念大学 COC 事業活動特集

1. 地域住民主体の地域づくり支援
   ~ 豊後大野市千歳町「楽らく広場ひょうたん」活動サポート ~
2. 総合型地域スポーツクラブの認知度を高めるための
   イベント運営を通した地域参画と教育実践活動
   ~OZAI 元気クラブとの連携プロジェクト ~
3. 中判田駅を中心としたまちづくりプロジェクト
4. 学生の視点で捉えた豊後大野の魅力
   ～豊後大野市の地域資源を活用したサービスラーニング科目への展開～
5. 情報通信端末を活用した地域コミュニティーの安全・安心づくり
   ～大分市木佐上地区での高齢者 IT 教室～
6. 防災用小型無人水中観測システムの研究開発
7. 工学部専門基礎科目『ロボットプロジェクト』
   「地域に生きるものづくり」~ 地域を感じることから始まるものづくり ~
   「シカケ」からみえてくる地域課題：シカケプロジェクト
8. 産官学民医連携による
   『生きがいのあるくらしをつくるオープンイノベーションワークショップ』

チャレンジ OITA 地域創生活動報告会 プログラム

・2018 年 2 月 21 日 豊後大野会場
・2018 年 2 月 25 日 佐賀関会場

地域住民主体の地域づくり支援

~ 豊後大野市千歳町「楽らく広場ひょうたん」活動サポート ~

鍋田耕作、河村裕次、坂口昌宏、美濃祐子（経営経済学部）
こども・福祉マネジメントコース　2016 年度卒業生 7 名･4 年生 15 名･3 年生 7 名･2 年生 2 名
(プロジェクト実施期間：2015 年度～継続中）

こども・福祉マネジメントコースでは、将来、「子ども」「高齢者」「障がい者」、そして「ビジネス」など様々な視点から、つながりある地域社会の実現に貢献できる人材の育成を行っている。このような人材を育成するには、専門職の視点から、地域住民主体での地域づくりをどのように支えていくのか、創っていくのかを考え、実際に活動する場が必要になってくる。そこで、2015 度から豊後大野市高齢者福祉課の協力のもと、千歳町で行われている市民交流の場「楽らく広場ひょうたん」の活動サポートを実施している。この活動は、地域住民が主体となって実施されており、この活動目的は「ちょっと寄り道…こころとからだが軽くなる場所」とされている。主な活動内容は、週 1 回(月曜日の午前中･2 時間 30 分程度)千歳町の住民が集まり(現在の参加者は、高齢者が中心)、体操をしたり、お茶を飲んだり、レクリエーション等を行っている。

この取組を通して、本学学生は、本学の学修サイクルである①体験交流活動、②住民のニーズに応じた課題解決に必要な知識の習得、③ステークホルダーとの協働による課題解決型学習を実施し、今後、専門職として住民主体での自立・自律した地域活動をどのように支えていくべきなのかを学修している。また参加者には、この活動が地域での「居場所づくり」としてより発展できるよう、域学協働で機能訓練や認知症予防等の取組とともに、参加者の新たな可能性を広げるような企画を提供している。

2016 年度、「域学共創」（地域住民と大学が共に地域（地域づくり）を創造していくこと）を目指し、参加者とともに活動を行ってきた。そこで、これまでの学生主体の取組みから、参加者とともに考える、計画する、運営・活動する、創造することを意識した活動を行った。具体的な取組みとして、これまでの活動のサポートや反省会に加え、事前打ち合わせや活動スタッフと学生によるワークショップなどを行った。

また今年度は、「参加者のニーズ」に応える取組を中心にサポートしてきた。スタッフから、季節に応じたイベントを 1 ヵ月に 1 回は開催したいという希望があり、下記の内容の取組を実践してきた。

※企画運営…運営委員会との話し合い後、学生が企画を考え、スタッフとともに運営を行った。
※運営補助…運営委員会との話し合い後、運営スタッフが企画を行い、当日はスタッフのサポートを行った。

12

12 月 19 日　ひょうたん・千歳幼稚園合同クリスマス会（企画運営・運営補助）

1

1 月 30 日　節分をテーマにしたイベント（運営補助）

2

2 月 13 日　バレンタインをテーマにしたイベント(企画運営)

3

3 月 6 日　4 年生の卒業記念会（企画運営・運営補助）

4

4 月 3 日　学童保育と合同の花見大会（企画運営）

5

5 月 16 日　楽らく広場「ひょうたん」1 周年記念（運営補助）

6

6 月 13 日　楽らく広場「ひょうたん」運動会（運営補助）

7

7 月 4 日　七夕会（運営補助）

7

7 月 25 日　学童保育（幼稚園児）と合同での手作りのけん玉づくり（企画運営）

9

9 月 15 日　日本文理大学見学研修会（楽らく広場スタッフと本学学生）

10

10 月 24 日　ハロウィンをテーマにしたレクリエーション（企画運営）

11

11 月 14 日　勤労感謝の日をテーマにしたイベント(企画運営)

これまで楽らく広場ひょうたんの活動サポートは、一方的に学生がイベントを企画し、運営してきたわけではなく、スタッフもしくは参加者全員で協力しながら実行してきた。また、この活動では参加者が学生とイベントの内容を共有するのみではなく、その目的やその効果についても共有しながら活動を進めてきた。そこで今後は、これまでの活動を豊後大野市及び千歳町の地域内での活動等にも活かしていく、または、地域住民の方々にも活かしてもらうことで、地域内での互助（地域住民どうしの助け合い・支えあい）や交流（世代間・地域間）にもつなげていくことができればと考えている。

この活動を通して、参加者の方々が自ら、生きがいや地域貢献・役割の創出ができるような仕掛けづくりを考え、実行するとともに、地域住民主体の自律・自立した活動としてより発展するよう、今後も活動サポートを展開していきたい。

日本文理大学COC事業
おおいた、つくりびと

Data Created: 14 May 2017
Copyright 2017 Nippon Bunri University

総合型地域スポーツクラブの認知度を高めるための イベント運営を通した地域参画と教育実践活動

~OZAI 元気クラブとの連携プロジェクト ~

堀 仁史（経営経済）、学生代表：玉城 和志
受講生：ゼミナールⅣ(14 名)、Ⅲ(16 名)、Ⅱ(14 名)、2016 年度卒業ゼミナール生（13 名）
（プロジェクト実施期間：2015 年度～継続中）

大分市大在地区は新興住宅地として発展し、少子高齢化社会において珍しく人口の急激な増加とともに児童数も増加している地区である。このような急激な環境の変化に伴う地域コミュニティの希薄化が懸念される。また児童・生徒の身体活動は、心身の健全な発育のために重要であり、それらを通じて社会性の発達が期待できるとともに、小児期は健康のために良い運動習慣を定着させる重要な時期でもある。しかし、各種調査報告では、テレビゲームなどの非活動的余暇時間の増加などにより、生徒・児童の身体活動量は低下傾向にあり、また運動を実施する児童・生徒と、しない児童・生徒の二極化も問題点として挙げられている。このような社会環境の中で、総合型地域スポーツクラブは、運動や文化的な活動を通した地域コミュニティの構築や、地域活性化への貢献が期待されており、地域住民が主体的に地域のスポーツ環境を形成する「新しい公共」環境の構築を目指している。

本学が位置する大在地区には、総合型地域スポーツクラブとしての OZAI 元気クラブが存在している。本プロジェクトでは、OZAI 元気クラブの運営・企画に参画・協力することで地域活性化に一助し、参画する学生が将来の地域創生に貢献できる人材と成長することを目的に実施している。

総合型地域スポーツクラブとは、人々が身近な地域でスポーツに親しむことのできる新しいタイプのスポーツクラブで、
（1）多世代：子どもから高齢者まで、（2）多種目：様々なスポーツを愛好する人々が、
（3）多志向：初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できるという特徴を持もっている。その 1 つである OZAI 元気クラブ（大分市大在地区）は、普段非活動的な人（子どもから高齢者まで）に、運動や文化的活動を行う場面（時間・空間・仲間）を提供することを目的に、2011 年 3 月設立（会員数 197 名）され、健康体操やサッカーなど、様々な教室が地域内で実施されている。

大在地区の特徴としては、他の大分市地域と比べて、新興住宅地として発展しているため年少人口の割合が高いことから、スポーツクラブへの年少人口の会員数の増加を目標に、小学生を対象とした特徴のある教室の企画･運営について、スポーツビジネスの観点から、また NSCA 認定校カリキュラムの特徴をいかした協力を行っている。

【2016 年度の企画・運営協力】

2016 年　8 月 29 日 (土)	かけっこ教室　(※ 指導協力：NBU 陸上競技部)
2016 年 10 月 29 日 (土)	大在西小学校 PTA 主催 サンサンカーニバル ドッチビーコーナー指導担当
2016 年 12 月　4 日 (日)	OZAI 元気祭り　レクリエーション担当
2017 年　2 月 19 日（日）	わくわくレクリエーション

※「わくわくレクリエーション」では隣接する坂ノ市地区の 3 小学校（坂ノ市、小佐井、丹生）にもチラシを配布して参加募集を行った。

「かけっこ教室」
小学生と未就学児童を含む21名の子どもたちと、その保護者の参加があり、昨年に引き続き非常に好評であった。

「わくわくレクリエーション」
（2015年度は「チャレンジ・ザ・ゲーム」）
小学生と未就学児童を含む23名の子どもたちと、その保護者６名と、2015年度に比べて参加人数が大幅に増加した。
※ちなみに坂ノ市地区からの参加者は１名であった。

「OZAI 元気まつり」
サポートスタッフとして参加し、「わなげ・RDチャレンジ・ヒューストン・スカットボール」の４種類のレクリエーションを実施。参加した児童からは「4つ全部、激楽しかった」との声も。餅つき、抽選会など、参加者全員で楽しんだ。

昨年度､本活動の検証として大在地区小学校の保護者を対象にアンケート調査を行った（回答者数:1082 名)。「総合型地域スポーツクラブ」の認知度（知っている、聞いたことがある）が 28%であったのに対して、「OZAI 元気クラブ」の認知度は 81%であった。しかし「OZAI 元気クラブの活動内容」についての認知度は 47%であり、新規クラブ会員の獲得には至っていない。次に教室・イベント活動内容に対する「保護者の参加意向」の傾向として、「家族で取り組める内容」が最も人気が高く、年齢が高くなるに従って「健康増進」型の教室に関心が高まることが明らかとなった。一方で児童は学年による差はなく｢運動技能･能力を高める内容｣と｢レクリエーションや楽しめる内容｣に関心が高かった。今後､本活動は｢クラブの認知度｣を高める目的から､｢クラブへの理解｣を深めることや「会員獲得」につながる活動（イベントやプロモーション）への進化する必要があり、学生の若くて斬新な発想が求められている。

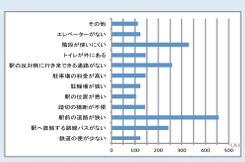
Data Created: 14 May 2017
Copyright 2017 Nippon Bunri University

中判田駅を中心としたまちづくりプロジェクト

廣田 篤彦、近藤 正一（建築学科）
2014 年度卒研生：５名、2106 年度卒研生：３名、2017 年度卒研生：６名
（プロジェクト実施期間：2013 年度～継続中）

大分県大分市の JR 中判田駅は、2014 年（平成 26 年）に開業 100 周年を迎えた。大分駅とともに、別府～人吉・熊本 間を通る特急列車（*）が停車する市内有数の駅として、1954 年（昭和 29 年）には１日で約 3,000 人を超える利用者があったが、2012 年度（平成 24 年度）の１日あたりの平均乗降者数は 1,014 人まで減少している。その間、駅施設そのものの利便性、駅へのアクセス、駅周辺の安全性・バリアフリーデザインへの対応がほとんどなされておらず、この度、地域住民の方々と協力し、中判田駅を中心とした判田地区らしい魅力あるまちづくりに資する計画とデザインの提案をさせていただく取り組みを開始した。今回は、これまでに実施した７件の活動について報告する。　（＊：熊本地震のため、2017 年５月現在、九州横断特急は大分～阿蘇 間の運行となっている。）

取り組み内容（１）：新原 健太・大森 隆太朗（2014 年度卒研）
「駅の利用状況・施設改善についての利用実態調査・アンケート調査」
判田地区に在住している方々を対象としたアンケート調査を実施した。調査の結果、利用者の半分が大分南高校の生徒であり、さらにそのおよそ半分の生徒が踏切のない線路を横断して通学しており危険な状況であることが分かった。また、駅を利用して不便に感じることとして、駅前の道路が狭い、プラットフォームへの階段が使いにくいといった指摘が多く挙げられた。

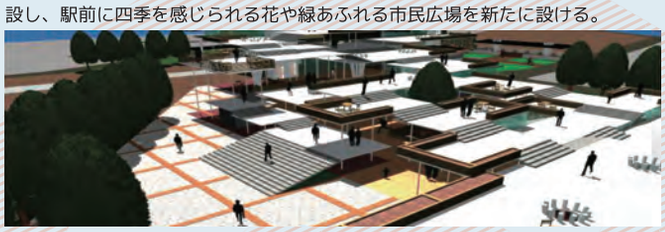


中判田駅を利用して不便に感じること

踏切のない危険な横断箇所

取り組み内容（２）：廣瀬 沙紀（2014 年度卒研）
「カコヲカコウ」 ～保存と再生を繰り返し人々の暮らしをつなげる～
既存の建物を囲い、その外側に新しい建物をつくっていく設計手法により、保存と再生、過去→現在→未来へとつなげていく建築の在り方について考察した。

取り組み内容（３）：鶴岡 康平・中村 洲平（2014 年度卒研）
「rising town」 ～四季を感じる憩いの場所～
駅周辺の安全性向上のため、現在の駅北側からのメインアプローチを東側へ移設し、駅前に四季を感じられる花や緑あふれる市民広場を新たに設ける。



取り組み内容（４）：太田 里奈（2016 年度卒研）
「風景を魅せる駅」 ～地域に賑わいを生み出す～
判田地区の様々な魅力を引き出す「展望レストラン」や「マウンテンビューデッキ」などの４つの機能を空間化した。まずは中判田駅に賑わいを創出し、それをさらに駅からまちへと広げていこうとする提案。

取り組み内容（５）：那賀 美咲（2016 年度卒研）
「日本一のいやし駅」 ～ゆらぎのある場所～
駅周辺のアプローチを楽しむ回遊庭園型の駅である。木漏れ日などをイメージした「ゆらぎ」、花や木々の色どりや、竹工芸のアーケード、足湯による「いやし」をテーマとした。

取り組み内容（６）：齋藤・簗瀬・阿南・赤澤・伊藤・新堀
（2016 年度３年ゼミ）「まちを復活させるプロジェクト」
～橋とロープウェイがつなぐ中判田駅とまちの未来～
パークプレイスやスポーツ公園とつながるバスターミナル、若者がつながる「星見る公園」、過去と未来をつなぐ「天空の庭」など、「つながり」のイメージを形にした。

大学生観光まちづくりコンテスト 2016「クリエイティブ賞」受賞作品

取り組み内容（７）：松下 萌絵（2016 年度卒研）
「中判田フィーリングステーション」 ～五感を刺激し街並みを堪能できる森の中に建つ駅～
（テーマ１）「森の中の駅舎と市民広場」：駅周辺の森林を公園として整備し、駅舎と市民広場をその中に設けることで、市民が自然と身近に触れ合うことのできる環境を演出した。（テーマ２）「サイクリングによる観光案内」：中判田駅から戸次本町までの間を巡るサイクリングコースを設定し、美しい風景と伝統的なまちなみを堪能できる観光案内の実施を提案した。（テーマ３）「五感を刺激する空間デザイン」：ユニバーサルデザインの観点から、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感すべてによって空間を感じ取ることのできる案内性の高い駅を設計した。

判田地区の方々にご協力いただいたアンケート調査の結果、中判田駅および周辺のまちづくりを改善することにより、周辺地域の安全性が向上するのみならず、駅の利用者が大幅に増加する可能性のあることが明らかになった。また、パークプレイスや大分スポーツ公園の最寄り駅であることから、ラグビーワールドカップ 2019 に向けてバスターミナルを整備することで買い物・レジャー層の利用の増加を図ることができ、さらにレンタサイクルやサイクリングロードによる観光拠点としての機能強化につなげられるなど、課題の整理と具体的な計画案をもとに地域の方々との意見交換を積み上げてきた。今後は、さらに現実的で実効性の高い提案を制作し、大分市民の誇りとなり長く愛される中判田駅の実現につながる活動へと発展させていきたい。

担当した学生：新原 健太、大森 隆太朗、廣瀬 沙紀、鶴岡 康平、中村 洲平、太田 里奈、那賀 美咲、齋藤 佑己、簗瀬 陸、阿南 朗、赤澤 大輝、伊藤 彩希、新堀 悠平、松下 萌絵（掲載順）

日本文理大学COC事業
おおいた、つくりびと

Data Created: 14 May 2017
Copyright 2017 Nippon Bunri University

学生の視点で捉えた豊後大野の魅力

～豊後大野市の地域資源を活用したサービスラーニング科目への展開～

今西 衞（経営経済学科）、舛田 佳弘（経営経済学科）、市田 秀樹（COC 事業担当）
受講生：経営経済学科 2 年生 19 名、経営経済学科 1 年 27 名
(プロジェクト実施期間：2015 年度～継続中）

大分県は「日本一のおんせん県おおいた」を標榜するなど、日本でも有数の温泉地であり観光資源には恵まれている。しかし、豊後大野市は県内で温泉がない数少ない自治体の一つであり、産業も第 1 次産業が中心で、高齢化率が非常に高い。一方で、豊後大野市には、原尻の滝をはじめとするジオパークなどの地域資源が数多く存在するが、これらが顕在化されておらず有効な地域観光資源となっていない。ジオパークを中心とした地域資源を活用し、継続的な事業を行える地域観光サービス人材の育成が求められている。

日本文理大学経営経済学科では、平成 27 年度より地域マネジメントコースを新設した。本コースは、地域資源観光に経営の概念を取り入れ、地域が顕在的・潜在的にもつ魅力を観光資源として発掘・利活用し、まちづくりマーケティングによって観光サービスを持続可能な事業へとプロデュースし実践する能力を備えた人材の育成を目指している。

そこで、2015 年度よりサービスラーニング IA、IB（1 年次開講科目）および、平成 28 年度よりサービスラーニング II（2 年次開講科目）を通じて、豊後大野市を視察したり、ヒアリングを行うことで豊後大野の観光における地域資源の魅力の発見や現状、課題を議論するなどし、学生おすすめのツアープランを提案したり、食と豊肥本線を主軸とした豊後大野の魅力を伝えるプロモーション活動を行ってきた。

2015 年度は学生 14 名が 8 月豊後大野市の観光地や道の駅などを訪問・取材し、地域が顕在的・潜在的にもつ魅力に触れ、観光資源として利活用できるかをグループワークによるポスター作製やディベートなどを行った。この活動を踏まえ、学生自身でツアープランを立て、実際にそのプランを体験し、プランの課題を挙げ、再度、ツアープランを練り直し、プランを体験するという反復活動を行うことで、ツアーの評価と課題解決の能力を身につけてもらった。

学生らはツアープランを組み立てていく中で、豊後大野市の道路は狭く、カーナビも対応していない箇所が多いため、JR 豊肥本線で豊後大野まで訪れ、コミュニティバスなど公共交通機関を併用することで、公共交通の維持、活性化につながるなどのアイデアも出された。

そんな矢先、2016 年 4 月に発生した熊本（大分）地震により、ＪＲ豊肥本線は大打撃をうけた。このような背景から、本プロジェクトは、地震の復旧、復興の過程で、顕在化されていないＪＲ豊肥本線沿線の観光価値について再検証し、再認識することで、豊後大野市の地域活性化、ＪＲ豊肥本線の活性化につなげていく方針へと進むこととなった。　豊肥本線に乗りながら豊後大野の魅力を探し、さらに、学生の視点で面白いと思った場所を iPad やスマートフォンで写真や動画に収め、最終的に豊後大野のプロモーションビデオ、ポスター、パンフレットを作成した。

以上の内容は、2016 年 11 月 19 日ものがたり観光行動学会（日本文理大学他主催）にて学生による研究発表を行った。その他、大分市にある「ぶんご大野 bureau 大地の物語」で、映像、ポスターの展示も行っている。さらに、大学生観光まちづくりコンテスト 2016 の予選を通過し、成果発表を行った。

議論だけでなく、写真や動画撮影といった活動から、映画の一場面を再現したり、地元の方から歴史について聞いて、実際にその場所へ行ってみたり、鉄道写真家のような写真を撮ってみたり、徒歩や自転車でないと気付かないものを発見したり車窓の風景の変化を動画に撮ったりして、新たな気づきが見られた。

当初は控えめであった学生も豊後大野を何度も行き来するうち積極的に関わるようになり、豊後大野に対する意識やプロジェクトに対する責任感、豊後大野が抱える顕在的･潜在的な問題に対してどのように解決すべきかを真剣に考え､動画などの成果物として現れたことは大きな成果である。学生はツアープラン、PR 動画、ポスター、パンフレットなどの作成や実施、地域の魅力を引き出すことの難しさを実感してもらった。同時に、成果報告会などを通して、豊後大野の方々に「豊後大野には潜在的な観光資源がある」という強烈なメッセージを伝えることができた。駅を降りて駅周辺を散策することで、その地域の滞在時間を増やし、地域の人とふれあうことこそが、豊肥本線が開通して 100 年という節目にふさわしい地域活性化における既存のローカル線を使った観光であり、これからの地域活性や鉄道旅客の確保といった課題解決のあり方であろう。これからの学生の活躍にご期待ください。

日本文理大学COC事業
おおいた､つくりびと

Data Created: 14 May 2017
Copyright 2017 Nippon Bunri University

情報通信端末を活用した地域コミュニティーの安全・安心づくり
～大分市木佐上地区での高齢者 IT 教室～

情報メディア学科 福島研究室
福島 学（情報メディア学科）、市田 秀樹（COC 事業担当）
（プロジェクト実施期間：2015 年～継続中）

高齢化社会の中で、安全・安心なくらしや、コミュニティの維持など、様々な生活の場面において情報端末の役割が注目されている。スマートフォンやタブレット端末などに搭載されている『情報バリアフリー』と呼ばれている『文字通信』や『音声読み上げ』などは、高齢者にとっては非常に有用な機能であるが、端末の初期状態ではその機能が付加的なものになっているため、使ってみないと分からない機能が多く、普段の生活ではなかなか使われていない。しかしながら、高齢者層には、情報端末に対する潜在需要はあり、「孫と気軽にテレビ電話で今日一日のことを話せる」、「簡単な操作で血圧や脈、体温などが介護センターに送られ、健康管理してくれる」、「服用する薬の管理」、「災害時に自動的に立ち上がり、自分の場所に適した災害・避難情報を届けてくれる」、「市役所や銀行に行かなくても、年金や保険料などの手続きや振り込み支払ができる」(総務省、情報通信白書平成24年度版より)などがある。その一方で、「使い方が難しい」「設定が大変」など、活用のサポートをするための人材が身近に不足している点など、まだまだ普及にあたっては障壁が高い。
そこで、まずは、その機能の使い方を知ることで、安全・安心なくらしに役立つ便利な情報端末としての理解を深めていただくために、少子高齢化が進む大分市木佐上地区にて高齢者向けの IT 講習会を実施している。

木佐上高齢者 IT 教室は、木佐上連合区および木佐上コミュニティーの協力を得ながら、実施している。

木佐上高齢者 IT 教室

1 2016 年 3 月 1 日

2 2016 年 6 月 1 日

3 2016 年 8 月 2 6 日

のべ参加者数 35 名（小学生 4 名含む）

2016 年 3 月からこれまでに 3 回、木佐上高齢者 IT 教室開催した。講習会では、「ちょっと使ってみたいという方」、「買う前に試してみたいという方」、「既に購入はしているが操作の仕方が分からなく困っている方」、「チャレンジしたいけどちょっと怖いから誰かので試してという方」、「一人ではなかなか難しいけど、参加者の皆さんと一緒ならという方」など、にタブレット端末（iPad）を使って頂き、普段の日常で使える機能を紹介しながら、実際にタブレット端末を楽しみながら操作してもらうことを講習会の内容とした。

新聞を読んだり、孫へのプレゼントを探す時に「紙面や広告などの小さい文字」を見るのに使う「ルーペ（カメラのを使っての拡大機能）」としてタブレットが使えることと、そのままメモとして記録（イメージとして保存）できることを体験する。風景を撮るだけでなく、身近なモノを記録するモノとして使う。

LINE などの SNS アプリケーションを使うと、メモした写真だけでなく、今どこに居るか、音声メッセージ、さらには通話までできることを体験する。情報としての文字を送るだけでなく、LINE の機能であるスタンプを送ったりすることで、会話する文字へと変化することを体験する。

インターネットへの窓口であるタブレットで「世界地図」にアクセスすると様々な場所の３D 写真を見ることを体験する。タブレットの種類によっては「タブレットを見たい方向に向ける」と「その方向の写真が見える」で、行きたかったその場所に行った様な疑似体験をする。

今回の講習会を通して、購入したものの「どう使えばいいの？」や「何かあったら。。。」という理由で、使われなかったケースや、「孫との連絡で使ってみたい」などの具体的な使用方法、情報端末を使いこなすためや地域のコミュニティー活動の維持のためにも「定期的な講習会の実施」を期待されるなど、情報端末をくらしの中で活用していきたいという地域のニーズを掴むことができた。
また、参加者の方には、地域の情報が地図でいろいろ出ていることを見ていただけること、自分達でも地域の情報を登録し発信できることなども紹介している。まだ、参加者の個人としての発信には至っていないが、地域コミュニティの形成と多くの方々にその魅力を知っていただく機会を作っていく。その結果として、地域コミュニティのくらしの安全・安心づくりに繋がるように、講習会の内容などを工夫しながら展開していく。

Data Created: 14 May 2017
Copyright 2017 Nippon Bunri University

日本文理大学COC事業
おおいた、つくりびと

~ 工学部専門基礎科目『ロボットプロジェクト』~

「地域に生きるものづくり」
~ 地域を感じることから始まるものづくり ~

川崎 敏之、稲川 直裕、筑紫 彰太（機械電気工学科）、岡崎覚万、室園 昌彦（航空宇宙工学科）、
福島 学（情報メディア学科）、市田 秀樹（COC 事業担当）

受講生：2015 年度 74 名、2016 年度 38 名 （プロジェクト活動期間：2015 年度～継続中）

日本の現状を取り巻く社会において、働き方の変化や人口減少に伴う少子高齢化など、さまざまな社会問題が、日々、取り上げられている。これらの問題に向き合いながら、将来の社会が持続的に豊かになっていくためには、社会構造の変化だけをみるのではなく、暮らしそのものの変化を考える事も必要である。そのなかでも、特に、高齢化にともなう医療福祉問題、労働人口の減少による産業構造の変化や生産の効率化などの分野においては、それらを支えていくための「もの」が必要となってくる。そこで、「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、自由な発想をもって創造的に問題解決に取り組める人材を育成するためのプロジェクト型の教育プログラム作りを目指す。

このプロジェクトでは、「地域に生きるものづくり」をテーマとして、学生自らが地域（大分市木佐上地区）に出て、現地の現状を自分たちの目で見て、肌で感じ、そこからさまざまな社会問題と関連する課題を発見する事からはじめる。その後、課題解決に必要だと考える「もの」について、自由な発想をもって考え、それをカタチにすること（プロトタイピング）を実践していく。このプロセスを通して、「ものづくり」と社会との接続について考えることで、将来の社会を支えるための「ものづくり」について考える力を養うことを目指す。

現代の社会において、潜在化している課題を発見し、それを創造力をもって解決する力が求められている。潜在的な課題を発見する 1 つの方法は、課題を共有している人々や周囲の状況に共感することである。専門基礎科目『ロボットプロジェクト入門２』（1 年生後期科目、工学部 機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科 ）では、課題を発見する力を身に付けることに重きを置き、地域活動を含む形での「課題抽出 / 発見」→「問題定義 / 課題設定」のプロセスを重要視している。「課題抽出 / 発見」のプロセスにおいては、少子高齢化の地域課題に直面している大分市木佐上地区を日本の縮図として捉え、地域の中で活動することで、多様な地域社会課題について学生自らが触れ・感じる機会をつくる。「地域を感じ・地域の声を聞き・地域を知る」ことで、その地域に潜在的に存在する課題を抽出することを授業前半で行い、後半では、その中で抽出された課題に対する解決手法の検討においては、創造性を大切にしながら、アイデアをカタチにするプロトタイピングを行う。プロトタイピングでは、3 学科それぞれの分野の学生の特徴が融合されるようにプログラムの設計を行った。全体のプログラムを通じて、「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、将来の社会を支えるための「ものづくり」について考える力を養うことを目指している。

1 地域を感じる

地域を訪れ、その状況を感じることで、地域の魅力や、問題点について自ら考えてみる。

2 地域の声を聞く

地域の住人の方に、地域の文化・伝統・歴史や、現在の状況についての話を聞く事で、地域への理解を深める。

3 地域を知る

地域の状況を観察することで、新たな発見や疑問点を見つけ、地域の特徴と地域特有の課題を考える。

『ロボットプロジェクト』科目を通して、
主体的に学ぶ力や、専門教育において必要な素養を
身に付けるとともに、創造的に問題解決する力を養う。

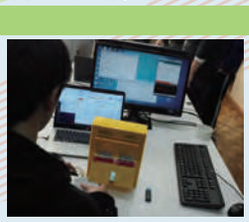
※「シカケプロジェクトは、ロボットプロジェクト基礎２の１コースとして実施。

4 問題定義・課題設定

「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、様々な社会問題と関連する課題を発見する。

5 プロトタイピング

課題解決のための「もの」について自由な発想をもって創造し、そのアイデアをカタチにする。



2016 年度は、最終報告会を木佐上コミュニティーセンターにて行い、全 7 チームが、自ら考えたアイデアについて報告を行い、獣害対策や高齢者向けの見守りや安全・安心のためのデバイスなど、IoT（Internet of Things）や ICT などを取り入れた学生目線でのアイデアが多く出た（本コースは、2015 年度から開始しており、初年度は 12 チームが参加している）。地域住民からは、若者が地域課題に取り組む事への期待、活動の継続性、一部のアイデアに対しては実際に使えるモノにして欲しいなど、具体的なアイデアに対する期待する声が多かった。今後は、実際に地域で使ってもらえるモノを創り出せるように、さまざまな工夫を取り入れながら、「ロボットプロジェクト」全体として、社会と連携しながら、「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、将来の社会を支えるための「ものづくり」について考える力を養うことを目指していく。

日本文理大学COC事業
おおいた、つくりびと

Data Created: 14 May 2017
Copyright 2017 Nippon Bunri University

防災用小型無人水中観測システムの研究開発

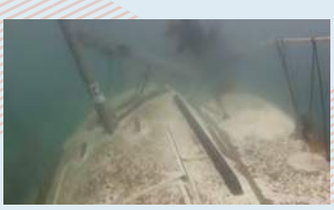
稲川 直裕（機械電気工学科）
参加学生：鶴野 瑞穂（機械電気工学科）他４名
（プロジェクト実施期間：2014 年度～継続中）

災害時等には、無人で緊急を要する水中観測が求められる場合があり、当研究室では高い機動性を備えた無人水中観測ロボットの研究開発を行っている。「実用性、運搬性、操縦性、低コスト」に特化した独自の機体を自作し、保有している事から、普段は環境観測やダム等のインフラ点検の為に試験運用を実施している。

本ロボットは、水中機本体、地上（船上）基地局、操縦桿、発電機から構成され、普通自動車 1 台で運搬が可能です。操縦者は、1-2 名体制で運用でき、強力な LED 照明を搭載している事から夜間や暗い場所でのでの運用も可能である。耐用水深は 50-100m を想定しており、操縦者は基地局のモニタ画面を見ながら、片手で操縦桿を持つ事により、水中で前後移動・左右水平移動・左右旋回・潜水浮上の自由な制御動作を実現できると同時に、高画質動画撮影を実施する事が出来る機能を有している。平成 26 年度および平成 27 年度は国土交通省次世代社会インフラロボット「現場検証対象技術（水中維持管理部門）」に採択され、ダムに於けるインフラ点検の為の実証実験を実施しました。その他、大在埠頭での護岸・水底観測実験や大分県内ダムでの試験的な観測実験を重ねており、自治体へ観測データの提供を行っています。また､学生の教育研究の視点から沖縄海洋ロボットコンテストへ出場し､平成 28 年度｢沖縄海洋ロボットコンテスト｣では｢最優秀賞｣を獲得した。

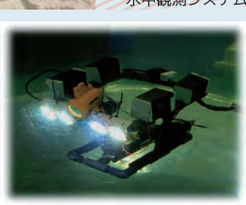
東日本大震災では、津波による膨大ながれきが、海底に沈み、環境にも深刻な影響を与えています。災害時等には、高い機動性を備えた無人水中観測システムが求められており、本研究では「実用性、運搬性、操縦性、低コスト」に特化した小型無人水中観測システムに関する研究開発に取り組んでいる。

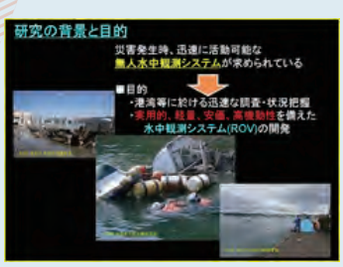
「小型無人水中観測システムの構成」
重量約 3kg、水深 50~100m まで観測可能。



◀大在埠頭での沈没船の観測
（水中カメラからの映像）。

▼豊後大野市「稲積水中鍾乳洞」での水中観測の様子。
水中観測システムにより「底なしの渕」の底を観測。





本研究の目的と背景

水中観測システムの開発コンセプト

構造の特徴

水中観測システムの構成要素

防災用途を目的として始まった本ロボットの開発技術は、数々の実証実験の蓄積により、地元自治体からのニーズを受けて環境観測やインフラ点検にも用途が広がってきた。これらは既存品や既存技術をそのまま購入する事無く、独自の手作り技術に一貫して拘ってきたからこそ、応用の転換が円滑にできた事の証である。普段は環境観測やインフラ点検等に活用し、有事の際には機動性の高い防災観測をも実施する事が出来るこの技術は、必要不可欠である。

「大分協同ものづくり展･大分市工業展」で好評の「府内城水中探検イベント」や地元小学校での水中ロボット操縦体験授業を通じて本物の「ものづくり」の大切さを伝える技術啓蒙も重要な教育研究の一つとして今後も展開する。

【謝辞】本研究は、2014、2015 年度　国土交通省次世代インフラ用ロボット「現場検証技術」のもと、長崎大学・北九州市立大学・ニッスイマリン工業株式会社との共同で実施されたものである。

日本文理大学COC事業
おおいた､つくりびと

Data Created: 14 May 2017
Copyright 2017 Nippon Bunri University

~ 工学部専門基礎科目『ロボットプロジェクト』~

「シカケ」からみえてくる地域課題 シカケプロジェクト

市田秀樹（COC 事業担当）、福島学（情報メディア学科）、筑紫彰太（機械電気学科）、
今西衞（経営経済学科）

受講生：2016 年度 8 名　（プロジェクト活動期間：2016 年度～継続中）

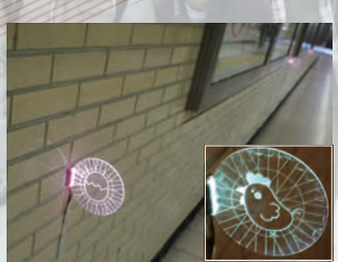
「シカケ」とは、人の何気ない意識や行動にさりげなく、心理的・物理的にアプローチすることで、人の行動の選択肢を増やすものである。その行動変容によって問題解決を実現することを目指す。

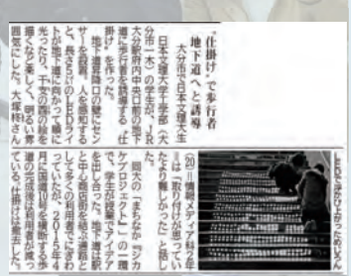
シカケプロジェクトは、世の中に溢れている「シカケ」をテーマに、シカケを実現する「モノ」が果たす役割（モノのデザイン）について考え、実際にシカケをつくる事で、社会課題の解決にアプローチする。つまり、モノが持つ機能によって課題を解決するのではなく、モノによって人の行動変容が誘発されることによって社会課題を解決を目指す。

プロジェクトでは、特に人とモノとのインタラクションに着目し、人の行動によってシカケが引き起こされ、それが人の行動にフィードバックされることによって人の意識や行動を変化させる事をねらっている。具体的には、人が起こす行動をセンサー等で感知し、その信号をもとにシカケが働き、シカケが働くことによって、人の意識や行動変化のトリガーとなることを目指す。この要素技術は、現代社会において、ロボット技術などの基礎的な部分を含んでいるため、工学部専門基礎科目『ロボットプロジェクト基礎 2 』（機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科の 3 学科合同での 2 年次開講科目）のコースとして実施した。

2016 年度は、シカケのテーマとして、大分市中心部の人の回遊性に着目し、地下通路の立地条件と歩行者の経路選択性の関係に対してシカケを行った。場所は、大分駅前北側の国道 10 号線の地下道をターゲットとした。この地下通路は、以前は、国道 10 号線を横断するための動線として使われていたが、大分駅前広場の改良にともない、地上部の横断歩道が設置され、平面通行が可能となったため、地下通路を経路選択する上で大きな変化が起こった場所である。そこで地下通路の入り口、通路内、出口階段付近にシカケを設置して、歩行者の経路選択性がどのように変化するのかを狙った。

プロジェクトは、(1) シカケについての基礎知識や情報収集・現地調査、(2) シカケの考案、(3) プロトタイピングを行うための要素技術 (3D プリンタやレーザーカッターなどのデジタルファブリケーションや、マイコンや FPGA などの組み込み技術) の習得、(4) シカケの製作と学内設備でのテスト（プロトタイピング）、(4) 現地での実証実験、という流れで行った。歩行者の経路選択性については、通行人の交通量調査から効果検証を行っている（詳細は今後）。





「仕掛け」で歩行者
地下道へと誘導
大分市内の日本文理大生

日本文理大学（大分市）の学生が、「大分駅前中央口前の地下道に歩行者を誘導する『仕掛け』を作った。

同大の「まちなか『シカケ』プロジェクト」の一環で、学生が授業でアイデアを出し合った。地下道は駅と中心商店街を結ぶ通路として多くの利用者でにぎわっていたが、2015年4月に国道10号を横断する歩道の完成後は利用者が減っている。仕掛けは撤去した。

2016 年度のシカケプロジェクトでは、地下通路の有効活用のために、地下通路への人の流動性を高めるシカケを実施した。実際にシカケたモノに興味を持ってくれる通行人もいた。モノによって人の意識・行動変化を引き起こす「シカケ」について、工学的な視点から今後も取り組み、「モノ」と「人」の関係性について、ものづくりを通して考えていく。今後のその効果検証について、他分野の教員や学外との連携によって行っていく。

学生自身が、社会の中に潜在的に存在する課題に気づき、その解決に向けて考案し製作したシカケが、人の行動変容が誘発し、それによって社会課題の解決の取り組みの一例になるようなテーマ（問い）の設定を、さまざまな関係者の協力を得ながら行い、学生の好奇心を引き出すプロジェクトとして実施し展開していく。2017 年度のシカケプロジェクトでは、どのような「シカケ」が登場するか、ご期待下さい。

日本文理大学COC事業
おおいた、つくりびと

Data Created: 14 May 2017
Copyright 2017 Nippon Bunri University

産官学民医連携による

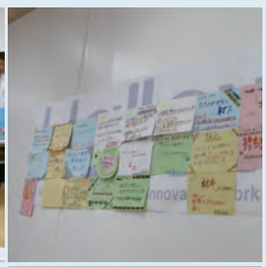
生きがいのあるくらしをつくる オープンイノベーションワークショップ

市田 秀樹（COC 事業担当）、池畑 義人（産官学民連携推進センター）

参加者：68 名

（プロジェクト実施期間：2016 年～継続中）

68
Participants



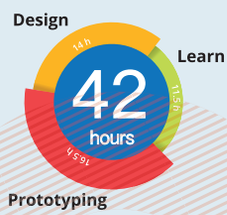
日本文理大学、
大分県立芸術文化短期大学、
大分県立看護科学大学、
大分リハビリテーション病院、
行政、ものづくり企業、市民など
様々な機関・セクターから参加

Learn
Empathize
Design
Prototyping

10
Workshops

4 type workshop
- ✓ Design WS
- ✓ Healthcare Hackathon
- ✓ Ideathon
- ✓ Project Making

Hallow
Happiness Long Life
Open-innovation
Workshop



34
Ideas

9
Projects

Data Created: 14 May 2017
Copyright 2017 Nippon Bunri University

日本文理大学COC事業
おおいた、つくりびと

Hallow | Happiness Long Life Open-innovation Workshop

NIPPON BUNRI 50th UNIVERSITY

これまで人のくらしは、モノに寄って支えられ、モノの進化によって豊かになってきた。しかしながら、大量生産・消費の今日の社会においては、企業利益主導型のくらしの形態が構成されており、一人ひとりのくらしの多様性は、ある部分で置き去りにされている。このような状況の中で、２１世紀を迎えた日本では、超高齢化・人口減少等の社会構造の変化を受けて、一人ひとりの多様性を尊重することの重要性が強く認識され、くらしの在り方についてそれぞれの立場で一人ひとりが考えていく必要性に迫られている。

プロジェクト型ワークショップ『Hallow』では、学生、大学関係者、医療機関、企業、自治体など様々なセクターのメンバーが集まり、対話とものづくりを通して、社会課題の解決に取り組む。テーマとしては、今後の超高齢化社会の中で必要とされる「モノ」に焦点をあてる。特に、くらしを支える「モノ」として、具体的には介護・医療・福祉に関わる器具・機器に着目する。現行のこれらの器具・機器は、カタチが画一的でサイズの選択制が少ないなど、必要とする人にとっては、使用する場面においてフラストレーションを抱える場面が存在する。そこで、それらを必要としている人が、豊かに自立した生活を送れることを目標に、ワークショップでは、解決すべき課題について考え、その解決に対するアイデアを創造しカタチにすることを実践している。

生きがいのあるくらしを創るオープンイノベーションワークショップ『Hallow (Happiness Long Life Open-innovation Workshop)』では、4 つのステップ（知る→共感する→デザインする→創る）から構成されるヘルスケアハッカソンやアイデアソンなどを通して、高齢者や介護を必要としている人々が豊かにくらすために必要なモノを創造し、くらしを支える「モノ」としての介護・医療・福祉に関わる器具・機器としてのアイデアをカタチにする。これまでにワークショップを通して、9 つのアイデアが生まれている。

【創る:Prototyping】
プロトタイピングを通してアイデアをカタチにし、対話を進めることで、創造的課題解決に向けた取り組みを行う。

【デザインする:Design】
共感することから得られた課題に対して、創造的に解決するために、様々な専門分野のメンバーやユーザーを巻き込みながらアイデアを検討する。

【知る:Learn】
デザインプロセス、インクルーシブデザイン、オープンイノベーションなど、今後の共創社会において課題解決にむけた取り組みに必要なデザイン手法について学ぶ。

【共感する:Empathize】
ユーザーの立場に立ち、共感する事から、課題の本質を探る。そのために、実際に体験をしたり、ユーザーの行動を観察する事を行う。

本ワークショップには、参画機関である 日本文理大学・大分県立芸術文化短期大学・大分県立看護科学大学・大分リハビリテーション病院の 4 機関の他に、ものづくり企業や自治体などの、様々な専門分野の構成員が参加している。また、参加層も、学生や若手の社会人、会社役員まで幅広く多岐にわたっている。このような多世代共創の場を形成し、その中で一つのテーマにもとづいて、参加者の対話をとおして、モノ作りまでをワークショップの期間を通して行っている。これまでに、2 期にわたるワークショップを実施し、9 つのプロジェクトを実施した。その中には、製品化の手前まで進んでいるアイデアなど、様々なステージのアイデアが創出されているが、本当に必要とする人に共感することから生まれてくるアイデアがほとんどである。今後は、ユーザーを取り込んだインクルーシブなものづくりが実現出来るようにワークショップを展開することを目指す。

日本文理大学COC事業
おおいた、つくりびと

Data Created: 14 May 2017
Copyright 2017 Nippon Bunri University

日本文理大学 COC 事業
おおいた、つくりびと
体感×感動×感謝

文部科学省
地(知)の拠点

文部科学省「地(知)の拠点整備事業（大学 COC 事業)」

NBU チャレンジ OITA
地域創生活動報告会 2018
in 豊後大野

2/21 水
入場無料・申込不要

後援：豊後大野市、豊後大野市教育委員会

・日 時：平成 30 年 2 月 21 日（水）**13:30 ～ 16:30**
・会 場：**豊後大野市役所本庁舎 2 階　中央公民館　視聴覚室・第 1 会議室**
（豊後大野市三重町市場 1200 番地）

プログラム　（13：00 受付開始 , 15：15~15：25 休憩 ）

13：30 ～ 13：40　あいさつ・趣旨説明
「日本文理大学 大学 COC 事業『おおいたつくりびと』での取り組み」学長室長 吉村充功

13：40 ～ 14：30　学生取り組み発表　(発表 7 分 / 質疑応答 3 分)
1．豊後大野市ふるさと体験村における建設マネジメント実習の取り組み（建築学科・3 年生）
2．豊後 DEN 説 2nd Generation　(経営経済学科・3 年生)
3．あそぼーいポストカードプロジェクト（経営経済学科・2 年生）
4．住民主体の地域活動について（経営経済学科・4 年生）
5．豊後大野市内の小中学生における社会的スキルの学校規模による比較と予防的心理教育プログラムの展開（経営経済学科・2,3,4 年生）

14：30 ～ 15：15　地域志向プロジェクト研究 / 教員取り組み発表　(発表 12 分 / 質疑応答 3 分)
1．地域資源を活用した地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究
今西 衛、本村裕之、工藤順一、舛田佳弘、山城興介 (経営経済学科)
2．学生の地域資源を活用した観光プロモーション活動におけるコースを横断した教育改革
本村裕之、今西 衛、山城興介、舛田佳弘、工藤順一 (経営経済学科)
3．高齢者向けものづくり教材の開発
鈴木秀男、松永多苗子、足立 元、星芝貴行（情報メディア学科）、稲川直裕（機械電気工学科）、平居孝之、濵永康仁（建築学科）

15：25 ～ 16：15　ポスターセッション
1．地域と学生の協働による豊後大野市ふるさと体験村「開村式」の運営（建築学科・3 年生）
2．豊後大野市大野町土師地区における「環境・地域創造演習」の取り組み（建築学科・3 年生）
3．豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ活動
（建築学科・1 年生）
4．「おおいた地域創生リーダー養成講座 2017 in 三重町」の取り組み
（建築学科・1、3 年）
5．豊後大野 PR 動画プロジェクト（経営経済学科・1 年生）
6．酒蔵巡りプロジェクト（経営経済学科・3 年生）
7．住民主体の地域活動の活動サポート
～豊後大野市楽らく広場ひょうたんを中心に～（経営経済学科・2 年生）

16：20 ～ 16：25　講評
16：25 ～ 16：30　おわりに（主催者お礼の言葉）

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNKI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL:　097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp

【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

日本文理大学 COC 事業
おおいた、つくりびと
体感×感動×感謝

文部科学省
地(知)の拠点

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学 COC 事業)」

NBU チャレンジ OITA
地域創生活動報告会 2018
in 佐賀関

2/25 日
入場無料・申込不要

後援：大分市、大分市教育委員会

・日 時：平成 30 年 2 月 25 日（日）**13:00 ～ 15:30**
・会 場：**佐賀関市民センター 1 階 集会室**（大分市佐賀関 1407 番地 27）

プログラム　（12：30 受付開始 , 14：10~14：20 休憩 ）

13：00 ～ 13：10　あいさつ・趣旨説明
「日本文理大学 大学 COC 事業『おおいたつくりびと』での取り組み」学長室長 吉村充功

13：10 ～ 13：50　学生取り組み発表　(発表 7 分 / 質疑応答 3 分)
1．交流人口拡大による佐賀関半島の活性化に関する研究（建築学科・4 年）
2．留学生料理教室による佐賀関の交流会（経営経済学科・3 年生、大学院環境情報学専攻・2 年生）
3．" 地域に生きるものづくり"　～ロボットプロジェクト入門 2　活動報告～『見守りスイッチ』
(機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科・1 年生)
4．「フューチャードリーム！ロボメカデザインコンペ 2017」への取り組みを通した地域課題への挑戦（情報メディア学科･3 年生）

13：50 ～ 14：10　地域志向プロジェクト研究発表　(発表 15 分 / 質疑応答 5 分)
1．地域経済を考慮した地域課題取組みに向けたプラットフォーム構築
福島 学、松永多苗子（情報メディア学科）、筑紫彰太（機械電気工学科）、今西 衛、本村裕之、山城興介（経営経済学科）、市田秀樹（大学ＣＯＣ事業担当）

14：20 ～ 15：10　ポスターセッション
1．大分市佐賀関・関地区における「環境・地域創造演習」の取組 （建築学科・3 年生）
2．佐賀関半島における地域体験交流活動研修「プロジェクト 1」の取り組み
（経営経済学科・1 年生）
3．大分市佐賀関・関地区の地域課題解決を目指す「さがのせきローカル
デザイン会議」の取り組み（建築学科・3、4 年生）
4．地域活性化プロジェクト「楽・楽マルシェ」での取り組み
（経営経済学科・2 年生）
5．地域住民主体の地域活動サポートについて（経営経済学科・2 年生）

15：20 ～ 15：25　講評

15：25 ～ 15：30　おわりに（主催者お礼の言葉）

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNKI UNIVERSITY
〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL:　097 - 592 - 1600(大代表）
Web : http://www.nbu.ac.jp

【COC事業担当】
TEL/FAX : 097 - 524 - 2663(直通）
Web : http://coc-nbu.jp
e-mail : coc@nbu.ac.jp

coc-nbu.jp

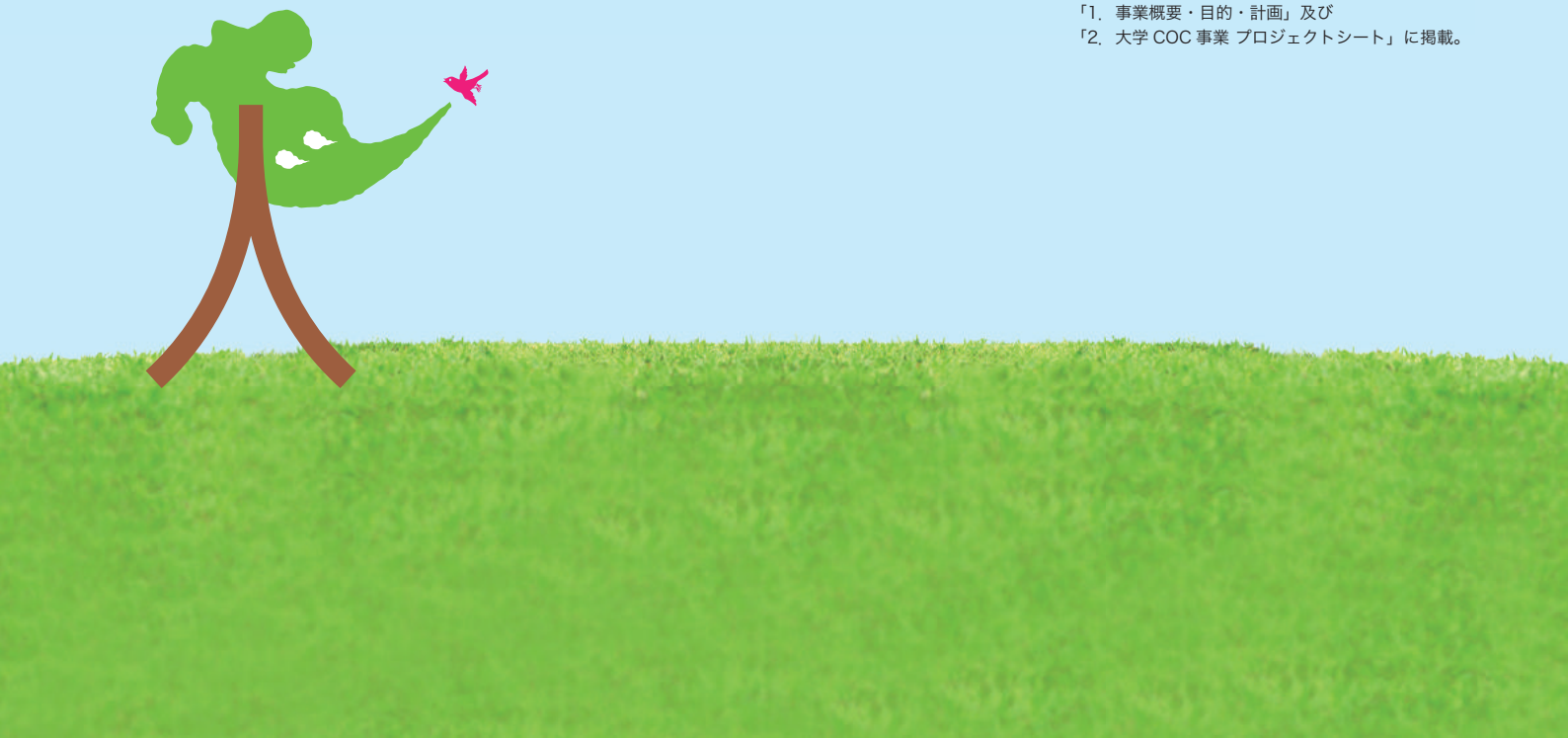
『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。
お金やモノだけでははかることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。
日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

5. 事業検討・評価委員会
連携推進会議

平成 28 年度 事業検討・評価委員会
平成 29 年度 連携推進会議
第 1 回連携推進会議（平成 29 年 7 月 5 日）
第 2 回連携推進会議（平成 29 年 11 月 29 日）

※主な各会議資料については、
「1. 事業概要・目的・計画」及び
「2. 大学 COC 事業 プロジェクトシート」に掲載。



日本文理大学　地（知）の拠点整備事業（大学ＣＯＣ事業）
事業検討・評価委員会の目的

日本文理大学は、文部科学省 平成 26 年度「地（知）の拠点整備事業」に採択された（事業名：豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成、事業期間：5 年）。

本大学 COC 事業の趣旨は、大学が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める「地域のための大学」として全学的な教育カリキュラム・教育組織の改革を行いながら、地域の課題（ニーズ）と大学の資源（シーズ）の効果的なマッチングによる地域の課題解決等の取組を進めることである。これにより、大学での学びを通して地域の課題等の認識を深め、解決に向けて主体的に行動できる人材（地域創生人材）を育成するとともに、大学のガバナンス改革を推進し、地域再生・活性化の拠点となる大学を形成することを目的としている。

本学の事業では、これまで実績を上げてきた産業界・地域社会を意識した実践活動を主体とした全学での人間力教育をベースとして、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」育成へと発展させ、これを地域との実践的協働活動により実現する。すなわち、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域力の向上につなげることを目的としている。

本事業の推進にあたっては、文部科学省の補助事業であること、また、地域の期待に応える社会的使命の大きな事業であるとの観点から、事業プログラムの実施状況や成果、年次計画等について定期的に全体的な検討・評価を行い、事業の効果的な実施と改善を図り、事業最終年度には設定した目標を達成する必要がある。そこで、上記目的を達成するため、外部委員を含めた本「事業検討・評価委員会」を設置し、毎年度末に委員会を開催することで、適切な PDCA サイクルの機能を担保することとする。

日本文理大学　地（知）の拠点整備事業　事業検討・評価委員会　運営ガイドライン

（趣旨）

1　このガイドラインは、日本文理大学（以下、「本学」という。） 地（知）の拠点整備事業（以下、「COC 事業」という。）の推進にあたり、外部委員を含めた「本学 COC 事業 事業検討・評価委員会（以下「本委員会」という。）」の運営に関し、基本的なルールを定めるものである。

（目的）

2　本委員会は、事業プログラムの実施状況や成果、年次計画等について、定期的に全体的な検討・評価を行い、事業の効果的な実施の確認と必要に応じた改善指示を行い、もって事業の適切な推進に寄与することを目的とする。

（議事進行）

3　本委員会の議事進行にあたる議長は、本学学長とする。

（開催時期）
4　本委員会は年間１回の開催とし、開催時期は毎年度末とする。

（委員）
5　委員は連携自治体委員、外部民間委員を含むものとし、当初委員は以下のとおりとする。ただし、代理出席を認めるものとする。

【外部委員】
○大分県 企画振興部 部長　　○大分市 商工農政部 部長　　○豊後大野市 副市長
○一般財団法人日本財団学生ボランティアセンター センター長
○日本政策投資銀行 大分事務所 所長
○一般財団法人セブン-イレブン記念財団 九重ふるさと自然学校 代表
○大分県中小企業家同友会 代表理事

【日本文理大学】
○学長（事業推進代表者）　○学長室長／人間力育成センター長（事業推進責任者）
○工学部長　○経営経済学部長　○大学院工学研究科長　○大学教育長
○産学官民連携推進センター長　○進路開発センター長

2　事業推進にあたり、取り組みに変更、追加が発生した場合や、より適切な検討・評価を行うために必要と認めた場合には、適宜、委員の変更および追加を認めるものとする。

（事務局）
6　本委員会の事務を処理するため、本学学長室に事務局を置く。

（その他）
7　このガイドラインに定めるもののほか、本委員会の運営に関し必要な事項が発生した場合は、その都度、各連携自治体と協議の上、決定する。

【平成 27 年度追記】
5 【外部委員】に特定非営利活動法人おおいたＮＰＯデザインセンター 代表理事を追加する。

【平成 28 年度追記】
5 【外部委員】の大分市 商工農政部 部長を大分市 農林水産部 部長に変更する。（組織変更）
5 【外部委員】の一般財団法人日本財団学生ボランティアセンター センター長を削除する。（利益相反関係にあたるため）

以上

日本文理大学　地（知）の拠点整備事業（大学ＣＯＣ事業）
平成２８年度　事業検討・評価委員会　次第

日　時：平成２９年3月３０日（木）１４：００～１６：００

場　所：日本文理大学　情報センター７階　第３会議室

１．開会

開会あいさつ（学長　平居　孝之）

２．事業検討・評価委員会　運営ガイドラインについて　資料１

３．出席者紹介

４．議事

Ⅰ．本年度の取り組み状況報告

（教育・研究・社会貢献、全体取組）　年次報告書　資料２

Ⅱ．本年度の成果に対する評価・意見交換

Ⅲ．来年度の事業計画について　資料３

５．その他

６．閉会

事務局：日本文理大学　学長室

日本文理大学　地（知）の拠点整備事業
平成２８年度　事業検討・評価委員会

＜委員名簿＞　　平成 29 年 3 月 30 日

○ 外部委員

所　　属	職　名	氏　名
大分県　企画振興部	部　長	廣瀬　祐宏 （代理：課長　磯田　健）
大分市　農林水産部	部　長	森本　亨 （代理：次長　直野　宏昭）
豊後大野市	副市長	赤嶺　謙二
一般財団法人セブン-イレブン記念財団 九重ふるさと自然学校	代　表	川野　智美
日本政策投資銀行　大分事務所	所　長	和田　康宏
大分県中小企業家同友会	代表理事	佐藤　貞一
特定非営利活動法人 おおいたＮＰＯデザインセンター	代表理事	山下　茎三

（敬称略・順不同）

○ 学内委員

所　　属	職　名	氏　名
【事業推進代表者】日本文理大学	学　長	平居　孝之
【事業推進責任者】日本文理大学 学長室／人間力育成センター	室長／ センター長	吉村　充功
日本文理大学　工学部	学部長	安田　幸夫
日本文理大学　経営経済学部	学部長	松下　乾次
日本文理大学　大学院　工学研究科	研究科長	室園　昌彦
日本文理大学　産学官民連携推進センター	センター長	池畑　義人
日本文理大学	大学教育長	河邉　博康（欠席）
日本文理大学　進路開発センター	センター長	稲富　丈夫

〈事業担当者〉

所属・役割	氏　名
学長室ＷＧ担当（全体）	釘宮　啓
学長室ＷＧ担当（教育）	鍋田　耕作
学長室ＷＧ担当（社会貢献）	髙見　大介

所属・役割	氏　名
ＣＯＣ担当・特任准教授	市田　秀樹
工学部・教授	鈴木　秀男
経営経済学部・教授	泉　丙完
経営経済学部・准教授	舛田　佳弘

日本文理大学　地（知）の拠点整備事業　連携推進会議　運営ガイドライン

（趣旨）

1　このガイドラインは、日本文理大学（以下、「本学」という。） 地（知）の拠点整備事業（以下、「COC事業」という。）の推進にあたり、本学と連携自治体とで構成する「連携推進会議（以下「本会議」という。）」の運営に関し、基本的なルールを定めるものである。

（目的）

2　本会議は、COC 事業の円滑な推進のため、本学と連携自治体各部署とが本事業にかかる地域課題を共有し、人材育成と政策課題に対応した地域振興のための具体的な取組とその進捗状況を把握・共有、改善を図ることを目的とする。

（議事進行）

3　本会議の議事進行にあたる議長は、本学学長とする。

（開催時期）

4　本会議は年間２回の開催とし、開催時期は４月および 10 月とする。ただし、平成 26 年度は 10 月のみの開催とする。

（構成員）

5　当初構成員は以下のとおりとし、各自治体担当部署の課長または室長または支所長の参加を求めるものとする。ただし、代理出席を認めるものとする。

【日本文理大学】

○学長（事業推進代表者）　○学長室長（事業推進責任者）　○副学長
○工学部長　○経営経済学部長　○大学院工学研究科長　○産学官民連携推進センター長
○FD 委員長　○人間力育成センター長　○学長室 WG 担当　○COC 事業担当特任教員

【大分県】

○企画振興部 政策企画課　　○企画振興部 観光・地域局 地域活力応援室
○商工労働部 商業・サービス業振興課　　○商工労働部 経営創造・金融課
○生活環境部 自然保護推進室　　○農林水産部 おおいたブランド推進課
○消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室
○教育庁 体育保健課

【大分市】

○企画部 企画課　○市民部 佐賀関支所　○農林水産部 農政課

○企画部 スポーツ振興課

【豊後大野市】

○総務課　○まちづくり推進課　○商工観光課　○高齢者福祉課

2　事業推進にあたり、取り組みに変更、追加が発生した場合、適宜、部局の変更および追加を認めるものとする。

（事務局）

6　本会議の事務を処理するため、本学学長室に事務局を置く。

（その他）

7　このガイドラインに定めるもののほか、本会議の運営に関し必要な事項が発生した場合は、その都度、各自治体担当部署と協議の上、決定する。

平成 26 年 10 月 29 日作成

平成 27 年 6 月 26 日一部修正

平成 28 年 6 月 27 日一部修正

平成 29 年 7 月 5 日一部修正

日本文理大学　地（知）の拠点整備事業（大学ＣＯＣ事業）
平成２９年度　第１回　連携推進会議　次第

日　時：平成２９年７月５日（水）１５：００～１７：１５

場　所：日本文理大学　情報センター７階

プレゼンテーションルーム（全体会・第１分科会）

第３会議室（第２分科会）

＜全体会①：１５：００～１５：２０＞

１．開会：　開会あいさつ（学長　菅　貞淑）

２．議事

（１）運営ガイドラインの変更について　資料１

（２）平成 28 年度取組状況報告　資料２－１～資料２－７

（３）平成 29 年度事業計画　資料３－１～資料３－３

＜分科会：１５：２５～１６：５５＞

（４）各プロジェクト報告・意見交換会（報告 各７分＋質疑５分、全体意見交換 20 分程度）

分科会①＜プレゼンテーションルーム＞：

報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
地域住民主体の地域づくり支援　豊後大野市千歳町「楽らく広場ひょうたん」活動サポート	坂口助教	５．健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ活動 豊後大野市緒方町における域学協働によるエコパーク認定活動に向けた取り組み	池畑教授	１．小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 ３．自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）
豊後大野市の地域資源を活かしたフィールドスタディ科目への展開と地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究	今西准教授	３．自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育） ７．地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化
大分県農業のブランド化と関連産業活性化を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する研究開発	川崎教授	２．人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
高齢者向けものづくり教材の開発	鈴木(秀)教授	１．小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 ２．人口減少社会を支えるための先進的なものづくり

分科会②＜第３会議室＞：

報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
佐賀関地区における地域コミュニティでの活動を通じた観光・商店街・地域の活性化	吉村教授	１．小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 ４．地域商店及び商店街の活性化による地域振興 ７．地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化
スポーツイベント実践を通した地域創生人材の育成	堀准教授	５．健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
地域経済を考慮した地域課題取組みに向けたプラットフォーム構築 生きがいのあるくらしを創るオープンイノベーションワークショップ	市田准教授	２．人口減少社会を支えるための先進的なものづくり ４．地域商店及び商店街の活性化による地域振興
フィールド・スタディを中心とした学生主体の地域活性化カリキュラム	本村教授	４．地域商店及び商店街の活性化による地域振興

＜全体会②：１７：００～１７：１０＞

（５）分科会報告

（６）その他

３．今後のスケジュールについて

４．閉会

事務局：日本文理大学　学長室

日本文理大学　地（知）の拠点整備事業　平成２９年度　第１回　連携推進会議

＜出席者名簿＞　　平成 29 年 7 月 5 日

○大分県

所　　属	職　名	氏　名	主な連携取組内容
企画振興部　政策企画課	副主幹	平山　聡	本学との連携・調整窓口
企画振興部　観光・地域局 地域活力応援室	室長	岩崎　栄	過疎地域の集落維持・活性化活動
商工労働部　商業・サービス業振興課	副主幹	中宮　美穂	商店街と連携した地域活性化活動
教育庁　体育保健課	指導主事	武石　隆一	総合型地域スポーツクラブ支援活動
生活環境部　自然保護推進室	主査	工藤　慎也	ユネスコエコパーク認定推進活動
農林水産部　おおいたブランド推進課	主幹	堺田　健	地域ブランド発掘による６次化活動
商工労働部　経営創造・金融課	主任	麻生　柳太朗	学生起業家マインド育成活動
大分県消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室	室長	石垣　和之	ＮＰＯ法人との協働・経営支援活動

（敬称略）

○大分市

所　　属	職　名	氏　名	主な連携取組内容
企画部　企画課	参事補	金子　明弘	本学との連携・調整窓口
	主査	中野　悠樹	
市民部　佐賀関支所	主査	飯塚　　智	地域と連携した地域活性化活動
企画部　スポーツ振興課	課長	永田　佳也	健康で活力に満ちた生活支援活動
農林水産部　農政課	次長兼課長	重松　勝也	地域ブランドを活かした６次化活動

（敬称略）

○豊後大野市

所　　属	職　名	氏　名	主な連携取組内容
総務課	課長	左右知 新一	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課	課長	堀　誉裕	集落維持・活性化活動
商工観光課		（欠席）	エコパーク認定推進活動
高齢者福祉課	課長補佐	高野　辰代	高齢社会における課題解決･福祉活動

（敬称略）

○日本文理大学

所　属・役　職	氏　名
学長	菅　貞淑
学長室長	吉村　充功
副学長	橋本　堅次郎
副学長	島岡　成治
大学院工学研究科長／工学部長	室園　昌彦
経営経済学部長	松下　乾次

所　属・役　職	氏　名
産学官民連携推進センター長 ／学長室ＷＧ担当(研究)	池畑　義人
ＦＤ委員長	西村　謙司
学長室ＷＧ担当(全体)	釘宮　啓
人間力育成センター長 ／学長室ＷＧ担当(社会貢献)	髙見　大介
学長室ＷＧ担当（教育）	鍋田　耕作
ＣＯＣ事業担当特任教員	市田　秀樹

日本文理大学　地（知）の拠点整備事業（大学ＣＯＣ事業）
平成２９年度　第２回　連携推進会議　次第

日　時：平成２９年１１月２９日（水）１５：００～１７：１５

場　所：日本文理大学　情報センター７階

プレゼンテーションルーム（全体会・第１分科会）

第３会議室（第２分科会）

＜全体会①：１５：００～１５：１５＞

１．開会：　開会あいさつ（学長　菅　貞淑）

２．議事

（１）平成２９年度取組状況報告　資料１～資料３

＜分科会：１５：２０～１６：５０＞

（２）各プロジェクト報告・意見交換会

（報告 各７分（最大 10 分）＋質疑５分程度、全体意見交換 15 分程度）

分科会①＜プレゼンテーションルーム＞：

No	報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
1	地域住民主体の地域づくり支援 ～つながりある地域に向けて～ （豊後大野市千歳町での取組み）	坂口助教	５．健康増進及び生活支援による コミュニティの維持
2	豊後大野市大野町土師地区における 住民と学生による地域コミュニティ活動	池畑教授	１．小規模・高齢化が深刻な集落に おけるコミュニティの維持・活性化 ３．自然の積極的な活用による保全と 地域活性化（観光・教育）
3	域学協働によるエコパーク認定活動に向けた 取り組み		
4	豊後大野市の地域資源を活かしたフィールド・スタディ科目への展開と地域観光プロモーションにおける需要予測に関する研究	今西准教授	３．自然の積極的な活用による保全と 地域活性化（観光・教育） ７．地域ブランドの発掘による 交流人口の増加・産業の活性化
5	高齢者向けものづくり教材の開発	鈴木(秀)教授	１．小規模・高齢化が深刻な集落に おけるコミュニティの維持・活性化 ２．人口減少社会を支えるための 先進的なものづくり

分科会②＜第３会議室＞：

No	報告タイトル	報告者	地域課題該当テーマ
1	佐賀関地区における地域コミュニティでの活動を通じた観光・商店街・地域の活性化	吉村教授	１．小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化 ４．地域商店及び商店街の活性化による地域振興 ７．地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化
2	ＣＯＣ＋協働開発科目『大分の地域ブランド創造体験』実施計画		
3	生きがいのあるくらしを創るオープンイノベーションワークショップ	市田准教授	２．人口減少社会を支えるための先進的なものづくり
4	地域経済を考慮した地域課題取組みに向けたプラットフォーム構築	福島教授	２．人口減少社会を支えるための先進的なものづくり ４．地域商店及び商店街の活性化による地域振興
5	フィールド・スタディを中心とした学生主体の地域活性化カリキュラム	本村教授	４．地域商店及び商店街の活性化による地域振興
6	スポーツイベント実践を通した地域創生人材の育成	堀准教授	５．健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持

＜全体会②：１６：５５～１７：１５＞

（３）分科会報告

（４）全体連絡事項

（５）その他

３．閉会

事務局：日本文理大学　学長室

【配付資料一覧】

○ 次第

○ 出席者名簿／配席図

○ 資料１ ： 平成 29 年度　日本文理大学　COC 事業総括シート

○ 資料２ ： 平成 29 年度　日本文理大学　COC プロジェクト一覧

○ 資料３ ： 日本文理大学 COC 事業紹介 ポスター

○ 分科会資料 ： 各報告プロジェクトに関するパワーポイント等の抜き刷り

○ 参考資料１ ： 連携推進会議　運営ガイドライン

○ 参考資料２ ： おおいた地域創生リーダー養成講座案内（COC+県委託事業）

○ 参考資料３ ： 「地域創生人材」育成のためのマネジメント実践講座案内

日本文理大学　地（知）の拠点整備事業　平成２９年度　第２回　連携推進会議

＜出席者名簿＞　　平成 29 年 11 月 29 日

○大分県

所　　属	職　名	氏　名	主な連携取組内容
企画振興部　政策企画課	副主幹	平山　聡	本学との連携・調整窓口
企画振興部　観光・地域局 地域活力応援室	主任	岡本　海里	過疎地域の集落維持・活性化活動
商工労働部　商業・サービス業振興課	副主幹	中宮　美穂	商店街と連携した地域活性化活動
教育庁　体育保健課	指導主事	武石　隆一	総合型地域スポーツクラブ支援活動
生活環境部　自然保護推進室	主査	工藤　慎也	ユネスコエコパーク認定推進活動
農林水産部　おおいたブランド推進課	主幹	堺田　健	地域ブランド発掘による６次化活動
商工労働部　経営創造・金融課		（欠席）	学生起業家マインド育成活動
大分県消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室	室長	石垣　和之	ＮＰＯ法人との協働・経営支援活動

（敬称略）

○大分市

所　　属	職　名	氏　名	主な連携取組内容
企画部　企画課		（欠席）	本学との連携・調整窓口
市民部　佐賀関支所	参事補	中島　恭介	地域と連携した地域活性化活動
企画部　スポーツ振興課	課長	永田　佳也	健康で活力に満ちた生活支援活動
農林水産部　農政課	次長兼課長	重松　勝也	地域ブランドを活かした６次化活動

（敬称略）

○豊後大野市

所　　属	職　名	氏　名	主な連携取組内容
総務課		（欠席）	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課		（欠席）	集落維持・活性化活動
商工観光課		（欠席）	エコパーク認定推進活動
高齢者福祉課		（欠席）	高齢社会における課題解決・福祉活動

（敬称略）

○日本文理大学

所　属・役　職	氏　名
学長	菅　貞淑
学長室長	吉村　充功
副学長	橋本　堅次郎
副学長	島岡　成治
大学院工学研究科長／工学部長	室園　昌彦
経営経済学部長	松下　乾次

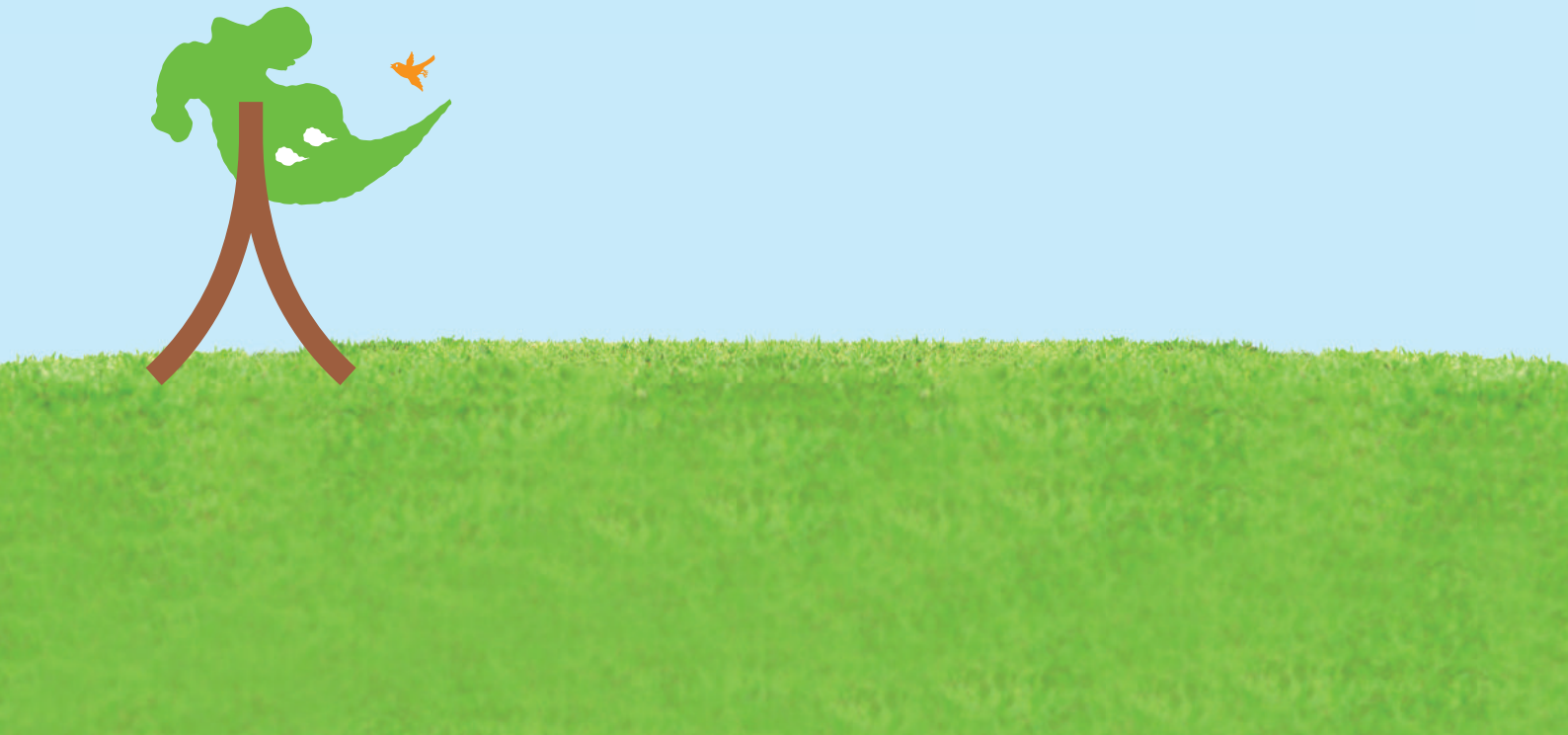
所　属・役　職	氏　名
産学官民連携推進センター長 ／学長室ＷＧ担当（研究）	池畑　義人
ＦＤ委員長	西村　謙司
学長室ＷＧ担当（全体）	釘宮　啓
人間力育成センター長 ／学長室ＷＧ担当（社会貢献）	髙見　大介
学長室ＷＧ担当（教育）	鍋田　耕作
ＣＯＣ事業担当特任教員	市田　秀樹

おおいた、つくりびと

6. 大学 COC 事業 報道リスト

平成 29 年度 大学 COC 事業 報道リスト

・新聞各社・テレビ局各社 報道リスト
・新聞記事抜粋



平成29年度【大学COC事業】新聞掲載記事リスト

No.	見出し	内　容（本報告書掲載記事）	新聞名	掲載日付
1	ＮＢＵビデオ通信「ゆふいん温泉まつり　献湯祭」	地域の課題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。 （p.53 動画ニュース制作「地域の芽、学生の目 ＮＢＵビデオ通信」）	大分合同新聞（夕刊）	2017年5月2日 火曜日
2	ＮＢＵビデオ 通信「醸造の町臼杵四社合同蔵開き2017」地酒に愛情、町に誇り	地域の課題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。 （p.53 動画ニュース制作「地域の芽、学生の目 ＮＢＵビデオ通信」）	大分合同新聞（夕刊）	2017年6月6日 火曜日
3	日本文理大で「ふれあい市長室」	「ふれあい市長室」において、佐藤大分市長と学生の間で意見交換を行う。 （p.30 『地域にいきるものづくり』を目指したプロジェクト科目の実践、p.73 中判田駅を中心としたまちづくりプロジェクト）	大分合同新聞	2017年6月8日 木曜日
4	ＮＢＵビデオ通信　「第2回番匠川鮎友釣り大会」漁法に驚きと刺激受ける	地域の課題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。 （p.53 動画ニュース制作「地域の芽、学生の目 ＮＢＵビデオ通信」）	大分合同新聞（夕刊）	2017年7月13日 木曜日
5	ＮＢＵビデオ通信「竜門の滝・滝開き」映像に工夫を凝らす	地域の課題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。 （p.53 動画ニュース制作「地域の芽、学生の目 ＮＢＵビデオ通信」）	大分合同新聞（夕刊）	2017年7月27日 木曜日
6	ＮＢＵビデオ通信「親子ふれあい消防パーク」非常時の心構え学ぶ	地域の課題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。 （p.53 動画ニュース制作「地域の芽、学生の目 ＮＢＵビデオ通信」）	大分合同新聞（夕刊）	2017年8月10日 木曜日
7	ＮＢＵビデオ通信「七夕ブロードウェイ」幻想的なクライマックス	地域の課題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。 （p.53 動画ニュース制作「地域の芽、学生の目 ＮＢＵビデオ通信」）	大分合同新聞（夕刊）	2017年8月22日 火曜日
8	ＮＢＵビデオ通信「賀来の市」見せ場の妙技に拍手	地域の課題や取り組みを、学生目線での動画ニュースとして配信。 （p.53 動画ニュース制作「地域の芽、学生の目 ＮＢＵビデオ通信」）	大分合同新聞（夕刊）	2017年9月14日 木曜日
9	豊後大野に来てね 日本文理大生 列車で自作絵はがきを配布	豊後大野の魅力をポストカードにまとめてＪＲ列車内で配布。 （p.40 あそぼーい！ポストカードプロジェクト）	大分合同新聞	2017年10月5日 木曜日
10	豊後大野紹介ポストカード	豊後大野の魅力をポストカードにまとめてＪＲ列車内で配布。 （p.40 あそぼーい！ポストカードプロジェクト）	読売新聞	2017年10月20日 金曜日
11	若者が作る企業ＰＲ動画　地元4社の特色に注目「採用される側」の視点で	地元企業のプロモーションビデオを学生アイデアで制作。 （p.58 地方創生のための学生目線による地域企業リクルートビデオ制作プロジェクト）	大分合同新聞	2018年1月9日 火曜日
12	興味を引く仕掛け　人の流れ生み出す　日本文理大生が客の回遊性高める実験	パークプレイス大分で客の回遊性を高める実験を実施。 （p.43 「シカケ」から見えてくる地域課題　シカケプロジェクト）	大分合同新聞	2018年3月1日 木曜日

平成29年度【大学COC事業】放送リスト

No.	見出し（本報告書掲載記事）	番組名	放送局	放送日
1	Kids Smile Project「 ウミネコの会との田植え」 （p.60 Kids Smile Project）	Ｊ：ＣＯＭ「地元情報満載デイリーニュース」	ＯＣＴ	2017年6月8日 木曜日
2	関崎の自然林保全活動 （p.29 佐賀関半島における地域体験交流活動研修 『プロジェクト1』の取り組み）	Ｊ：ＣＯＭ「地元情報満載デイリーニュース」	ＯＣＴ	2017年6月12日 月曜日
3	大学で開発中！水中ロボット　様々な場面で活躍に期待 （p.76 防災用小型無人水中観測システムの研究開発）	TOS「ゆ～わくワイド＆ニュース」	TOS	2017年6月27日 火曜日

大分合同新聞 2017 年 5 月 2 日 火曜日（夕刊）

ゆふいん温泉まつりであった「お湯かきレース」＝4月23日、由布市湯布院町

ズームアップ
NBUビデオ通信

「ゆふいん温泉まつり　献湯祭」

神様も喜び、恵みますます

ことし67回目の「ゆふいん温泉まつり」が由布市湯布院町であった。

祭りは献湯祭という儀式から始まる。地域の代表や温泉旅館関係者らが、お薬師様に温泉の湯を竹筒に入れ供える。温泉に恵恵を受けるこの地域にとってはなくてはならないお祭りだ。皆がこの自然の恵みに心から感謝していることに感動すら覚える。

宮崎翔也さん

その後、ゆふいん子供神楽の奉納の舞があり、太鼓や笛などの音が響き渡る。温泉の神様もきっと喜び、ますます湯の恵みがもたらされるだろう。

おけで湯を運ぶ「お湯かきレース」では、見守る市民や観光客が一体となり「がんばれ！」といった声援や笑いが絶えない。

伝統に根ざしたこの祭りで、地域の人々の温泉に対する思いが継承されている。

（日本文理大学工学部情報メディア学科3年、宮崎翔也）

大分合同新聞 2017 年 6 月 6 日 火曜日（夕刊）

「醸造の町臼杵四社合同蔵開き2017」の様子＝5月27日、臼杵市観光交流プラザ

ズームアップ
NBUビデオ通信

「醸造の町臼杵四社合同蔵開き2017」

地酒に愛情、町に誇り

新酒シーズンを迎えた5月27日、「醸造の町臼杵四社合同蔵開き2017」が市観光交流プラザであった。

市内の酒造会社が会し、会場限定の酒などを披露。各社のコーナーに列をなす来場者から午後5時の乾杯とともに大きな歓声が湧いた。新酒への喜びと地酒への愛情が伝わるイベントだ。自らの杯を持参する熱心な参加者もいて、臼杵の酒の人気の高さを目の当たりにする。

池田周平さん

蔵元のスタッフから酒の香りや味の説明を受けながら飲める〝角打ち〟は、開放的な雰囲気で参加者の半数は女性であるという。

実行委員長の藤居徹さんは「城下町で古くからしょうゆやみそ、酒などの醸造文化が根付いている」と語る。臼杵は〝味覚を構成する町〟という強い誇りを感じた。

（日本文理大学工学部情報メディア学科2年、池田周平）

大分合同新聞 2017 年 6 月 8 日 木曜日

佐藤市長（右）と意見を交わす学生＝大分市の日本文理大学

日本文理大で「ふれあい市長室」

まちづくりに若者の意見を

大分市の佐藤樹一郎市長は同市一木の日本文理大学で本年度最初のふれあい市長室を開いた。

学生約60人が参加。佐藤市長が昨年度策定した市総合計画の概要や豊予海峡ルートの必要性などを説明。「これからの大分をつくっていくのは若者たち。ぜひまちづくりの意見を出してほしい」と呼び掛けた。

工学部の学生が、ロボットを地域活性化に生かす取り組みやJR中判田駅を中心とするまちづくりプロジェクトの研究成果を発表。

佐藤市長に対し「行政が学生に取り組んでほしい課題は何か」「地域課題を解決するのに大切なことは」などと質問を投げかけた。

松下萌絵さん(22)＝工学部建築学科4年、同市坂ノ市中央・顔写真＝は「まちづくりのためには地域住民の合意形成が重要であることが分かった。今後の研究の参考にしたい」と話した。

ふれあい市長室は任期前半の2015、16年度は全中学校区で一般市民向けに開催。後半の17、18年度は大学や高校などに出向き、若者から意見を聞く。

大分合同新聞 2017 年 7 月 13 日 木曜日（夕刊）

ズームアップ
NBUビデオ通信

「第２回番匠川鮎友釣り大会」

漁法に驚きと刺激受ける

「友釣り」で競技する参加者

乱獲に配慮した「アユの友釣り」で競技

前田裕城さん

アユ漁解禁日が近づく6月25日、「第2回番匠川鮎友釣り大会」が佐伯市の番匠川であった。有名な番匠川のアユということもあり、半数以上が県外からの参加者だった。

アユの習性を利用したおとりアユで、緊張感のある大会だった。

悪天候での開催となったが、午後には回復し蒸し暑い日に。雨、川の中という難しい環境の中での撮影の対価として、釣りの魅力や楽しさ、佐伯の豊かな自然など、普段感じることのできない刺激を受けた。

今大会優勝の山本康一さん（大分市）は、21匹、1340㌘の好成績。アユがかかるまで粘る根気と集中力、勘が優勝を左右する。

（日本文理大学工学部情報メディア学科3年、前田裕城）

大分合同新聞 2017 年 7 月 27 日 木曜日（夕刊）

ズームアップ
NBUビデオ通信

「竜門の滝・滝開き」

映像に工夫を凝らす

防水カメラでウオータースライダーを撮影

前田裕城さん

夏休みが近づく7月16日、安全祈願を目的とした「竜門の滝・滝開き」が行われた。夏の避暑地としても有名で、朝からたくさんの親子連れでにぎわった。

“天然のウオータースライダー”は、スリルと涼しさを感じることができる。夏休みシーズンのお出掛けスポットとして、思い出づくりに県外からも多くの人が訪れる。

今回は、滑りやすく、けがや機材の水ぬれなどが心配な難しい撮影になった。防水のアクションカメラを用いて実際に滝を滑ったり、上空からはドローン（小型無人機）も用いた。

きない滝の上からの全体風景や、滑ったことのない人にも伝わるよう映像に工夫を凝らした。自然の美しさや滝滑りの迫力を感じてほしい。

（日本文理大学工学部情報メディア学科3年、前田裕城）

大分合同新聞 2017 年 8 月 10 日 木曜日（夕刊）

ズームアップ
NBUビデオ通信

「親子ふれあい消防パーク」

非常時の心構え学ぶ

ドクターヘリコプターを見学する来場者

AEDを使った心肺蘇生を体験

津行亮介さん

夏休みに入ったばかりの7月22日、大分市の大分銀行ドーム前の広場で「親子ふれあい消防パーク」があった。

各ブースでは煙の中での視界や地震、救急救命などを親子で一緒に体験でき、家族の絆も深まっていく姿が印象的だった。

大分市消防局の主催で、子どもたちをはじめ広く市民に、防火・防災を意識し「安全・安心を身近に実感できるまちづくり」を推進することが目的。

普段近くで見ることのできない消防車やドクターヘリコプター、防災ヘリコプターなどを実際に触れることができ、子どもだけでなく大人も楽しめる催しだ。

このイベントを通して、万が一の火災や救急時にも、落ち着いて行動できる心構えを学ぶことができたと思う。

（日本文理大学工学部情報メディア学科3年、津行亮介）

大分合同新聞 2017 年 8 月 22 日 火曜日（夕刊）

大分七夕まつりで夜空に舞い上がる2万個の風船

幻想的なクライマックス

ズームアップ
NBUビデオ通信
「七夕ブロードウェイ」

台風5号の影響で風雨が強まる「大分七夕まつり」2日目の8月5日、「七夕ブロードウェイ」があった。会場の大分市の中央通りでは、この日のフィナーレを飾るべく、2万個もの七色の風船が夜空にリリースされ、幻想的なクライマックスを迎えた。

リリースの瞬間には、3～4㍍の高さから撮影ができるカメラを使用したり、許可を得て近隣のビルの屋上にカメラを設置するなど、計4台のカメラを用いてさまざまなアングルから撮影に挑んだ。

堺陸人さん

イベントの準備には多くのボランティアの協力があったが、今回は見逃されがちなボランティア活動に焦点を当ててみた。会場近くの暑い体育館の中での作業だったが、彼らの笑顔と努力が、イベントを成功に導いたのだと感じた。

（日本文理大学工学部情報メディア学科3年、境陸人）

大分合同新聞 2017 年 9 月 14 日 木曜日（夕刊）

賀来の市。鳥居で行われる妙技「立傘の鳥居越し」

見せ場の妙技に拍手

ズームアップ
NBUビデオ通信
「賀来の市」

賀来神社の秋季大祭「賀来の市」が1日から始まった。今年は6年に1度の「卯酉の大名行列」の開催にあたり、祭りは11日間行われた。

明治維新後に始まったもので、伝統の衣装を身にまとい貴重な道具を携えた老若男女が古式の所作や掛け声をかけながら練り歩く様は勇壮で圧巻だった。

道中には三つの鳥居があり、その鳥居では見せ場の妙技「立傘の鳥居越し」がある。中学生が鳥居の上を越すように傘を投げ上げ、鳥居をくぐって受け止めると沿道からは大きな拍手と歓声が起きた。

賀来神社の佐藤豊宮司は「大人から子どもまで幅広い世代が一つになる欠かせない行事」であると語る。

賀来という地域だからこそ成せる伝統と郷土愛に満ちた祭事で、地域への愛情と誇りを強く感じた。

（日本文理大学工学部情報メディア学科2年、池田周平）

池田周平さん

大分合同新聞 2017 年 10 月 5 日 木曜日

豊後大野に来てね
日本文理大生 列車で自作絵はがきを配布

日本文理大学経営経済学部の学生5人が7日、豊後大野市の豊かな自然や日常の風景を写した自作の絵はがきセットをJR豊肥線の観光列車で配った。学生たちは、100人を超える国内外からの乗客に「豊後大野にも立ち寄って」と呼び掛けた。

同学部は2015年から、ぶんご大野里の旅公社と連携して市内の新しい観光価値の創出に取り組んでいる。8月に原尻の滝や普光寺磨崖仏、豊後清川駅のホームなどを撮影。5枚一組を2千セット作り、週末に別府―阿蘇（熊本県）間を走る「あそぼーい！」で配ることになった。

今春、埼玉県から大分市に引っ越した深沢景子さん（43）は、夫と列車好きの息子2人の計4人で乗車。「豊後大野にはまだ行ったことがない。撮影場所を訪れてみたい」。名所・岩戸の景観を走る「あそぼーい！」の絵はがきを手にした長男孝樹君（6）は「とてもうれしい」と笑顔を見せた。

学生（大分市）からもらった豊肥線の列車の絵はがきを手に喜ぶ親子連れ

読売新聞 2017 年 10 月 20 日 金曜日

豊後大野紹介ポストカード

日本文理大生作成 観光列車乗客に配布

乗客にポストカードを配布する学生（左）

日本文理大（大分市）で観光振興を学ぶ学生約40人が、豊後大野市の観光スポットを紹介するポストカードを作成し、県内を期間限定で運行している観光列車「あそぼーい！」の乗客に配布した。

同大は2015年度から、一般社団法人「ぶんご大野里の旅公社」と連携して観光パンフレットを作成するなどの観光PR活動を続けている。ポストカードは同活動の一環で作成。学生が撮影した「原尻の滝」や「普光寺磨崖仏」など5か所の写真が掲載されており、5枚1組にして2000セットを作った。

1～3年の5人が今月7日、「あそぼーい！」に乗り、乗客に「一度訪れてみてください」などと声をかけながらカードや観光パンフレットを手渡した。

「あそぼーい！」は7～12月の週末を中心に、別府・大分駅―阿蘇駅（熊本県）間を1日2往復しており、三重町駅（豊後大野市）などにも停車する。2年の八坂龍太郎さん（19）は「多くの人が豊後大野に降り立つきっかけになれば」と話した。

友人や家族と乗車した別府市の主婦小幡寿美子さん（76）は「県内に住んでいても知らない場所がある。普光寺の石仏などを見てみたい」と興味深げに語った。

大分合同新聞 2018 年 1 月 9 日 火曜日

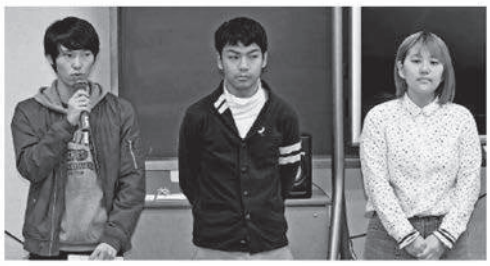
若者が作る企業PR動画

地元4社の特色に注目

「採用される側」の視点で

文理大生

大分市一木の日本文理大学の学生が地元企業のプロモーション動画を制作した。就職活動は売り手市場が続く中、どうすれば若者に響くPRをできるか、採用される側の視点を生かした。おもてなしを追求する姿勢や社員同士の仲の良さに注目した内容に、依頼した企業関係者は「自社の特色がよく出ている。思った以上の出来栄え」などと喜んだ。



成果発表会で、制作した動画の説明をする学生＝大分市の日本文理大学

地方創生に向け、地元企業と大学がある大在地域の魅力を連携した大学の取り組み。本年度で3年目。

工学部情報メディア学科の1～4年生約20人が、募集に応じた4社（大分市3社、臼杵市1社）のリクルートビデオのほか、PRする動画などを制作。班ごとに企画や取材、編集作業をして、それぞれ約3～6分の内容にまとめた。

昨年12月下旬、同大学であった成果発表会には、企業関係者ら約30人が出席。学生は動画を上映した後、コンセプトや工夫した点を説明した。

双葉タクシー（大分市）の動画は若い男性ドライバーが説明役となり、サービスを紹介。乗降時にドライバーが客のサポートをしている様子など、「ホテルマンのようなサービス」を印象付けることを目指した。

トキハインダストリー（同）は、就職を考える学生が会社の雰囲気を感じ取れるよう、多くの社員にインタビュー。社歴が異なる複数の社員に先輩、後輩のことも聞き、社員同士の仲の良さも表現した。

動画を見た出席者は「自分たちの長所をうまく引き出してくれている」「学生だから浮かぶアイデア。実際に学生の採用活動で使いたい」などと感想を述べた。

動画の演出などを担当した2年の池田周平さん（20）は「技術だけでなく、企業の人と接してコミュニケーション面でも成長できた。いい経験になった」と話した。（大津麻菜）

大分合同新聞 2018 年 3 月 1 日 木曜日

興味を引く仕掛け 人の流れ生み出す

日本文理大生が客の回遊性高める実験

大分市の大型商業施設

店舗がない場所 「ケンケンパ」や落書き

学生が設置した仕掛け「ケンケンパ」で遊ぶ子ども＝大分市のパークプレイス大分

大分市一木の日本文理大学の学生が、市内の大型商業施設パークプレイス大分で、客の回遊性を高める実験に取り組んだ。にぎわう施設の中でも人通りが少ない場所に、興味を引くアート感覚の仕掛けを設置。人の流れを生み出す効果があるか試した。結果を検証して、商店街などの活性化に生かしていきたい考え。

地域の課題解決に貢献する日本文理大学の「まちなか『シカケプロジェクト』」。工学部の7人がプログラミングの知識や技術を生かし、回遊性アップを図る仕掛け2種類を開発した。

実験は2月3、4の両日に行った。道は広いが店舗がなく、客が寄り付きにくい通路には、踏むとLEDライトが光る「ケンケンパ」を設置。気付いた親子らが来て、仕掛けを踏んで歩いていた。

1階の池近くにはスクリーンを置き、2階の特定場所から光を出すペンで落書きができるようにした。書ける場所を探す人の流れを誘発するのが狙い。2年の山下涼介さん（20）らによると、実際に1階で買い物をしていた大人が2階に上がって落書きする姿が見られたという。

商店街にどう人を呼び込むかなど、商業の活性化は地域の大きな課題。実験結果は経営経済学部の学生らが行動分析しており、「意図した通りにはならなかったが人の動きに変化はあった」という。今後は長期的なプロジェクトを企画。効果的な仕掛けの開発をさらに進め、生かす方法を模索していく。

指導する市田秀樹特任准教授は「プロジェクトを通して、学生が地域の課題解決に積極的に関わる意識を高めることも期待している」と話している。（大津麻菜）

NBUがシカケるCOC事業の今を伝えるwebとマガジン。

coc-nbu.jp

Since 2015 Nippon Bunri University, COC MAGAZINE

coc-nbu.jp にて、各号連携記事を掲載。

QR

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」平成 26 年度採択

『豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成』

平成 29 年度
日本文理大学
「地（知）の拠点整備事業」 年次報告書

発行日 : 平成 30 年 3 月 30 日
編　集 : 学校法人　文理学園
日本文理大学　大学 COC 事業担当
編集責任者　吉村充功 （事業推進責任者）
〒870−0397 大分県 大分市一木 1727
e-mail: coc@nbu.ac.jp
発行者 : 日本文理大学　学長　菅 貞淑
印　刷 : 三和印刷出版 (株)

文部科学省
地(知)の拠点

NBU NIPPON BUNRI UNIVERSITY 日本文理大学